

北陸高速自動車道

埋蔵文化財発掘調査報告書

長所遺跡
蛇山遺跡
地蔵塚

1976

新潟県教育委員会

北陸高速自動車道
埋蔵文化財発掘調査報告書

長所遺跡
蛇山遺跡
地蔵塚

1976

新潟県教育委員会

序

本書は、北陸高速自動車道の建設に伴い、昭和49年度新潟県教育委員会が調査主体となって発掘調査を実施した、燕市長所遺跡・長岡市蛇山遺跡・地蔵塚の発掘調査記録である。

本調査により、長所遺跡では奈良時代から中世に及ぶ遺物群が検出され、低湿地における遺跡様相の一端が明らかになり、蛇山遺跡においては平安時代と推定される掘立柱の建物跡が検出され、古代の越後を考えるうえにおいて貴重な資料を得た。また地蔵塚では塚の構築法成立年代とその性格が明らかになった。

近年、低湿地や塚の調査が進められてきているが、本調査の成果が今後の研究の一助となれば幸である。

終わりに本調査に参加された調査員各位はもとより、多大の御協力御援助を賜わった地元燕市、長岡市及び両教育委員会関係者、また計画から調査実施に至るまで格別の御配慮を賜わった日本道路公団・県高速道路課・燕用地事務所の各位に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第である。

昭和51年3月

新潟県教育委員会

教育長 厚 地 武

例　　言

1. 本書は北陸高速自動車道路の建設に伴って消滅する燕市長所遺跡・長岡市蛇山遺跡・地蔵塚につき、日本道路公団から新潟県教育委員会が委嘱を受けて発掘調査を実施したその報告書である。
2. 遺物の整理作業は、県教育庁文化行政課埋蔵文化財担当職員があたった。
3. 本書の執筆は、発掘担当者を中心にして各調査員との共同討議検討の上、分担執筆をしたもので、文末に執筆者の氏名を明記した。
4. 遺物の実測・写真撮影・図版の作成は、関係する各項の執筆担当者が主としてあたり、発掘担当者と協議しながら作業を進めた。
5. 報告文中における諸氏各位の氏名については、敬称を略させて頂いた。
6. 長所遺跡発掘調査報告の浦田川東遺跡・長所遺跡の概要および遺物については、燕市教育委員会の資料を使用させて頂いた。
7. 発掘調査および遺物整理において次の諸氏・機関から御指導・御助言を賜った。
厚く御礼を申し上げる。（敬称略・五十音順）

上原甲子郎、井上慶隆、奥田直栄、木下竜也、富沢亮光、中村孝三郎

目 次

長 所 遺 跡

I 調査の経緯	1
1. 調査に至る経過	
2. 調査の経過	
II 遺 跡	4
1. 遺跡の立地	
2. 遺跡周辺の景観	
3. グリッドの設定と土層	
III 遺 物	10
1. 土器及び陶磁器	
2. 土 製 品	
3. 銭 貨	
4. 石 製 品	
5. 木製品・植物種子	
IV 周辺遺跡の概要と出土遺物	18
1. 捕田川東遺跡の概要	
2. 長所館跡の概要	
V 総 括	21
1. 新潟平野における低湿地の遺跡について	
2. 出土遺物について	
3. ま と め	

蛇山遺跡発掘調査報告

I 発掘調査に至る経過	27
II 発掘調査日誌	28
III 遺跡の地理的環境	30
IV 遺跡の歴史的環境	32
V グリッド設定と発掘調査	35
VI 遺構	37
VII 出土遺物	39
VIII 蛇山遺跡について	44

地蔵塚発掘調査報告

I 地蔵塚の概観	45
II 地蔵塚の発掘日誌	46
III 地蔵塚に関する伝承	47
IV 白鳥町の塚	48
V 塚の外形と現状	49
VI 内部構造	49
VII 遺物	54
VIII 地蔵塚について	56

(1) 地蔵塚の構築手順とその年代
(2) 地蔵塚の性格

図版目次

- 図版第1図 長所遺跡の遠景（東側より）、長所遺跡の近景（東側より）
- 図版第2図 長所遺跡の近景（南側より）、発掘風景
- 図版第3図 19A北側断面、19A木杭出土状態
- 図版第4図 11T北側断面、15E西側断面、17C北側断面
- 図版第5図 遺物出土状態（須恵器・長頸壺）、遺物出土状態（中世陶質土器）
- 図版第6図 遺物出土状態（須恵器・中世陶質土器・棒状木器）
- 図版第7図 須恵器
- 図版第8図 土師器、土師質土器、土錘
- 図版第9図 中世陶質土器
- 図版第10図 近・現代陶磁器、砥石、植物種子、棒状木器、木杭
- 図版第11図 浦田川東遺跡出土遺物
- 図版第12図 浦田川東遺跡出土遺物、長所館跡出土遺物
- 図版第13図 蛇山遺跡周辺の航空写真
- 図版第14図 蛇山遺跡の近景、発掘グリッド
- 図版第15図 1. BN26甕出土状況 2. BN28壺出土状況 3. BP31東壁断面
- 図版第16図 建物跡（南東側より）、BO29南側断面にみられる柱穴5
- 図版第17図 建物跡（西側より）、建物跡（北側より）
- 図版第18図 1. 滶状遺構と北側柱穴列（東側より） 2. 滞池状遺構と北側柱穴列（西側より）
3. 柱穴2の根固め状況 4. ピット13 5. 柱穴1 6. 柱穴2 7. 柱穴4
8. 柱穴4とピット14
- 図版第19図 1. 柱穴5 2. 柱穴5 3. 柱穴6 4. 柱穴7 5. 柱穴9と柱穴8 6. 柱穴8 7. 柱穴11と柱穴10 8. 柱穴12
- 図版第20図 蛇山遺跡出土遺物（1）
- 図版第21図 蛇山遺跡出土の須恵器
- 図版第22図 地蔵塚の全景（東より）、地蔵塚の全景（北東より）
- 図版第23図 地蔵塚の近景、地蔵尊像
- 図版第24図 1. OCセクション 2. OAセクション 3. ODセクション 4. OBセクション
5. 寛永通宝出土状態 6. 灰釉陶器出土状態 7. 松の年輪 8. 竿柱
- 図版第25図 土壙（東より）、土壙（北西より）
- 図版第26図 地蔵塚の遺物

挿図目次

長所遺跡

第1図	長所遺跡と周辺の地形	5
第2図	燕市長所付近の微地形	6
第3図	グリッド設定図	7
第4図	土層柱状図	8
第5図	土層断面図	9
第6図	土層模式図	9
第7図	須恵器・土師器	11
第8図	須恵器・土師器拓本	13
第9図	中世陶質土器拓本・実測図	15
第10図	錢貨	16
第11図	土師質土器・中世陶質土器	16
第12図	砥石・土鍤	17
第13図	浦田川東遺跡・長所館跡出土遺物	19

蛇山遺跡

第1図	蛇山遺跡の周辺地形図	31
第2図	グリッド設定と遺物採集地点	34
第3図	B O 26~29南側断面図	36
第4図	建築物遺構図	38
第5図	出土遺物（縄文土器）	40
第6図	出土遺物（土師器）	40
第7図	出土遺物（須恵器）	43

地蔵塚

第1図	地蔵塚の周辺図	45
第2図	地蔵塚実測図	50
第3図	地蔵塚グリッド設定および基底部遺構図	51
第4図	地蔵塚断面図	53
第5図	出土遺物	55

燕市長所遺跡發掘調查報告

I 調査の経緯

1. 調査に至る経過

国土開発自動車道の計画によって昭和46年、新潟県から北陸地方を経由して滋賀県に至る北陸高速自動車道の法線が発表された。新潟県における法線は、新潟市を起点に長岡市、上越市、糸魚川市を経由して富山県に至るもので、新潟市～長岡市間は新潟平野の水田地帯を通る。新潟県教育委員会ではこの高速道計画に対処するため、昭和43年から社会教育課文化財係を中心として、第1期の工事となる新潟市～長岡市間についての遺跡分布調査を開始した。

燕市は新潟県のはば中央部に位置し洋食器の町として全国に知られている。燕市における考古学的調査が行われたのは戦後で、昭和23年～26年にかけて真島衛氏が西蒲原郡一帯の踏査を行い^(註1)、128ヶ所の遺跡を確認している。しかしこの踏査において長所遺跡の記載はなく、燕市松長字館野、真木、吉田町佐渡山等で土師器、須恵器が採集されている。昭和45年～47年にかけて佐渡山地区県営圃場整備事業が大規模に実施された。その工事の折、燕市長所字浦田川東地区で土器が発見され、昭和45年、燕市教育委員会は燕郷土史研究会と協力して発掘調査を実施^(註2)し、土師器、須恵器が検出された。又同年長所館跡の調査も行われ、柱穴等の遺構、土師器、須恵器、中世陶磁器等が検出された。^(註3)

高速道路にかかる遺跡調査は昭和43年から開始され、燕市周辺については山本仁氏が担当して基礎調査を行った。昭和46年、道路法線が発表され、上原甲子郎、青木宏調査員、文化財保護室伊藤正一によって調査され、長所遺跡の一部が法線にかかることが確認された。昭和47年、文化財保護室は文化行政課となり、高速道路についての遺跡調査は埋蔵文化財担当職員があたり、6月、関雅之、本間信昭、戸根与八郎が現地調査を実施し、調査区域の決定を行った。昭和48年4月、金子拓男、本間信昭、駒形敏朗が再度現地調査を実施し、周辺の調査、聞き込み^(註4)を行った。同年には全県の遺跡分布調査が実施され、田子了祐氏がさらに詳細な調査を行った。昭和49年10月26日、長所遺跡の発掘調査が具体化し、小野栄一、本間信昭が燕市教育委員会に発掘調査の実施について協力要請と打合せを行った。30日、燕市教育委員会の同席を得て、区長、旧地権者に調査の説明と協力の要請を行い、快諾を得、調査を実施に移し、調査は昭和49年11月7日～12月12日までの36日間にわたって実施された。

(本間信昭)

註1 真島 卫『西蒲原郡内遺跡地名表第一報』孔版 昭和29年

2 「長所遺跡の概要」燕郷土史考第2集 昭和45年

3 山本 仁「燕市長所館跡発掘調査報告」燕郷土史考第3集 昭和46年

4 『新潟県遺跡地図』新潟県教育委員会 昭和50年

2. 調査の経過

高速道路法線に伴う分布調査の結果、燕市長所字浦田川東に所在する長所遺跡の一帯が道路法線にかかり、新潟県教育委員会は日本道路公団と協議を重ね、道路法線にかかる部分について発掘調査を実施することとなり、新潟県知事君健男と日本道路公団との間に発掘調査委託契約が締結された。新潟県教育委員会は燕市教育委員会の協力を得て区長、旧地権者との話し合いを行い了解を得ることができ、昭和49年11月7日～12月12日まで発掘調査を実施することとした。発掘調査は新潟県教育委員会（教育長 矢野達夫）が主体者となり、県教育庁文化行政課埋蔵文化財担当職員を中心に、県内考古学研究者の協力を得て行われ、作業員には地元長所の有志の協力を得た。

発掘調査経過の概要

昭和49年11月7日～9日 発掘調査実施区域は昭和45年～47年に行われた圃場整備事業の際、高速道路用地として残されていたために一面雑草地となっており、雑草の刈り払い作業から開始した。

11月11日～16日 雜草の刈り払い作業と併行して、発掘器材の輸送、遺跡の全景の写真撮影を行う。12日から雑草の刈り払いの終了した部分からグリッドの設定作業を併行する。

11月18日～23日 18日、11ラインからグリッドの発掘作業を開始する。19日、11・15・19ラインの発掘を行う。11C・11G・15C・15Gで中世陶器、11Sで中世陶器、青磁碗の破片が検出された。20日、15・19・23・27ラインの発掘を行う。15Oで須恵器長頸壺、中世陶器、15Kで土師質皿、土鉢、加工された約50cmの細い木棒が検出された。21日、燕工業高校社会科クラブが参加し、15・19・23・27・31ラインの発掘を行う。

11月25日～30日 25～26日、11・15・19・23・27・31・35・36・39・40ラインの発掘を行う。11E・G、15C、23O・S、27O・S、31O・S、35Sの第2層に砂を主体とする土層が検出される。11E・31Cで須恵器片、15I・23Cで中世陶器片が検出された。27日、36K、40K、44Kで第2層に厚い砂の堆積が確認され、13C・Oで土師器、須恵器、23Gで砾石が検出された。28日、11・13・17・23・27・31・43・47・48ラインの発掘を行う。35ライン以南では第2層に純砂層が厚く堆積し、第3層泥炭層が南側に傾斜している。11A・13E・17Oで中世陶器、13C・23Aで須恵器が検出された。29日、23A・21Cにかけて南西～北東方向に溝状のものが検出された。11A・13A・21A・21Cで土師器、須恵器、19Aで土師質皿、21Cで中世陶器が検出された。30日、13・15・17・19ラインの発掘を行う。15E・19Aで木杭が検出された。

12月2日～7日 2日、13・17・19・51・52・56ラインの発掘を行う。17Eで第3層を掘り込んだビットが検出され、17Mでは第3層泥炭層下部で樹皮が採取された。17Cで径60cm、深

さ 1 m のビットが検出され、17 I で中世陶器が検出された。3~5 日、9・11・13・52・56・57 ラインの発掘を行う。9 S で須恵器が検出された。6~7 日、9 ラインの発掘を行う。9 E 9 M で木枕、9 E で土師器が検出された。

12月9日~12日 9 日、発掘未完了グリッドの調査を行い、記録の点検と写真撮影を完了する。10~11日、グリッドの発掘作業を終了し、発掘グリッドの埋めもどし作業と併行して遺物の水洗作業を行う。12日、器材の点検、整理、記録類の整理し、遺物の梱包を行い、関係機関、関係者に挨拶まわりをして本遺跡の発掘作業を完了した。

遺物の整理については昭和50年度に県教育庁文化行政課埋蔵文化財担当職員が行った。

長期にわたる本発掘調査に対し、調査員はもとより、地元との交渉等種々の問題解決にあたられた青柳正二、小林善一郎氏をはじめ燕市教育委員会、旧地権者の方々、調査に協力いただいた燕郷土史研究会、燕工業高校社会科クラブの方々から多大なる御援助、御協力を賜わったことに対し、ここに深く感謝の意を表する次第である。また本調査のために宿舎の提供とお世話をいただいた小林善一郎氏と御家族の方々にはひとかたならぬ御迷惑をおかけし、御家族の方々の御親切に対し調査員一同感謝の念にたえません。

本調査の実施にあたって文化行政課渡辺 勉課長をはじめ職員一同のあたたかい支援を受けたことを明記しておきたい。なお本発掘調査の調査団組織は次のとおりである。

(本間信昭)

調査担当者 本間信昭 (新潟県教育庁文化行政課主事・日本考古学協会員)
調査員 関 雅之 (新潟県教育庁文化行政課文化財主事・日本考古学協会員)
金子拓男 (新潟県教育庁文化行政課文化財主事・日本考古学協会員)
戸根与八郎 (新潟県教育庁文化行政課学芸員)
駒形敏朗 (新潟県教育庁文化行政課学芸員)
家田順一郎 (新潟県教育庁文化行政課嘱託)
和田寿久 (新潟県教育庁文化行政課嘱託)
高橋陽子 (新潟県教育庁文化行政課嘱託)
作業員 燕市長所の有志
協力員 燕市教育委員会 燕郷土史研究会
県立燕工業高等学校社会科クラブ
山口栄一 (県文化財保護指導員) 青柳正二 (燕市公民館松長分館長)
小林善一郎 (長所地区土地改良区長) 田子了祐 (県立燕工業高等学校教諭)
事務局 江坂勇 (新潟県教育庁文化行政課管理係長)
小野栄一 (新潟県教育庁文化行政課主事)

II 遺跡

1. 遺跡の立地

長所遺跡は中ノ口川の左岸、燕市大字長所字浦田川東に所在し、燕市の市街地から北東へ約5kmの位置にある。長所の現集落は弧状を呈する自然堤防上に立地し、この微高地と水田面との比高は0.5m未満で低く、昭和45~47年度の佐渡山地区県営圃場整備事業により、微地形的な地形変更が行われた。第2図は圃場整備着手前の状況を示したもので、ドットを付した部分が長所遺跡の発掘調査部分である。遺跡の北側は水田、南側は畑地・宅地であり、遺物の散布は極めて希薄な状況であるが、標高3.4mラインまで遺物が確認されており、この微高地は北東に向って緩傾斜をなしている。

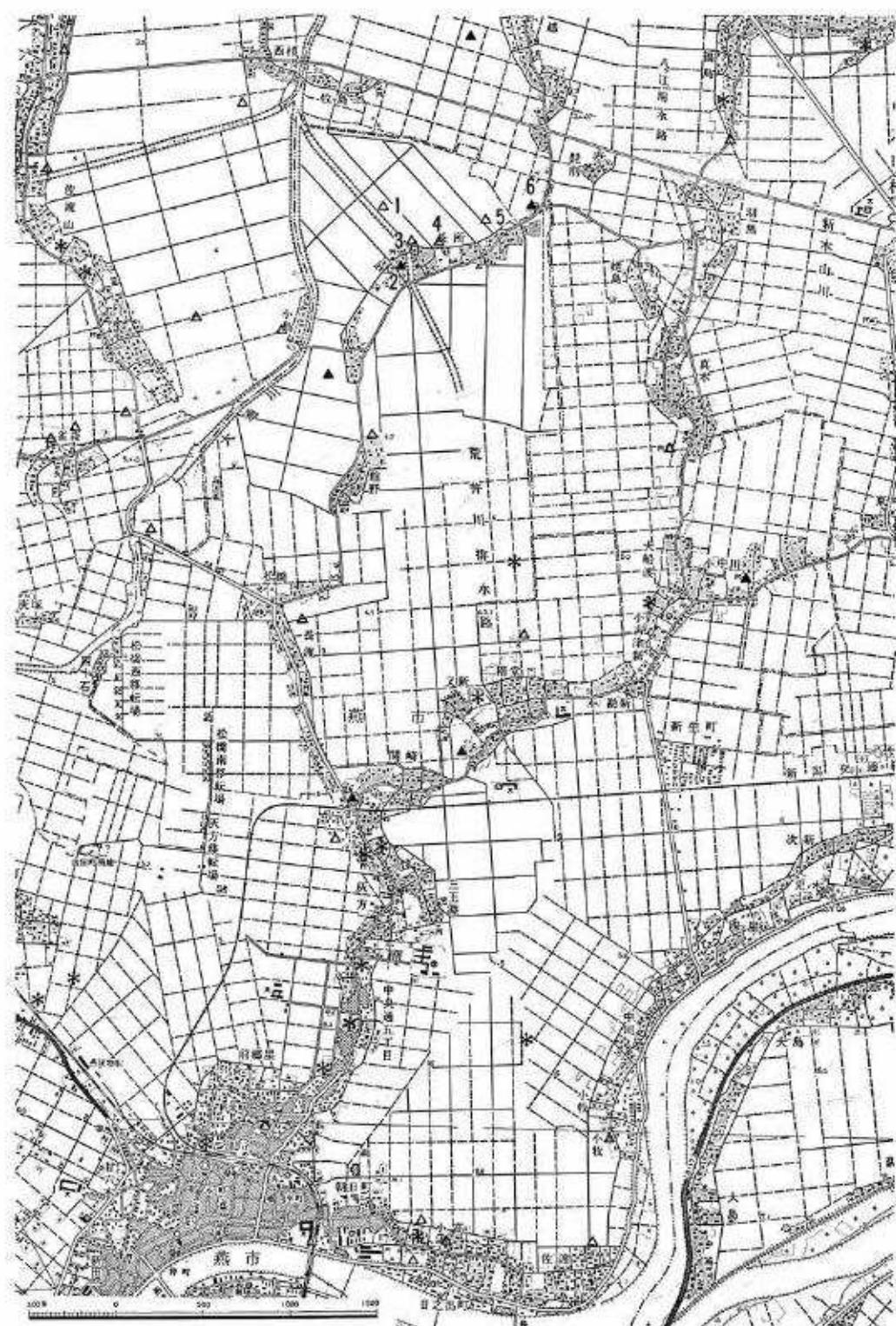
2. 遺跡周辺の景観

本遺跡をとりまく周辺の地理的景観をみると、西川から信濃川に至る低地は新潟平野の主要な部分を構成する地域であり、第1図に示した地形図はその一部である。この地域は信濃川・中ノ口川と西川にはさまれた標高10m以下の低地帯で、中ノ口川以西では自然堤防・微高地が列状に分布し規則性が認められる。また、集落に接近して島畠状の景観が見られるのも特徴である。これら列状をなす自然堤防・微高地は信濃川によって形成されたものであり、その跡をたどることにより旧河川流路の様相が推定できる。

信濃川は弥彦山麓から漸次東に移動したものと考えられ、法花堂一新保一米納津一佐渡山、長渡一館野一長所一四郷屋一糸郷屋、大船渡一真木一福島一三ノ門一釣寄一井隨一横戸、前郷屋一二階堂一東中一高野宮、最後は現在の河道と一致する。これらの河道変遷の時間的なづれについて、古文書や古地図等で明確に指摘できる段階ではないが、若干の考察がこころみられている。^(註1)

第1図に示した△印は奈良・平安時代と推定される土師器・須恵器を出土した地点で、*印は中世陶質土器、▲印は両者を出土した複合遺跡の分布である。図示した範囲においては奈良時代以前にさかのほる遺跡は認められず、時代別遺跡の分布から各河道の時間的位置づけをするまでには至らない。

長所集落の立地する弧状微高地の遺跡については、真島衛・田子了祐・山本仁の諸氏により分布調査が行われ、その成果が第1図に示したものである。1は浦田川東遺跡で、圃場整備の際に荒井川排水路右岸一帯で土師・須恵器が発見され、長頸壺の完形品も採集されている。^(註2) 2は長所館跡で昭和45年燕郷土史研究会によって発掘調査され、下層からは平安期の土師・須恵器が出土した。^(註3)



第1図 長所遺跡と周辺の地形 (△古代の遺跡 ▲古代・中世の複合遺跡 *中世の遺跡)
(国土地理院発行 昭和45年「越後吉田」昭和46年「三条」1:25,000原図)

器、上層からは陶質土器・黄瀬戸・中國青磁・白磁・皇宋通宝などが検出され、室町期の単郭館跡と推定されている。3は居烟遺跡、5は浦田乙遺跡、6は天神遺跡で、4の長所遺跡に近似した内容をもつもので、この微高地に点在した家屋群とも推定される。

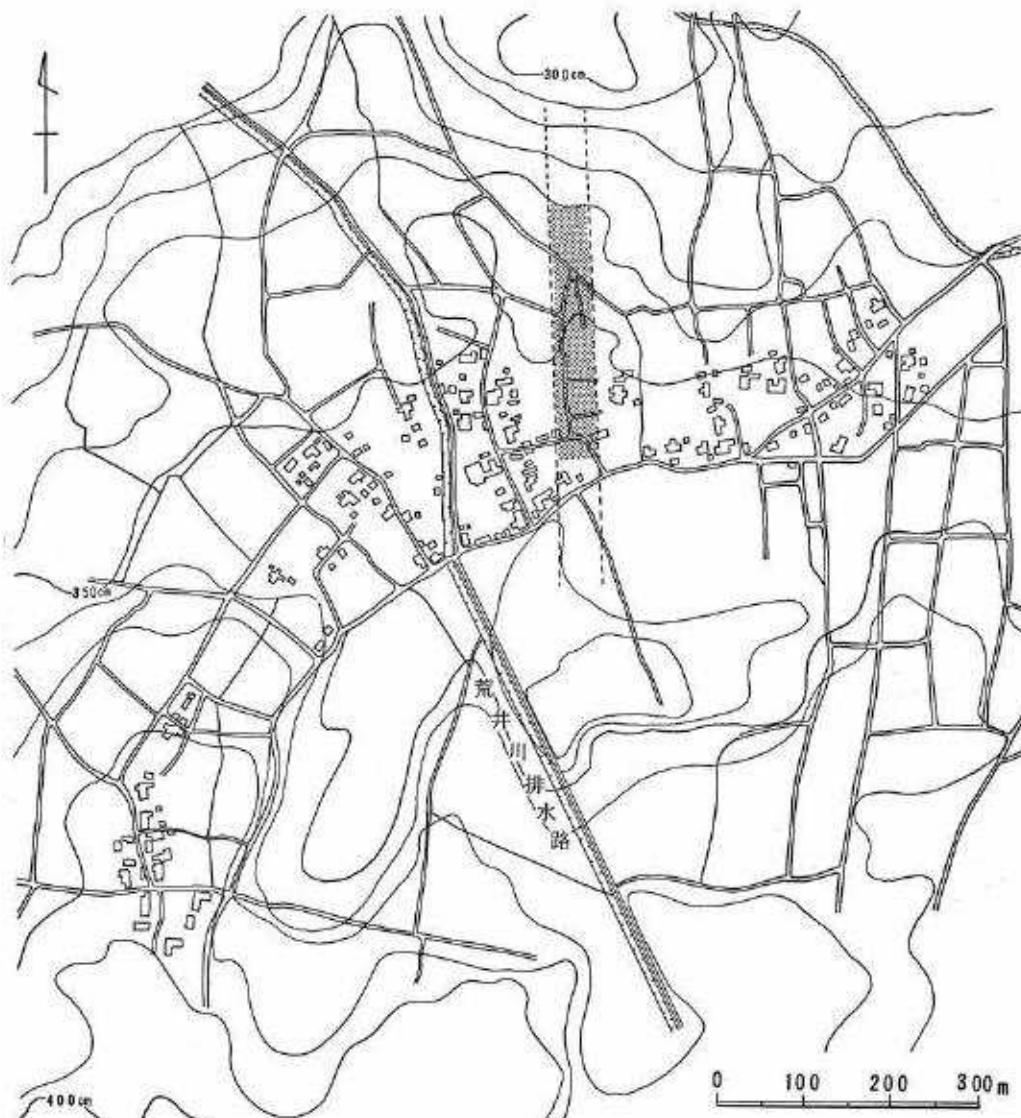
(関 雅之)

註1 『下越開発地域土地分類基本調査』内野・弥彦 県農地部農地計画課 昭和49年

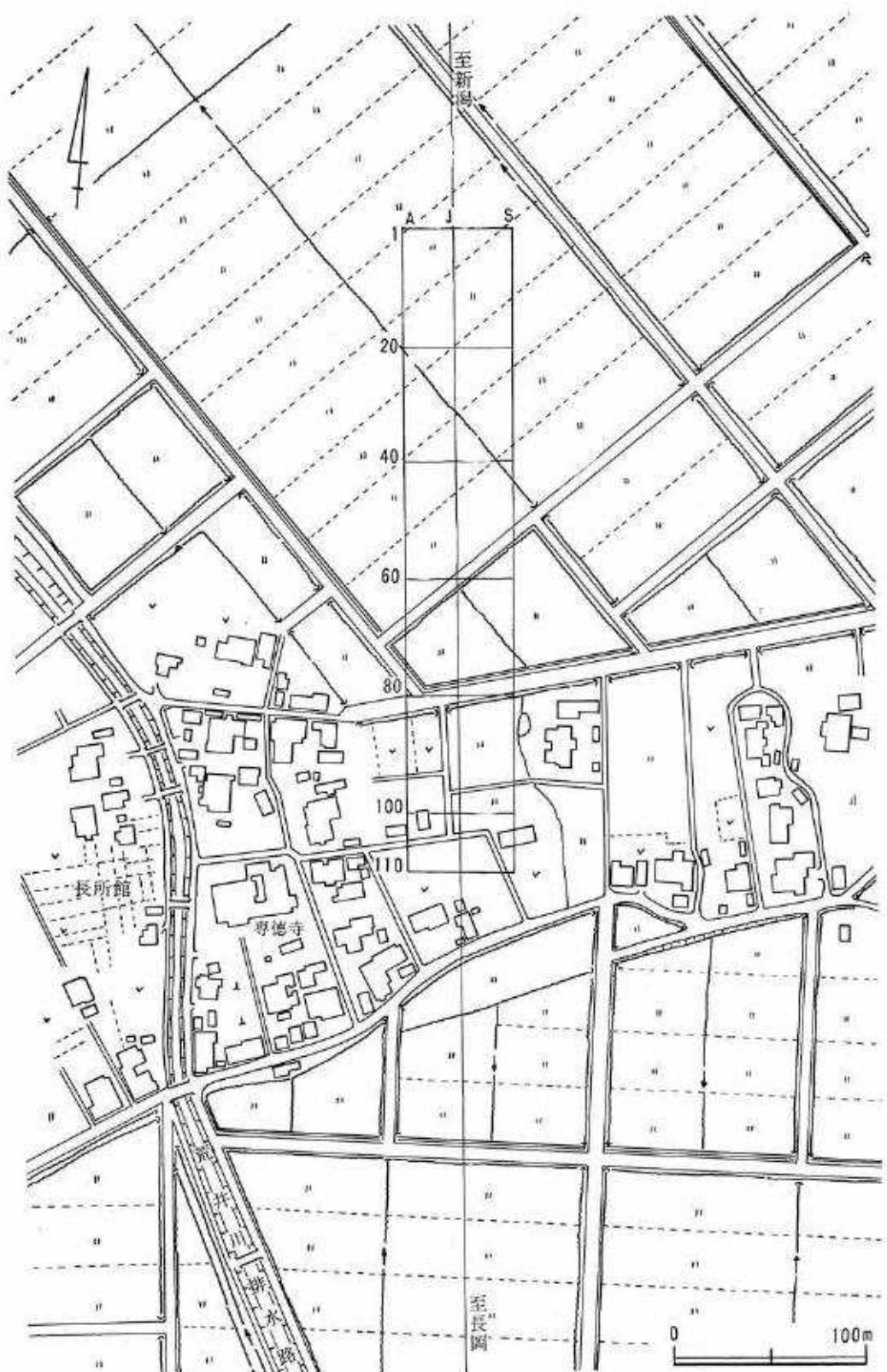
2 田子了祐『信濃川河畔における淨土真宗の伝播と近世村落の成立』燕郷土史考第5集 昭和48年

3 真島衛『西蒲原郡内遺跡地名表第一報』プリント 昭和29年

4 山本仁『燕市長所館址発掘調査報告』燕郷土史考第3集 昭和46年



第2図 燕市長所付近の微地形 (昭和44年頃の圃場整備前の地形)
点線は道路法線・ドット部分は発掘地点



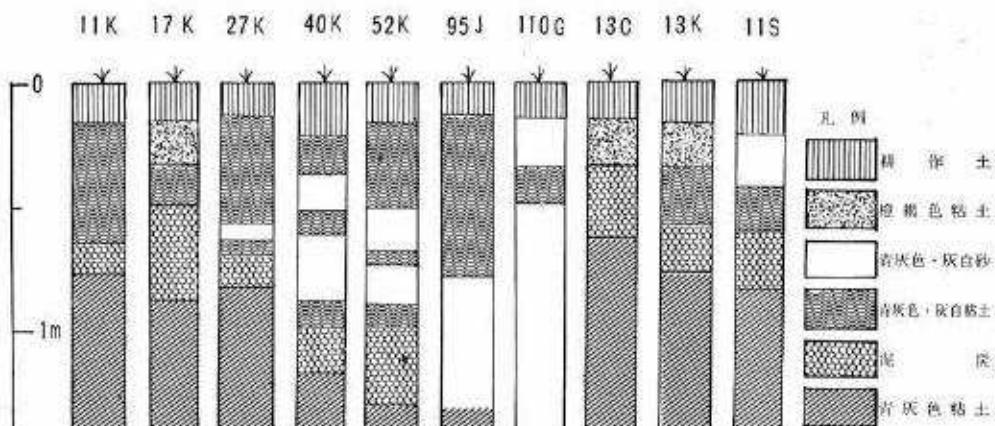
第3図 グリッド設定図

3. グリッドの設定と土層

発掘調査対象地となつた道路法線内については、昭和47年度以来数回にわたつて現地踏査を行つたが、遺跡の範囲・遺物の包含状況及び遺跡の中心などは必ずしも明確ではなかつた。しかし、本遺跡の周辺には長所館をはじめとして、居烟・浦田川東・浦田乙・天神など平安時代の遺物を出土する遺跡が存在している。更に昭和45年から47年度にわたつて行われた佐渡山地区県営圃場整備事業中に土器が採集されているという情報を得た。この結果、本遺跡と周辺の遺跡との関係を把握する目的で、延長330m、幅57mを調査対象地域に選定した(第3図)。

グリッドは3×3mを一区画として、東西19グリッド、南北110グリッド、総計2,090グリッドを設定した。グリッドには東から西へアルファベットを、北から南へ数字を付し、これを1A・1Bのように数字とアルファベットの組み合せをもつてグリッドの名称とした。

土層堆積状況 本遺跡の土層堆積状況は、各グリッドで異なり複雑な様相を呈し、泥炭層が発達している地域と泥炭層が全く発達していない地域とに大別される。泥炭層の発達している13K・17Kでは耕作土と泥炭層間に主として粘土が約45cm堆積しているのに対し、南側の40～56Kでは、泥炭層が漸次低くなり耕作土と泥炭層間に粘土と砂が互層をなして約80cm堆積し、13Kの泥炭層上面との差は約25～30cmを測る。85K～95Kでは泥炭層の発達は見られず、耕作土下は粘土・砂が約1m以上堆積している。東西の土層断面では、東へ行くに従つて泥炭層が約30cm低くなり、土層堆積状態も40K～56Kと同じ傾向を示している。この様に、泥炭層は17K付近で高くなり、南・北・東方向に漸次深度を増して行く傾向がある。更に、南・東方向に砂質が多いということは、常に水流の影響を受けながら堆積したものと考えられる。



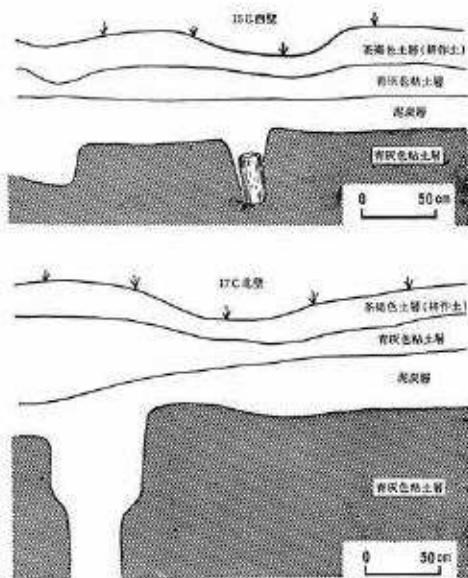
第4図 土層柱状図

遺物が出土した地域は、泥炭層が全体的に高くなり、耕作土と泥炭層間に粘土を主に堆積した地域で、9～20グリッドのA～R列と20～31グリッドのG列を結ぶ範囲である。近現代陶磁器を除く遺物の90%が本地域から出土している。遺物の出土状況には安定性がなく、同一個体がまとまつては出土せず、全て破片となり単独で出土し、更に層位的にも関係なく、混在して泥炭層中および泥炭層と青灰色粘土の境付近から出土している。この異状な包含状態がある時点で形成されたものか、また正常な包含状態がある時点で異状になったものか、いずれかであろうが、この結果の追究は今後の平野部に於ける考古学の課題であろう。

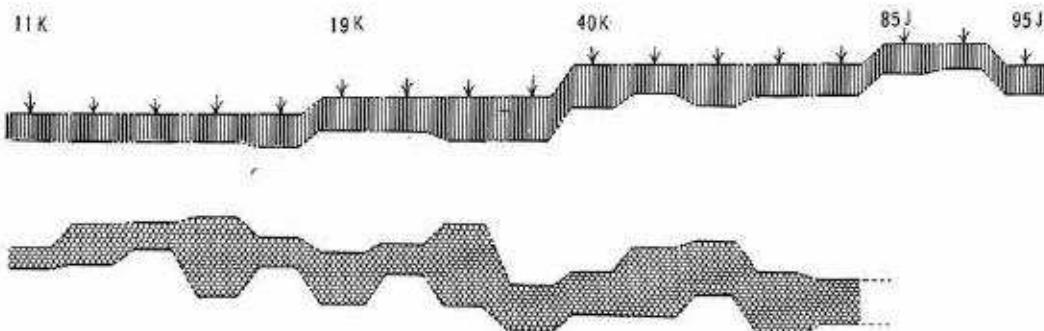
遺構は15E・17C・19Aの三グリッドで確認され、いずれも青灰色粘土を掘り込んだり、青灰色粘土に打ち込んだものである。

15E（第5図上）では径約30cm、深さ約40cmのピットに木杭が打ち込まれたものと深さ25cmの浅い落ち込みが確認された。17C（第5図下）では径約60cm、深さ90cm以上の井戸状の落ち込みが確認された。19A（図版第3図）では木杭が打ち込まれたものが確認された。本来ならば、泥炭層と遺構内の充填土は2分されるべきものであるが、調査時点の観察では不明確であった。また、いずれも確認し得た範囲の遺構内からは、一点の遺物も出土しなかった。

遺構の相関性や性格、それに時代等は、湿地帯の調査のため湧水が激しく、断面の崩壊などがあり、全体を把握するまでには至らなかった。
（戸根与八郎）



第5図 土層断面図



第6図 土層模式図

II 遺物

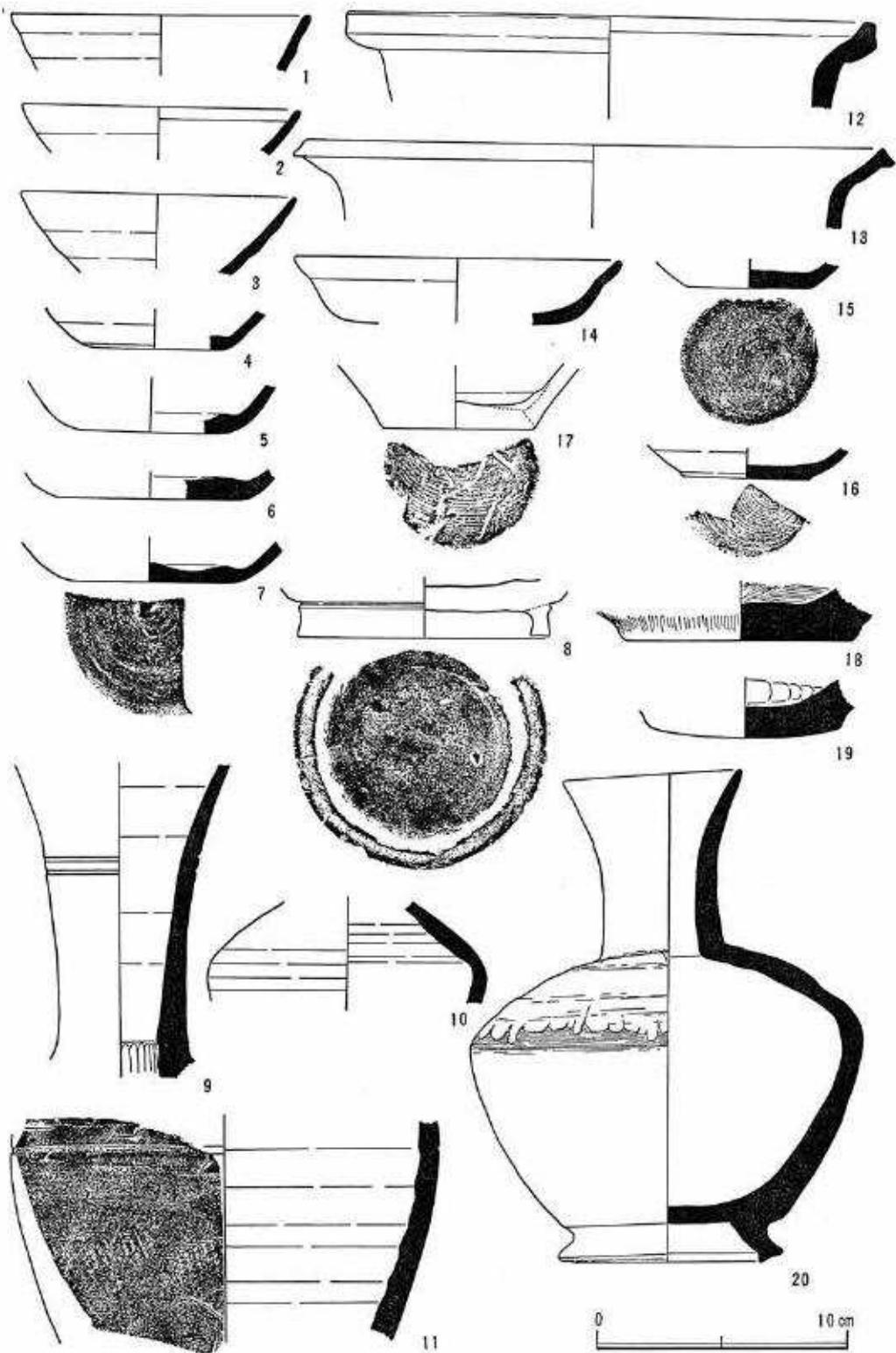
本遺跡の発掘調査で出土した遺物は、須恵器・土師器・陶質土器・土師質土器などの土器類と錢貨、土製品、石製品、木製品、自然遺物である。遺物が主に出土した範囲は法線の北側、10~38ラインで、その出土状態は全て破片となっており、同一個体が隣接グリッドからも出土せず、単独な形で出土している。遺物の量は少なく、平箱にして1箱である。第7図20の長頸壺は、燕市長所字浦田川郷4014-5（通称、釜屋）から出土したもので、発見の経過などについては青柳正一氏によって報告され、現在燕市教育委員会に保管されている。

土器の記述にあたり、土器を時期的に別け、更に器形で細分することにした。なお、器形の推定が困難な胴部片は一括し、その断面は垂直にした。

1. 土器及び陶磁器

須恵器（第7図1~11、第8図1~6、図版第7図）　須恵器は細片化され、器形の一部が明らかなものは杯・長頸壺・甕の3種のみである。全体的に胎土は精選された粘土に細砂粒が混入され、青灰色ないしは暗灰色を呈し、焼成は堅敏である。1~7は杯であるが、1~3は口縁部のみで、底部に高台を付したものか否か不明である。底部はヘラ切り技法で切り離されており、布によるナデ、ヘラによる削りなどの二次的整形は全く施されてはいない。8は高台が底部に垂直に接合されたもので、接合部の周辺はヘラでていねいに調整されている。高台の底径、器内の厚さなどから高台付の杯とは考えられず、壺類の底部かとも考えられる。9・10は長頸壺である。9は口縁部を欠失しているが長頸壺の頸部で、頸部上半に幅0.2cmの浅い沈線が2本付され、内面の体部との接合部にはヘラ状工具による継位の調整痕が見られる。10は胴部片で、肩部から胴上半にかけての外面はヘラ削りで整形されている。11は甕の胴部片と考えられ、上半に幅0.3cmの沈線が1条施されている。下半には斜格子状の叩目が部分的に残り、内面は横ナデ整形されている。外面には自然釉が薄くかかっている。第8図1~6は甕の胴部片である。外面には平行叩目、斜格子の叩目が施され、内面には同心円叩目、同心円弧の叩目などが施されている。なお第8図1~3は外面を叩いた後に、ナデで消したものである。第7図20は全体的に歪んでいるが、頸部、胴部、高台の3つに別けて作られた長頸壺である。口縁部は大きく漏斗状に外反し、胴上半に最大幅のくる土器である。肩部は比較的張るもので、口縁部から頸部にかけては横ナデで調整され、頸部から肩部にかけて幅3.8cmに亘って細かい条線が横位に施され、濃緑色の自然釉がかかっている。

土師器（第7図12~19、第8図7~19、図版第8図1~24）　土師器も須恵器と同じ様に細片化しいいるものが多く、器形の一部が推定されるものは甕・杯の2種のみである。1・2は長胴の

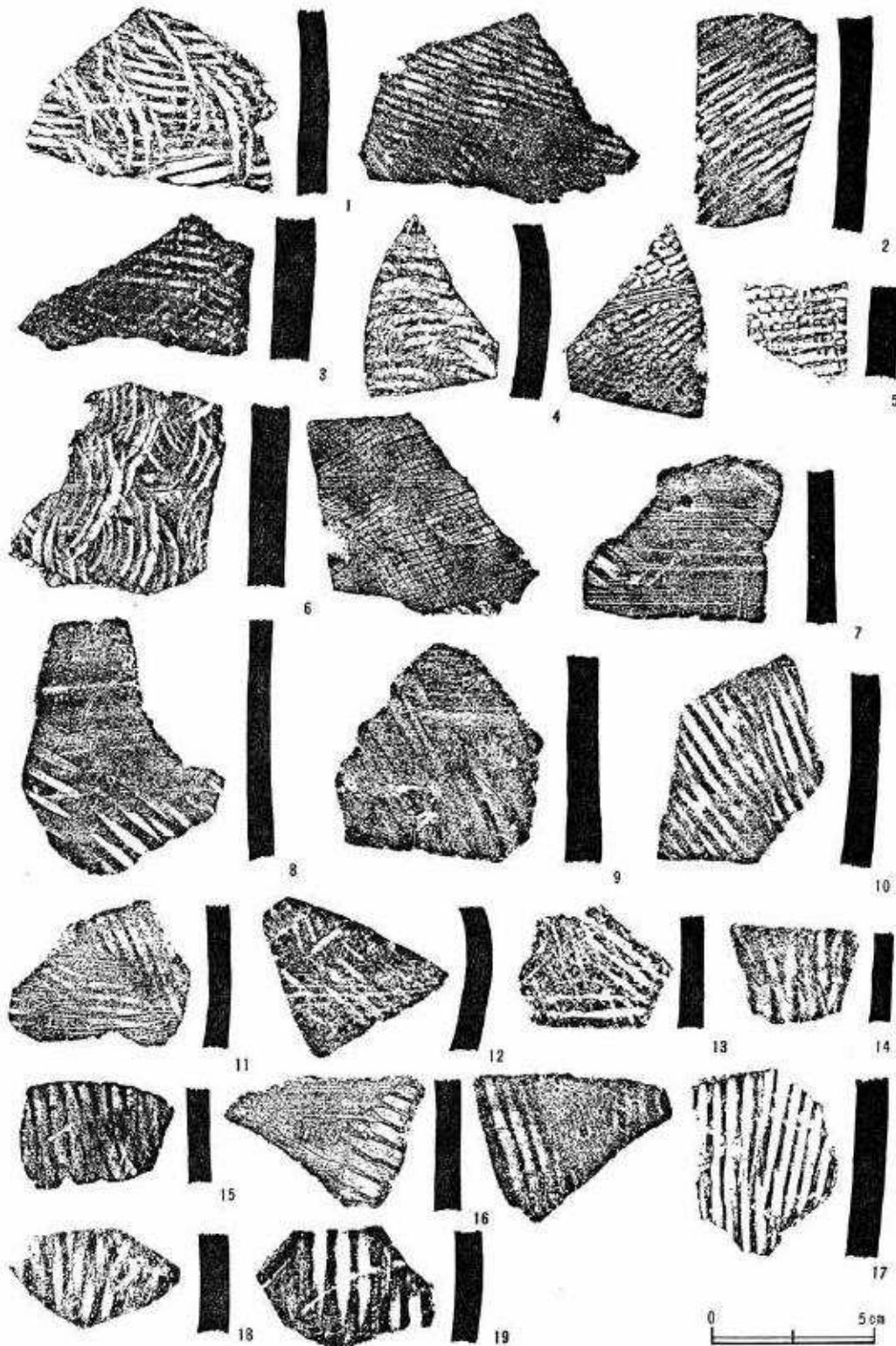


第 7 圖 須恵器・土師器 (20は燕市教育委員会蔵)

甕であるが、胴部が欠失しているために胴の張り、底部の形態は不明である。口縁部から頸部にかけては横ナデで調整されている。2の口縁部は「く」の字状にまがり、口唇部が内傾しながら外ソギ状を呈している。胎土には砂礫粒が混入され橙褐色を呈し、焼成は堅緻である。第7図7～19は甕の胴部片と考えられ、外面には叩目が施されている。叩目には斜位のものと縦位のものとがあり、横ナデ調整後に叩かれている。叩目は浅いものと深いものとがあり一定の深さでは叩かれていない。内面は16の様に平行叩目を有するものもあるが、検出し得た破片をみると、横ナデ調整が多い。これらの土器は、胎土・焼成・器面整形などの点から、従来土師器と呼ばれているものとは明らかに異なり、須恵器の胎土・焼成・器面整形に極めて近似しているのが特徴で、須恵器の生焼とした方がより妥当である。この点については、過日述べてきたところでもある。^(註1) 14～16は平底の杯である。14は口縁部が外反し、緩かなくびれを持つ土器である。口縁部から体部上半にかけての外面は横ナデで調整され、底部への変換点からはヘラ状工具で整形されている。胎土には砂礫粒が混入され暗黒色を呈し、焼成は軟質である。15・16の底部は回転糸切り技法で切り離されたもので、杯の類に接合するものと考えられる。胎土には精選されたものが用いられて緻密であるが焼成は軟質である。17～19は甕の底部と考えられる。18は無文の平底で、外面の底部近くまで縦位のクシ目が施され、内面にも細かい横位のクシ目が施されている。胎土には細砂礫粒が混入され黒色を呈し、焼成は堅緻である。19は底部がやや丸くなるもので、底面はヘラ状工具で無難作に整形されている。内面には横位のヘラ削り痕が見られる。胎土に細砂が混入され灰褐色を呈し、焼成は軟質である。

註1 関 雅之・戸根与八郎「大平城跡・牛ヶ沢又ツ塚調査報告」(P埋蔵文化財緊急調査報告書第3) 新潟県教育委員会 昭和49年

陶質土器(第9図1～7、10～12、第11図8、図版第9図) ここで取り扱う陶質土器とは、石川県珠洲市周辺で焼かれた珠洲焼に胎土・焼成が極めて近似しているものをさしている。出土した中世陶質土器は全て破片で、全体の器形を推定し得るものは1点もない。器形から壺、摺鉢、甕の3種に大別され、量的に最も多いのは摺鉢と甕である。第11図8は小形の壺で、胴下半から底部にいたる破片である。底部から胴部への立上り角度は60度で、底径は5.8cmを測る。内面には巻上げ痕が顕著に見られ、器内も厚く底部には板目状の圧痕が付されている。第9図1・2・10～12は摺鉢で、10～12の口唇部は外そぎ状を呈している。11は摺目幅2.3cmで19条の摺目が細かく鋭いタッチで浅く施されている。本遺跡で出土した摺鉢片を見るかぎり、単位摺目間の間隔は広く、すきまなしに単位摺目を施したものは一点もない。図版第9図8は片口の口部で、内幅1.3cmを測り、断面は「コ」の字状を呈している。図版第9図9～11は摺鉢の底部で、底径13～15cmを測る。9の底部には板目状の圧痕が見られ、底面周端部はヘラで摩消されている。10は静止糸切技法で底部を切り離している。摺鉢はいずれも内外面に、ロクロ成形痕が顕著に見られ、胎土に砂粒を多く含み、青灰色ないしは灰褐色を呈している。第9図3



第 8 圖 須惠器・土師器 指本

～8、図版第9図12～18、20～24は甕の胴部破片である。器面の整形から印目を有するものと無文の2種に大別することができ、更に印目を有するものは、印目の形状から3種に大別することができる。いずれも8を除いて器肉は厚く1.3～1.6cmを測り、かなり大型の土器と考えられる。3・4は右斜方向の条線状印目と左斜方向の条線状の印目が交互に施され、印目の縫合部は羽状になっている。3は縫合部が稜を持ち、面取り風になっている。4は平行の印目に近似し、3のように稜は持たず内面には円形状の成形痕が見られる。5は右斜方向条線状の印目で幅1cmに4条の印目が施されている。6・7は左斜方向条線状の印目で、7の内面には刷毛状工具による調整痕が縦横に施されている。図版第9図12～17は内外面ともに無文で、器面は横ナデで調整されている。8は格子目の押印文が施されているもので、胎土には淡褐色の砂粒を含み、茶褐色を呈している。珠洲焼の色調とは明らかに異なり、県内では常滑系の窯跡と考えられている北蒲原郡笛神村狼沢窯跡、同様兵衛沢窯跡から出土している。

註1 中川成夫、川上貞雄、土井義夫『新潟県北蒲原郡笛神村狼沢窯跡群の調査』笛神村文化財調査報告

4 昭和48年

2 中川成夫、岡本勇、加藤晋平『水原郷の遺跡・遺物』(『水原郷』新潟県文化財調査年報第十、新潟県教育委員会)昭和46年

土師質土器 (第11図1～7、図版第8図25～29) 土師質土器の大部分が皿または杯形を呈し、全体の器形を推定し得るものは7個体分である。胎土は精選された水漉し粘土が用いられ、赤褐色ないしは橙褐色を呈し、焼成は堅緻である。器形の特色から3種に大別される。

A類 (1～4) 口径の平均8cm、器高約2cmの浅い皿で、口縁部が短かく直立状に立上る特色を有し、底部は緩かに丸味をもつものである。口縁部は横ナデで調整され、体部及び底部はヘラ状工具で研磨整形されている。内外面にはスヌ状の付着物は見られない。

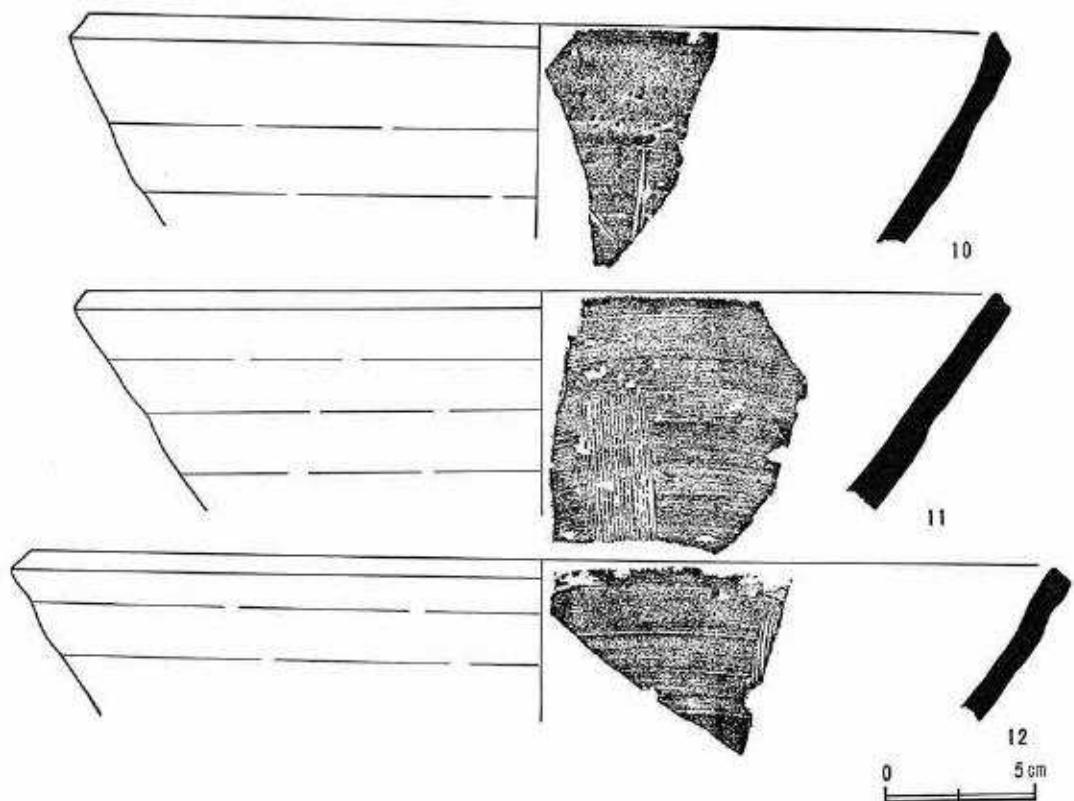
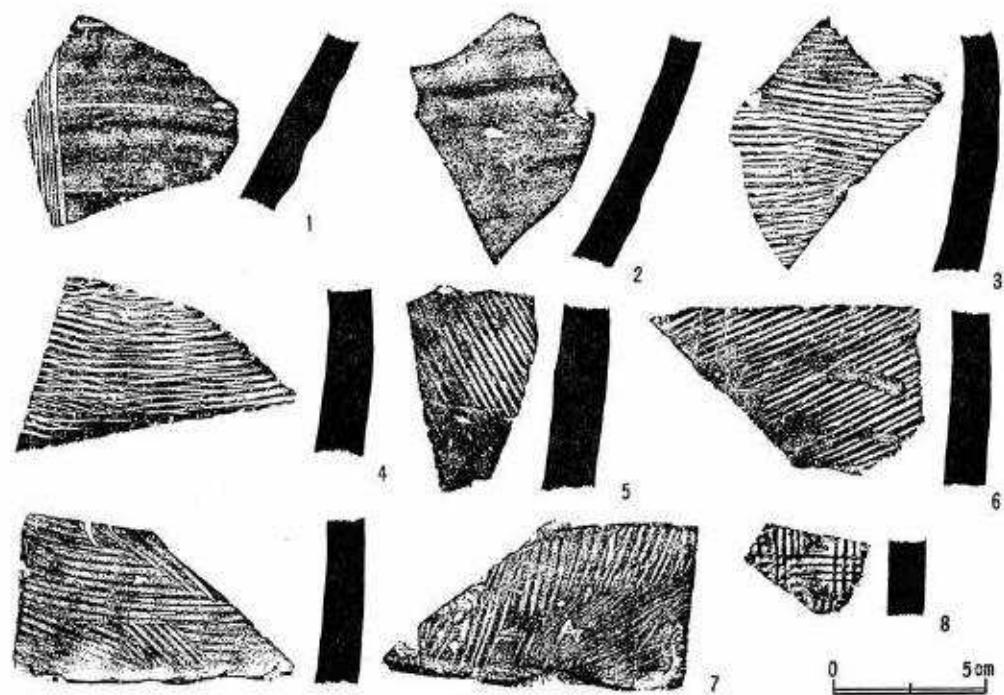
B類 (5) 口径11cm、器高3.5cmを測り、底部が平底になるものである。口縁部の形態はA類と大差なく、口縁部から体部下半まで横ナデで調整されている。内面にはスヌ状の付着物が見られ、底部は回転糸切技法で切り離されている。

C類 (6・7) 口径がA類・B類に比して大きくなるもので、平均13～15cm、器高3～3.5cmを測る。口縁部は内彎ぎみに立上り、口唇部の形態はB類に近似している。口縁部のみ横ナデで調整され、体部はヘラで整形されている。底部は平底になるのか丸底になるものか明らかではないが、6は丸底になるものであろう。

船載磁器 図示しなかったが、小形の碗と考えられる青磁片が1点出土している。体部に素弁籠手蓮華文が描かれ、素地は灰白色をし、青磁釉の色調は翠青色を呈している。

近現代陶磁器 (図版第10図1～15) 日用雑器の類で甕・皿・碗・擂鉢などが出土しているが、いずれも近現代の陶磁器片で九州産のものと考えられる。

(戸根与八郎)



第 9 図 中世陶質土器拓本・実測図

2. 土 製 品

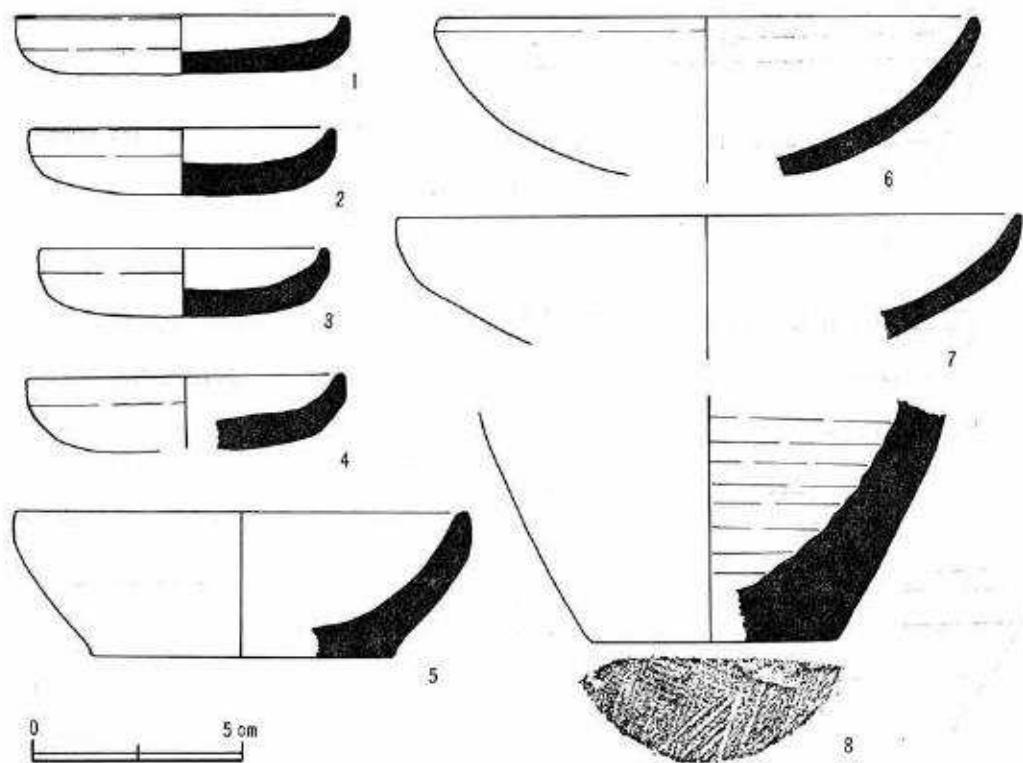
土 鐘 (第12図4・5、國版第8図30・31) 本遺跡からは2個出土しているが、いずれも破片である。形態は不整円筒形を呈し、長軸線に沿って中央に孔が穿たれてい。成形はヘラでていねいにおこなわれ、表面は円滑に仕上げられている。胎土、色調、焼成とともに土師質土器に近似している。4は全長7cm、最大幅5cm、孔径2cmを、5は一部を欠失しているが、現長7.2cm、最大幅5cm、孔径1.2cmを測るものと推定される。

3. 錢 貨

第10図に示した天聖元宝 (北宋仁宗・天聖3年・1023年) が1枚出土したのみである。



第10図 錢 貨



第11図 土師質土器・中世陶質土器

4. 石製品

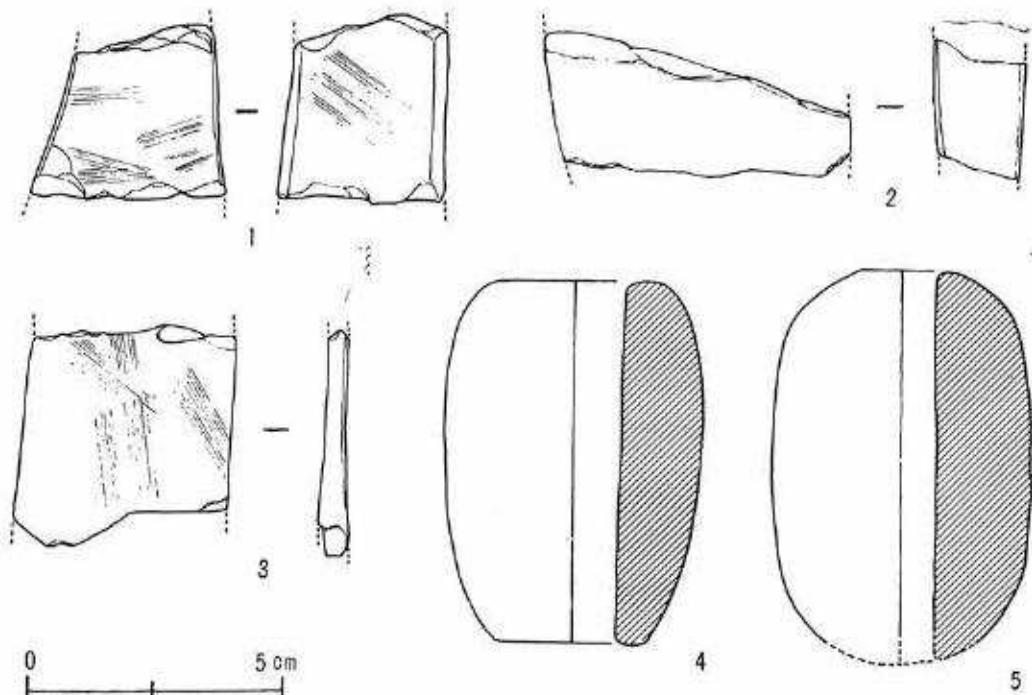
砥石 (第12図1～3、図版第10図16～18) 3点出土しているが、完形品は1点もない。1・2は4面の研磨面を持つ角砥石で、1は凝灰岩質の仕上げ砥、2は安山岩質の荒砥である。3は2面の研磨面を持ち、中央部が磨滅して薄くなり折れている。擦痕が斜位ならびに縦方向に見られ、砥面の粒子は細かく仕上げ砥石に属するものであろう。

5. 木製品・植物種子

棒状木器 (図版第10図30) 材質はスギで、全長48.3cmを測る。上端の断面は長方形を呈し、 $1 \times 1.9\text{cm}$ を測るが、先端部は漸次丸味をおびて細くなり直径0.8cmを測る。先端部から上へ約8cmまでの範囲は黒く焼けている。形態からは大形の箸であるが、利用目的等は不明である。

木杭 (図版第10図31・32) 本遺跡では原形のものはなく、残欠部が2本出土した。2本とも材質はクリで、先端部は刃部の鋭い利器で切断されている。31は現長37cm、直径7.5cm、32は現長42.6cm、長径13cm、短径10cmを測る。植物の種子は遺跡の各所から出土し、図版第10図19・20はカキ、21～29はモモの種子である。

(戸根与八郎)



第12図 砥石・土鍬

IV 周辺遺跡の概要と出土遺物

1 浦田川東遺跡の概要 本遺跡は昭和45年～47年度にわたって行なわれた佐渡山地区県営圃場整備事業中に偶然発見されたもので、昭和45年4月20日に燕市教育委員会および燕郷土史研究会の手によって緊急試掘調査が実施され、その結果は田子了祐氏等によって報告されている^(註1)。報告によると遺跡は長所の北方約200m、燕市長所字浦田川東に所在し、荒井川排水路の右岸、標高3.2mを測る微高地に立地している。現在は区画整理された水田となり、遺物の採集はほとんど出来ない。基本的層序は第Ⅰ層（水田耕作土層）、第Ⅱ層（粘土層）、第Ⅲ層（黒色土）、第Ⅳ層（粘土質砂層）で、遺物は地表面下30～35cmで確認された第Ⅲ層から出土している。遺構としては溝状遺構と柱穴が確認されているが、調査対象面積が狭い上に、時間が短かかったために全体的構造や性格は不明である。遺物としては須恵器・土師器・木柱・鉄滓が出土している。なお、遺物の記述は写真図版を中心として進めることとする。

須恵器（第13図1～5、図版第11図1～17） 須恵器は器形から壺・高台付壺・長頸壺・甕の4種に大別される。1～11は壺で底部は全てヘラ切り技法によって切り離されている。7・16は底部を2次的に整形したもので、螺旋状の回転痕跡を布状のものでナデて消している。内外面ともに横ナデが施されている。胎土には細砂粒が混入され、青灰色ないしは灰白色を呈し、焼成は堅緻である。12・13は高台付壺で底部は壺と同じ切り離し技法である。高台の接合面は両者ともヘラ状工具で内外面ともに調整されている。高台は12が「ハ」の字状に外向しているのに対して、13は底部に対して垂直に接合されている。14は口縁部を欠失しているが、小形長頸壺の頸部で外面には自然釉がうすく全体にかかっている。15～17は大形の甕の破片で、15・16は頸部片、17は胴部片である。17の外面には斜格子の叩目が、内面には同心円の叩目が付されている。16、17の胎土には小礫粒が混入され、器面は荒く仕上げられている。

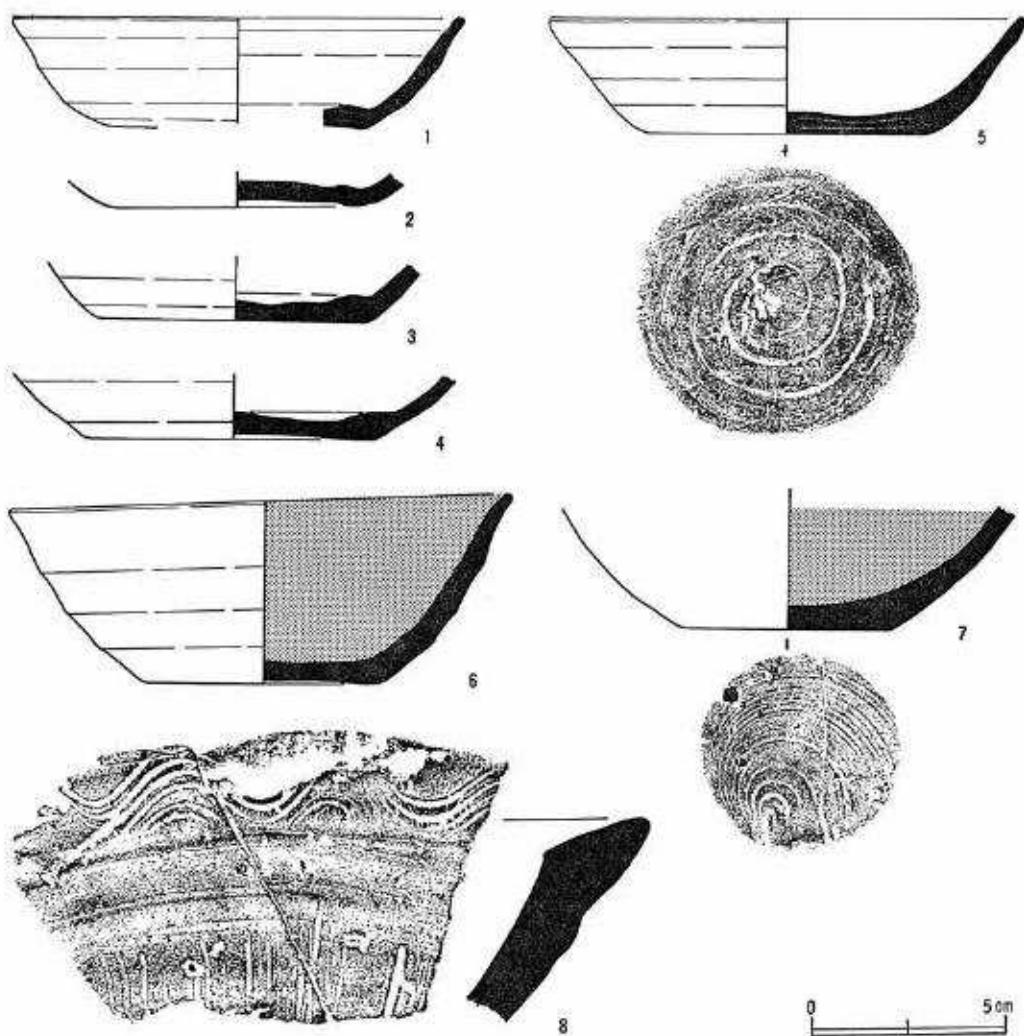
土師器（第13図6・7、図版第12図1～13） 土師器は器形から壺・甕・壠の3種に大別される。1～5は壺で全て糸切り技法によって切り離されている。1・2は内黒土器で、内面は研磨され光沢を有している。胎土には水漉粘土を用い、橙褐色を呈し焼成は堅緻である。3～5の胎土には砂礫粒が混入され、灰白色ないしは暗褐色を呈し、器面は著しく荒れている。6は口縁部が外反し、頸部が「く」の字状になる長胴の甕と考えられ、外面の頸部から胴上部にかけては、幅0.1～0.2mmの細かい条線が横位に施されている。内面は横ナデ調整がなされている。なお、破片のために胴部の張り、底部の形態などは不明である。7は壠で口唇部の先端が上に向ってわずかに立ち上り、頸部は「く」の字状にくびれ、丸味をおびて底部に至るものと考えられる。頸部から胴上部にかけては横走する条線が6と同じ様に施されている。内面は横ナデ調整のみで叩目などは施されてはいない。8～13は長胴の甕ないしは壠の破片と考えられる。叩目ないしは横位の条線を付したものと無文のものとがある。9は横位の条線と叩目の境が顯著

にみられ、内面にも横位の条線が付されている。12・13は内外面ともに叩目が付され、6・7・9との組み合せを考えると胴部下半にくるものと考えられる。長胴甕・壺の胎土には比較的荒い砂粒が混入され橙褐色を呈し、焼成は堅敏である。この2種の土師器は従来の土師器とは器面整形・胎土・焼成が異なり、須恵器の器面整形・胎土に極めて近似している。

報告では、これらの遺物の年代を9世紀～11世紀と幅広く考えておられるが、器種や技法などの点から考えると8世紀後半～9世紀前半にかけてのものであると考えた方がより妥当と考えられる。

(戸根与八郎)

註1 田子了祐「長所遺跡の概要—緊急調査結果報告—」燕郷土史考第二集 昭和45年
燕郷土史研究会「長所遺跡出土鉄滓の分析結果について」燕郷土史考第三集 昭和46年



第13図 浦田川東遺跡(1～7)・長所館跡出土遺物(8)

2 長所館跡の概要 本遺跡は燕市長所字村中（通称 館屋敷）に所在し、荒井川排水路の左岸、標高4.5mを測る自然堤防上に立地している。現在は畠地・宅地となって、往時の面影は全く見られない。昭和43年に大川のはとりを語る会によって一部の試掘が、さらに昭和45年には市教育委員会が発掘調査主体者となって発掘調査を実施し、その結果は山本仁氏によつてす（註1）で報告されている。報告によれば、その規模は幅2～3mの濠に囲まれた南北約120m、東西約60mを測る楕円形状をした単郭の館であると判明し、室町期の村地頭の屋敷で、新潟平野に分布する一般的館であると考えられている。

造構としては江戸時代の建築造構・溝状造構と中世の建築造構が確認されている。江戸時代の建築造構の柱穴の形態が掘立の方形柱穴に対して中世の建築造構の柱穴の形態は掘立の円形柱穴で、径15～30cm、深さ10～24cm、柱間は約2mである。なお、館跡内を全面にわたって発掘をしていないために、建物の全体的構造・配置などは明らかではない。出土遺物は、上層からは近世の伊万里焼、唐津焼、その他地場焼と考えられる陶磁器片と鉄釘が出土している。また、中世の遺物としては、青磁、白磁などの鉢載磁器類、染付、黄瀬戸、瀬戸天目、陶質土器（珠洲系陶質土器・常滑系陶質土器）、土師質土器などの陶磁器類や石臼・砥石などの石製品、漆塗木椀、古錢が出土している。しかし、中世の遺物の出土量は少なく、その出土状況もそれぞれの遺物が単独で、同一個体がまとまって出土はしていない。

陶質土器（図版第12図14～16） 陶質土器は珠洲系のものと常滑系のものがあるが、図示したものは珠洲系の陶質土器である。14は口唇部内面に6条の波状文を施した摺鉢である。摺目は底部から口縁部にカキ上げたもので、幅4.2cmで11条を一単位としている。胎土には砂礫粒を含みながらも緻密で灰黒色を呈し、旋成は堅緻である。15は摺鉢の底部で、靜止糸切技法で切り離されている。16は大形の甕の胴部片で、外面には平行の条線状叩目が横位に施され、叩目縫合部で稜を生じやや羽状気味になる。内面には円形状の圧痕が見られる。

土師質土器（図版第12図17・18） 皿形を呈し、器肉は全体的に薄く仕上げられ、灯明皿と考えられるものである。17は口縁部の破片、18は全体の形態が推定されるもので、口径13.4cm、底径8.5cm、器高2.5cmを測る。口縁部は外反し、内外面ともに横ナデ調整され底部はヘラで整形され平底を呈している。17の内外面には黒色の付着物が認められるが、18には認められない。胎土には水漉粘土を用い、橙褐色を呈し堅緻に焼き上げられている。

図示はしなかったが、この他に青磁釉の色調がオリーブ色ないしは翠青色をした高台付青磁碗片や高麗系白磁皿片が出土している。また、古錢としては、唐錢の開元通宝、乾元重宝、北宋錢の皇宋通宝、嘉祐元宝、聖寧元宝、熙寧通宝、元祐通宝、それに江戸時代の寛永通宝など合計18枚出土している。

（戸根与八郎）

註1 山本 仁「燕市長所館址発掘報告」燕郷土史考第三集 昭和46年

V 総括

1. 新潟平野における低湿地の遺跡について

新潟平野を中心とする低湿地及びその周辺における遺跡のあり方について、昭和の前半に種々の議論がなされた。その代表的なものとして、金塙友之丞・大木金平・斎藤秀平の諸氏による「康平・寛治の古地図」めぐる真偽論があり、沖積平野周辺部における遺跡の分布とその標高から旧海岸線・旧湖岸線を推定する目的で、低湿地帯の遺跡調査が進められた。この結果、古地図に示された海岸線は、推定される11世紀のものと大きく異なり、偽物であるとする説が通説となっている。しかし、その後も新潟平野については、一般の風潮として「康平・寛治の古地図」的な視野から脱却できず、標高10m未満（自然堤防・砂丘を除く）の低地については考古学調査の対象として取扱われることが極めて少なかった。

昭和37・48年に全県の遺跡分布調査が実施され、新潟平野における遺跡の現状も一段と明らかになり、砂丘の形成・潮沼群などの地理学的な研究にも遺跡の活用がみられるようになってきた。しかし、新潟平野の水田地帯における発掘調査は極めてまれであり、その原因には粘性の強い水田土壤と湧水、霜刈から降雪までの短い季節的な条件、縱横にめぐる暗渠など、発掘に不利な要素が多く、研究のおくれを助長させてきた。昭和47年以後、新幹線・高速道路・農業基盤整備事業などの開発に伴い、水田地帯の発掘調査を実施する機会が増加し、この経験をふまえて若干の問題点を指摘しておきたい。

今回、発掘調査を実施した長所遺跡は標高3.4mの沖積地に立地し、平安時代前半頃の土師器・須恵器と中世陶質土器が検出され、付近にも同様の遺物を出土する地点が数ヶ所ある。発掘調査をしてみると遺物の包含は希薄で、その出土状態に生活痕跡としての規則性を確認することは困難で、遺物は第1層から第3層までの間に散漫的なあり方を示している。本遺跡は遺物散布地・包蔵地と言う以外に、現段階で具体的にその性格を指摘することができない現状である。このような遺物の包含状態は沖積平野の水田地帯にしばしば見られる現象であり、個々の遺跡における遺物量などに若干の相違はみられるが、見附市内町（平安・中世）・黒崎町駅迎堂（平安・中世）・中ノ口村茶院（平安・中世）・燕市焼屋敷（中世）の水田部で近似した現象を確認している。

近年の水田地帯における発掘調査結果から、遺跡の状態を大別すると（A）遺構に伴って遺物が検出されているもの、（B）遺構の存在は確認されていないが明確な包含層が指摘でき、遺物も原位置を保っていると考えられるもの、（C）遺物が散布または包含しているが、包含状態に規則性がなく、積極的に生活痕跡を指摘できないものの3種に区分できる。（A）としては味方村曾根下（奈良）・柴村半ノ木（平安）・中之島村杉ノ森（中世）、（B）は巻町幕島（縄文後期）・

榮村長畠（縄文晩期）・黒崎町緒立（縄文晩期・古式土師器）、(C)には燕市長所をはじめ前記の内町・駿迎堂・茶院・焼屋敷などがあげられる。この大別した3種の中で、特に(C)タイプと推定される遺跡が水田地帯に多く、試掘をしないと(A)(B)いずれに属するか識別が困難で、発掘調査によって遺跡の実体がはじめて把握されることが多い。

(C)タイプのものを遺跡と呼びうるか否か、また、遺跡であるとすれば如何なる性格のものか考えてみたい。(C)タイプの状態を呈するものは、遺跡全体の構造の中で中心からはずれた、外縁部の様相として把握されるものがある。即ち、発掘地点が遺跡の外縁部に当っている場合である。この例として、黒崎町駿迎堂遺跡がある。発掘地点の南約500mの三角点付近に位置する微高地から、柱穴に伴って中世陶磁器などが検出されており、燕市長所遺跡では発掘地点の南西300mのところに館址があり、上層から中世館址の遺構とそれに伴う遺物群、下層から平安頃の柱穴及び土師器・須恵器が出土しており、いずれも発掘地点は広域にわたる遺跡の中心からはずれた遺跡外縁部における様相として把握することができる。^(註6)

水田地帯にある見附市内町・中ノ口村茶院・燕市焼屋敷では、付近に中心となるべき遺跡がなく前者と相違している。このように(C)タイプであるが遺跡外縁部と判定できない一群は、自然の力または人為的な行為によって、遺跡が破壊・攪乱されたり、遺物の移動によって生じたものではないだろうか。最近、低地の埋立て、遠距離から搬入された土砂の中に遺物が包含されている場合がある。これは遺跡とは言えないが、早期の段階で事実確認がなされないと、遺跡として認定される危険がある。近世の新田開発などで大規模な干拓や客土がなされ、破壊された遺跡の土砂が移動されて遺物を含む土地が作られてしまう。即ち、「擬遺跡」が形成される。(C)タイプの中にこの種の擬遺跡が含まれ、特に新潟平野の低湿水田地帯では多いのではないかと考えられる。

今後、(C)タイプの遺跡については、二次的な形成によるものか否か、調査データーの慎重な検討が必要であろう。また、遺跡を素材とした微地形の復元・時代別の湖岸決定などには、遺跡自体の詳細な吟味の上に立脚すべきであろう。

(関 雅之)

註1 金塚友之丞「康平図・寛治図偽作論」高志路第1巻第5・7・8・9号 昭和10年

金塚友之丞「大木先生の学説動向『康平寛治図は果して偽作なるか』を評す」高志路第1巻第12号 昭和10年

2 大木金平「康平寛治図は果して偽作なるか」第1巻第11・12号 昭和10年

3 斎藤秀平「越後古代地図」(『新潟県史蹟名勝天然記念物調査報告書第7輯』新潟県)昭和12年

4 新潟古砂丘グループ「新潟砂丘と人頭遺跡—新潟砂丘の形成史I—」第四紀研究第13巻第2号 昭和49年

5 遺物が地表で採集され、または地中に包含していること自体が生活痕跡であるとする考え方もある。

6 開発に伴う発掘調査が限定された区域内にとどまる場合が多いため、遺跡全体の内容と発掘部分との関連が明確になし得ない点がある。

7 吉川町長峰遺跡(縄文中・後期、古式土師器)、村上市滝ノ前遺跡(弥生)では土砂の搬入先で遺物の発見が報じられた。

2. 出土遺物について

長所遺跡出土の土器類は、量的にも少なく、器形全体を推定し得るものもごくわずかしかないために資料的制約を受けるが、その遺物の年代は2時代に大別することができる。

須恵器・土師器 須恵器は壺・甕・長頸壺の3器種が出土しているが、蓋は1点も出土していない。壺の底部切離しは検出し得たもの全てがヘラ切り技法で行なわれ、二次的な調整等は全く施されていない。土師器は壺・甕の2器種が出土したのみである。ここで特に問題のあるものは、土師器の中に含めて記述した印目を有す土器の一群である。従来の土師器の胎土・焼成・器面整形とは異なり、須恵器の胎土・焼成・器面整形に極めて近似していることなどから須恵器の範疇には入るものと考えられる。この印目を有する甕は堀の出現と期を一にして出現し、堀と共に窯跡内から出土する例が多い。県外にあっては石川県の和氣1号窯から堀が、同^(註1)洲衛第1号窯から^(註2)は甕・堀が、宮城県の日の出山窯跡群から甕などが出土している。県内にあっては^(註3) 笹神村狼沢第2号窯から甕・堀が出土している。甕の形態は一般的に口径20~30cm前後、器高30cm前後を測り、口縁部に最大径を有す土器で、口縁部が外反し、頸部が「く」の字状にくびれ、胴部は若干張り、底部は丸底ないしは丸底に近い平底となるものである。器面整形は口縁部から胴部上半までは内外面ともにヨコナデで、胴部下半にはナデないしはケズリの上に印目が、内面の胴部下半には印目が施される例が多い。この印目を有す甕は、近年各地の集落跡からも出土しており、製品として十分流通していたものと考えられるが、まだ資料的には不足で、資料の増加をまって後日検討したい。

以上のように本遺跡出土の須恵器・土師器は少なくとも県内で知られている他の該期の遺跡とはほぼ同時代と考えられ、8世紀後半から9世紀前半に比定される。なお、図版第7図20の長頸壺は若干時期が遡るものであろう。

陶質土器・土師質土器 本遺跡出土の陶質土器は蓋・甕・摺鉢を基本形態としている。その色調は通称黒色を呈し、成形は巻上げ手法をとり、石川県の珠洲焼に極めて酷似し、珠洲焼そのものと考えられる。壺は無文の小形壺と考えられる。甕は胴部の破片のみで全体の器形を推定することはできないが、胴部の印目は大別して平行線および羽状の印目を有すものと、斜方向に線を引搔いた様な印目を有するものがある。また摺鉢は摺目が粗く、深く施され、内面の摺面が「米」の字状に配されるものと考えられ、南北朝頃かそれよりやや降るものであろう。本遺跡と同じ様な土器の組合せを有する遺跡としては、黒崎町糺連堂遺跡があり、その土器の年代は南北朝頃かそれよりやや降り、室町時代の中頃に属すものと推定されている。

この他に上記の珠洲焼とは異質で押印文のあるものが1点出土している。押印文の施されるものは常滑・越前・加賀古陶などの甕の肩部ないしは胴部に施される。県内では^(註4) 笹神村權兵衛^(註5) 沢窯跡・^(註6) 同狼沢1号窯から出土している。これらの窯跡は常滑系窯と考えられているが、本品

が在地窯のものか、本場の常滑なのかまた越前の系統を引くものは不明である。

土師質土器は皿ないしは环形を基本形態とし、一般的に證明皿と呼称されているものに類似している。県内では、この種の土器が量的にもまとまり、陶質土器に伴出し、その所属する年代が明らかなものは、上越市御館跡、下田村五十嵐館跡、黒崎町糸迦堂遺跡などがあるにすぎない。いずれも證明皿としての機能を有している。

本遺跡出土の土師質土器を器形の特徴からA類からC類に大別した。A類は口縁が短かく直立状に立上る浅い皿で、底部は丸底或は平底である。これに酷似する土器は石川県小坂第1号墳の中世墳墓遺構から室町前期（14世紀前半頃）の珠洲焼骨蔵器に伴って出土している。^(註10) また富山県じょうべのま遺跡、^(註11) 広島県草戸千軒町遺跡、^(註12) 黒崎町糸迦堂遺跡からも検出されている。B類は底部が平底で、回転糸切痕を有し、口縁部が内縁気味に立上り、口唇部がうすくなり、嘴状になるものである。これに酷似する土器は福島県新宮城跡、^(註13) 広島県草戸千軒町遺跡で検出されている。本遺跡では本類のみが内面および外面の口縁部にススないしは油煙が付着している。C類はやや深めの杯で、底部が丸底になるものと考えられる。これと酷似する土器は黒崎町糸迦堂遺跡から検出され、口縁の形態から時間的にもB類と同一のものであろう。

このように土師質土器は中世陶質土器に伴出するもので、その出土地は、城館・集落・官衙・墳墓などと多種にわたっている。また、その年代は南北朝頃に比定することができるが、細部にわたる時代判定はできず、今後の資料の増加をまってその性格を検討したい。（戸根与八郎）

註1 石川考古学研究会『加賀三浦遺跡の研究』石川県教育委員会 昭和42年

2 石川考古学研究会『輪島市の考古学的調査第一報』石川考古学研究会会誌第10号 昭和40年

3 宮城県教育委員会『日の出山窯跡群』宮城県文化財調査報告書第22集 昭和42年

4 中川成夫他『Ⅲ、2号窯跡』（『新潟県北蒲原郡笛神村狼沢窯跡群の調査』笛神村文化財調査報告4 笛神村教育委員会）昭和48年

5 新潟県内では南蒲原郡栄村半ノ木遺跡、長岡市白鳥町蛇山遺跡、県外では富山県郡井波町高瀬遺跡、石川県金沢市専光寺町遺跡、同加賀市柴山町遺跡などがある。

6 関 雅之『西蒲原郡黒崎町糸迦堂遺跡調査報告』（『埋蔵文化財緊急調査報告書第1』新潟県教育委員会）昭和48年

7 『南加賀の陶質土器』『加賀古陶』 北陸大谷高校紀要5 昭和45年

8 中川成夫他『笛神村權兵衛沢窯跡の調査』（『水原郷』新潟県文化財調査年報第10 新潟県教育委員会）昭和46年

9 中川成夫他『Ⅰ、1号窯跡』（『新潟県北蒲原郡笛神村狼沢窯跡群の調査』笛神村文化財調査報告4 笛神村教育委員会）昭和48年

10 『御館跡緊急調査経過報告』新潟県教育委員会 昭和41年

『府内御館跡第4次発掘調査報告』学習院大学舎人会史学部 昭和41年

11 金子拓男『五十嵐小文治館発掘調査報告書』下田村教育委員会 昭和48年

12 吉岡康揚『金沢市小坂第1号墳の調査』石川考古学研究会会誌第13号 昭和45年

13 「入善町じょうべのま遺跡発掘調査報告書」（『富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』富山県教育委員会）昭和49年

14 『草戸千軒町遺跡第一9・10次発掘調査概要』広島県教育委員会 昭和48年

15 『新宮城跡発掘調査報告書』喜多方市教育委員会 昭和49年

3. ま と め

新潟平野における考古学的調査は近年になって進められ、平野部に所在する遺跡の様相が徐々に明らかにされてきている。しかし長い年月の間にくり返し行われてきた土地改良事業は多くの遺跡を破壊・埋滅させ、考古学的調査を困難にしてきた。長所遺跡もまた土地改良事業によって破壊された遺跡の一つである。

長所遺跡は昭和45年に開始された土地改良事業によって発見されたもので、燕市教育委員会が浦田川東地区で数ヶ所の遺物出土地点を確認し調査をしている。本調査はこれらを総括する形で実施したが、土地改良事業によって遺跡の大部分が破壊されたが、一部は残っているものと判断された。調査によって検出された遺物は土師器・須恵器・中世陶器を中心となつており、新潟県において古代・中世の縦年研究の確立されていない現段階で、本遺跡出土土器について明確な年代を与えることは困難であるが、他遺跡との比較において土師器・須恵器が8世紀後半から9世紀前半、また中世陶質土器・土師質土器は南北朝時代頃と考えられる。土師質土器は県内においても中世の遺跡で多く検出されており、本遺跡から検出されているものも中世のものとしてとらえるのが妥当であると考えられる。しかしこれに類似するものが近世まで使用されており、今後資料の増加を待って検討して行きたい。

現在長所の集落が立地している自然堤防は砂質土で形成されており、遺物は検出されていない。集落西端に位置する長所館跡では下層から土師器・須恵器が検出されており、長所館跡から北東側一帯にかけて土師器・須恵器等が採集され、本調査地区の10~30グリッドに連なっている。地形上からは第2図の旧地形図において長所館址から北東方向に微高地がのびている。また、調査区域土層断面(第6図)においては10~30グリッド部分の泥炭層が高く、泥炭層の上が粘土の堆積となっており、土師器・須恵器・中世陶器等が検出されている。しかしこの部分の北側・南側・東側は泥炭層が低くなり、粘土と砂が厚く堆積している。これは10~30グリッド部分が旧地形で微高地を呈していたことを示し、これは長所館跡から北東にのびる旧地形の微高地と一致している。この微高地では土師器・須恵器・中世陶器等が検出されており、長所遺跡はここに所在し、遺跡の中心部は過去の資料等から長所館跡附近と考えられ、本調査区域は遺跡の東端部分に当る。また現在長所の集落が立地している微高地は中ノ口村打越まで連続しており、中世以降中ノ口川の流路移動によって形成されたものと考えられる。

本調査が道路法線内に限られているため、遺跡の全貌を明らかにすることはできなかったが、今後長所館跡及び下層で検出されたピット群をいま一度検討する必要があり、周辺の地形等の調査を行うことによって、本調査結果の再検討が必要となろう。

(本間信昭)

蛇山遺跡発掘調査報告

I 発掘調査に至る経過

日本道路公団による北陸高速道路の建設については、すでに昭和47年には黒崎～長岡間の法線発表がなされ、昭和48年には新潟～見附間では工事に着手した。次いで日本道路公団では、見附～長岡間に着工する計画をもち、特に信濃川左岸から長岡インターチェンジ間約8.5kmの作業を急ぐべく、その2工区間の盛土230万m³の土取用地を、長岡市福田地区から70万m³、白鳥町蛇山から140万m³を求めるに内定し、その予定地域内における埋蔵文化財の有無についての調査を依頼してきた。福田地区および白鳥蛇山地区の二ヶ所の当該地は従来遺跡の存在が知られていない地域であったが、公団の依頼により県教育委員会では、遺跡所在確認のため事前分布調査をすることとなり、昭和48年4月19日・20日の両日文化行政課職員3名を派遣した。この踏査には公団から荻沼達央長岡工事長、植木春雄新潟工事々務所庶務課長、井伊正義、長岡市役所二沢主事、長岡市教育委員会大宮課長補佐、西岡係長が立合った。

この結果、福田町地域の土取予定地域内は、国道バイパスの建設に際してすでに地表を含めて土取がなされており、遺跡を確認する状態ではなかった。しかし、白鳥町の土取予定地内にあっては、石造地蔵尊1体を安置する方5m、高さ70cmの塚1基と、東西50m、南北30mの範囲で土師器片を数点採集した他に、須恵器片1点、繩文土器片1点、現代陶器片数点を散発的に発見した。そこで蛇山地域においては塚と土師器散布地を遺跡と判断し、前者は地蔵塚と呼ぶこととし、構築状況と地下遺構を確認するための調査を、後者に対しては蛇山遺跡と呼ぶこととし、遺跡の性格を追求するための調査が必要であるとの判断がされた。

このため、地蔵塚と蛇山遺跡について、覚書による発掘調査を実施するための細部協議を行う必要がある旨を、昭和48年5月2日東京建設局新潟工事々務所長に対して文書をもって伝えた。その後、公団と県教育委員会との間で幾度かの協議を重ね、蛇山遺跡・地蔵塚は発掘調査することとし、昭和49年度に実施することで両者は了解した。

昭和49年度に入ると公団の発掘調査の要請にもとづき、4月27日教育委員会は発掘調査計画を公団に提示するとともに、発掘調査の委託契約をすべく申し出をおこなった。また5月31日には発掘調査を前提とし、さらに詳細なデータを得るべく3名の職員を白鳥町蛇山の現地に派遣して地表からの精査を実施して、発掘調査にそなえた。翌5月31日に遺跡についての発掘調査委託契約を委託者日本道路公団東京第二建設局々長武部建一と受託者新潟県知事君健男との間で昭和49年6月3日から6月20日迄の16日間の発掘調査を実施するとの内容調印した。

(金子拓男)

Ⅱ 発掘調査日誌

長岡市白鳥町字蛇山地内における蛇山遺跡と地蔵塚の発掘調査は、新潟県教育委員会（教育長 矢野達夫）が調査主体者となり、文化行政課職員が発掘担当者になり、調査員には同課職員と県教育委員会で依頼した県内考古学研究者によって構成し、さらに地元白鳥町の町内から作業員として有志の人々の協力を得て、下記の日程で手続・準備をおこない、作業を実施した。

- 6月1日 文化庁長官に両遺跡の発掘届を提出
- 6月5日 職員1名を長岡に派遣し、白鳥町区長堀善吉を訪ね、作業員の手配等の協力を依頼し、了解を得る。また、長岡市教育委員会に出向き、調査に至る事情を説明、調査の実施を告げ、協力を要請する。
- 6月13日 関係者に発掘調査の案内を送る。
- 6月27日 職員が長岡市に出向き、塚の供養祭のため白鳥町宝正寺富沢亮光住職を訪ね、司祭を依頼、その準備についての指導を得る。区長堀善吉に作業員の集合状況を確認する。
- 6月29日 発掘器材を発掘現地に搬入し、テントを設営する。
- 7月1日 調査隊新潟を出発。長岡市教育委員会・区長堀善吉を訪ねあいさつ。午後から現地の写真撮影をおこなう。
- 7月2日 蛇山遺跡のグリッド主軸を設定し、レベル原点を設ける。塚供養の準備
- 7月3日 蛇山遺跡の発掘調査を開始、調査に先きだち作業員に調査員の紹介、調査についての説明、作業上の注意、庶務連絡をおこなう。このあと、直ちに下草刈・グリッド設定の杭打等の作業にかかる。午後、地蔵塚の供養祭をおこなう。
- 7月4日 発掘作業の開始。表面採集地点近くのAFラインから発掘する。
- 7月6日 遺物・遺構全くみられず。長岡市教育委員会荒木係長来訪
- 7月8日 AO24第2層下部より縄文土器片1点出土。長岡市文化財審議員來訪
- 7月12日 BM26、BJ28で土師器検出。CJ21で磨製石斧を発見
- 7月13日 BN28に須恵器、BM30・BO30で土師器
- 7月17日 BK28で須恵器・土師器。長岡市教育委員会田崎社教課長・荒木係長・相田主事ら来訪
- 7月19日 BO28・29の西南隅に柱穴検出。掘立柱の住居址と推定する。
- 7月20日 住居址確認作業を進める。
- 7月24日 BO24~30のセクション取りを終り、赤褐色の地山層を出し、柱穴を探索する。
- 7月25日 4間×2間の建築址の全体を確認する。

- 7月26日 建築址の平面実測および断面図を取る。徹収作業を開始
- 7月27日 残務処理をおこない。関係者・関係機関にあいさつ廻りをして後帰庁する。本日をもって現地調査を完了する。
- 7月29日 長岡警察署長に埋蔵文化財発見届を提出する。
- 8月1日 調査の完了報告と調査結果の概要と共に礼状を発掘調査の協力者および関係機関に送る。
- 11月13日 昭和49年度埋蔵文化財発掘調査委託契約に基づく実績報告書を日本道路公团に提出し、報告書の作成は昭和50年度に出版することとなり、昭和49年度における蛇山遺跡・地蔵塚に関する作業を終る。

(金子拓男)

発掘調査体制は、下記の人員をもって構成して実施した。

- 調査担当者 金子拓男 (新潟県教育庁文化行政課文化財主事・日本考古学協会員)
- 調査員 戸根与八郎 (新潟県教育庁文化行政課学芸員)
駒形敏朗 (新潟県教育庁文化行政課学芸員)
和田寿久 (新潟県教育庁文化行政課嘱託)
中村孝三郎 (日本考古学協会員)
高島一男 (新潟県文化財パトロール員)
- 作業員 長岡市白鳥町の有志 堀善吉、松本清重、武藤幸吉他
- 調査協力員 長岡市教育委員会
株式会社 奥村・植木組 (北陸自動車道長岡北工事共同企業体)
株式会社 木村組
佐々木多一郎、高橋広治、富沢亮光、押味忠三郎、押味竜五郎
- 事務局 柴野達男 (新潟県教育庁文化行政課管理係長)
小野栄一 (新潟県教育庁文化行政課主事)
刈部啓子 (新潟県教育庁文化行政課嘱託)

II 遺跡の地理的環境

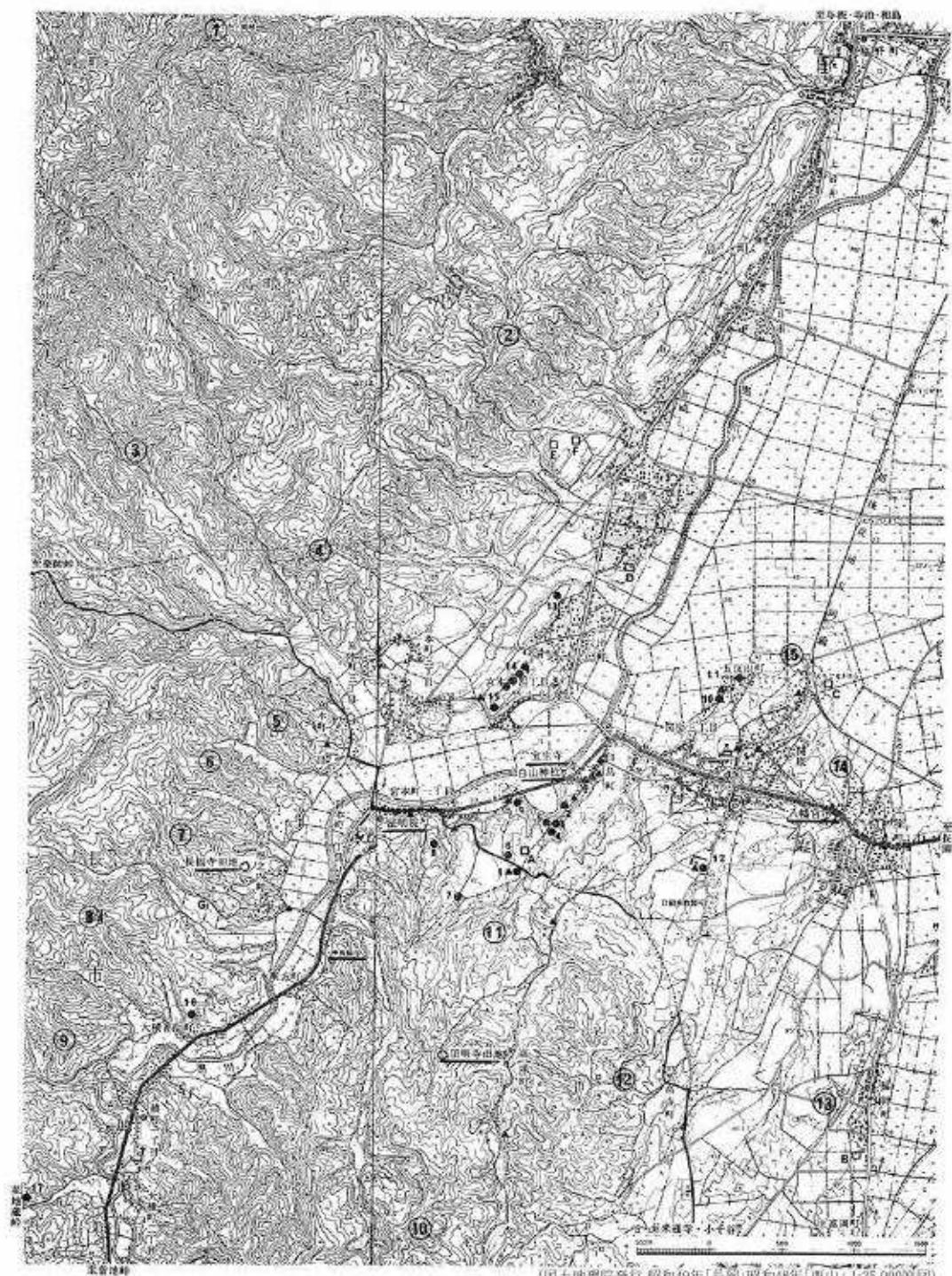
蛇山遺跡の存在する新潟県の中部地域の平野部は、第三紀中新統上部以上の地層群で構成される褶曲構造によってなる丘陵で、新潟平野と柏崎平野が二分されている。

この褶曲構造は、日本海にそった西山丘陵、黒姫山を中心に曾地岬—地蔵峠—薬師峠—小木ノ城と走る曾地丘陵、八石山—塚山峠—柳形山と続く八石丘陵、天水山—有倉山—向山一小国峠—阿賀平と連なる開田丘陵が東北—西南方向で雁行している。この背斜構造は、信越国境の鍋倉山・天水山等の約1000mの標高を有する東頸城丘陵にその端を発し、東北方向に向って次第に高度を低下し、信濃川左岸で新潟平野にその姿を沈めている。これらの背斜の間は向斜構造となるが、向斜凹帯にはそれぞれ島崎川、黒川、渋海川、信濃川等の河川が流行する。

この向斜構造に曲流する河川の中で、信濃國から流れてくる信濃川は、河川活動の最も大きな河川であり、向斜構造内に洪積世以来の堆積と侵蝕によって、その両岸にきわめて広大な段丘を形成している。信濃川段丘の発達は、中流域である中魚沼地方においては、主として右岸を中心に8面の段丘をもち、小千谷以北の下流域では左岸を中心に4面～6面の段丘面がみられる。特に下流域の段丘は、背斜構造の東北端が、100m～150mの高さになった丘陵端に、標高50m前後する段丘面が小千谷から与板に至る約20kmにわたって帶状に存在し、小千谷市の小栗田原、越路町の越路原・朝日原、長岡市の長峰原・岩野原・関原・西田原、三島町の千石原、与板町の楨原と呼称されるように高燥で広大な「原」を呼ぶ平坦面をつくり出している。しかしこの段丘面を拡大視すると、地表面では高燥であるが、覆流水を多く含み、それが流出して多くの小沢がみられ、平坦面を分断し、加えて向斜部の渋海川・黒川では段丘面の連続性が大きく断たれ、それらが大小の地域ブロックを形成している。

蛇山遺跡の立地する関原段丘は、黒川向斜と渋海川向斜に挟まれた八石山背斜の東北端に接合する標高50mの段丘面であり、北に向ってゆるやかな傾斜をみせて徐々に高度を下げて沖積地に接合する段丘である。遺跡に立つと北には黒川が流れ、東は谷川によって断れた三角形状の平坦面で、関原丘陵中にあっても独立した地域ブロックを形成している。

中越地区の向斜と背斜の地質構造は、島崎川向斜に国鉄越後線や国道116号線が走り、古代の北陸道もこの中を通過したと考えられており、また黒川向斜には国道8号線が走り、中越と下越を結ぶ動脈となっており、中世以来きわめて重要な交通路である。特にこの地域に山城（要害）が集中的にみられることはそれを証明するものであろう。したがって、背斜は交通を遮断し、向斜は交通ルートとしての意味をもち、当地方の生活環境を大きく制約する自然的条件となっている。蛇山遺跡は、柏崎から曾地岬を越えて黒川に、そして山地から平野に出たところにあり、古代以来交通の要衝地と考えられる地点に所在している（図版第13図、第1図）。（金子拓男）



第1図 蛇山遺跡の周辺地形図

①小木ノ城 ②鳥越城 ③雲出城 ④岩野城 ⑤西宮本城 ⑥五庵谷城 ⑦駒之内城 ⑧善間城
⑨三丁田城 ⑩片刈城 ⑪城掘城 ⑫長峯城

A蛇山遺跡 B蒲堤塗跡 C下屋敷遺跡 D原遺跡 E香塚遺跡 F日吉遺跡
1～8蛇山1～8号塚 9中ノ坊塚 10瓜割五ノ塚 11上の山塚 12供養塚 13火振り坂の経
塚 14西田塚群 15西田大塚 16能野宮の塚 17壇上の塚 ▲印 地蔵尊の所在

IV 遺跡の歴史的環境

蛇山遺跡のある長岡市白鳥町は、律令時代にあっては越後國古志郡の内にあった。律令時代の古志郡は長岡市・柄尾市・寺泊町・出雲崎町・与板町・三島町・越路町・和島村等を含む旧古志郡と旧三島郡を併せた地域が比定される。この古志郡に関する記録は少なく、大家・栗家・文原・夜麻の4郷(倭名類聚抄)と北陸道の大家・伊神・渡戸の3駅および三宅神社・桐原石部神社・都野神社・小丹生神社・宇奈具志神社の五社六座(延喜式)がみられ、加えて慶雲3年に大西寺領三枝庄(越佐史料)、延暦17年に邇古する東大寺領土井庄(越佐史料)が知られるにすぎない。

これらの郷・駅・神社・庄園等が、いずれの地に存在していたかは推測の域を出ないが、北陸道に関する駅は、北陸道が島崎川向斜内を通過していたとの推定が最も妥当と考えられるから、出雲崎・和島・寺泊の地内でその存在する可能性が強い。大家郷は大家駅と同所と判断され、出雲崎に比定されている。式内神社では、三宅神社を除く他は、それを繼承するものか否かは別としても、都野神社が与板に、桐原石部神社・小丹生神社・宇奈具志神社は和島村々内に存在している。さらに越後風土記節解によれば、三宅神社は大家郷三宅の里に、都野神社は文原郷に、宇奈具志神社は夜麻郷にあったと伝えている。以上のことから郷・駅・神社は、島崎川向斜内の出雲崎・和島・寺泊に集中する傾向にあることが知られる。また庄園では、三枝庄は慶雲3年以外の記載がなく、延暦17年朝原内親王が賜った越後國の田地250町歩を始源とし、弘仁9年にはじまる東大寺領土井庄は、永治2年土井庄・頸城郡石井庄と蒲原郡高田保(豊田庄又は加治庄)と交換し、その地が国衙領となるまで存続している(平安遺文2466)。土井庄の所有については、中世の高波保が比定されている(井上慶隆1969)。

古志郡内における須恵器の出土地をみると、次の4地域から出土する。第1地域は出雲崎・和島・寺泊の内陸部すなわち島崎川向斜内に集中的な分布がみられ、寺院跡推定地2ヶ所・窯址2ヶ所の他大小の集落址と推定される遺跡が47ヶ所に所在している。第二地域は長岡市の関原町を中心とする地域である。下屋敷遺跡は直径350mの環状中に須恵器・土師器・木材・木製品・種子等多種多様の遺物が発見されている大集落址(中村孝三郎1966)である。この他に、蒲堤・岩野原・羽黒の3ヶ所の窯址を含めて9ヶ所に存在する。第3地域では長岡市の宮下町・乙吉の両町を中心とする地域で、宮下町火焚面遺跡の大集落址をはじめ、間野・岩村両窯址を含めて6ヶ所の遺跡がある。さらに第4地域として見附市の刈谷田川左岸に柱根の出土みる庄川遺跡の他1ヶ所がある(新潟県教育委員会1975)。

文献でみられる郷・駅・神社の地域的集中傾向は、考古学における遺跡の分布と同一の様相を呈しており、このことからいって古代律令体制下の古志の中心は、島崎川向斜内の出雲崎・和島・寺泊に存在したであろうことが知られるのである。すなわち第1地域である。第3地域は、先述の土井庄に比定される地域で、弘仁9年以来東大寺領土井庄として存在した可能性が

指摘され、火焚面遺跡や間野・岩村の窯址等は土井庄の範囲で思考すべきものかも知れない。

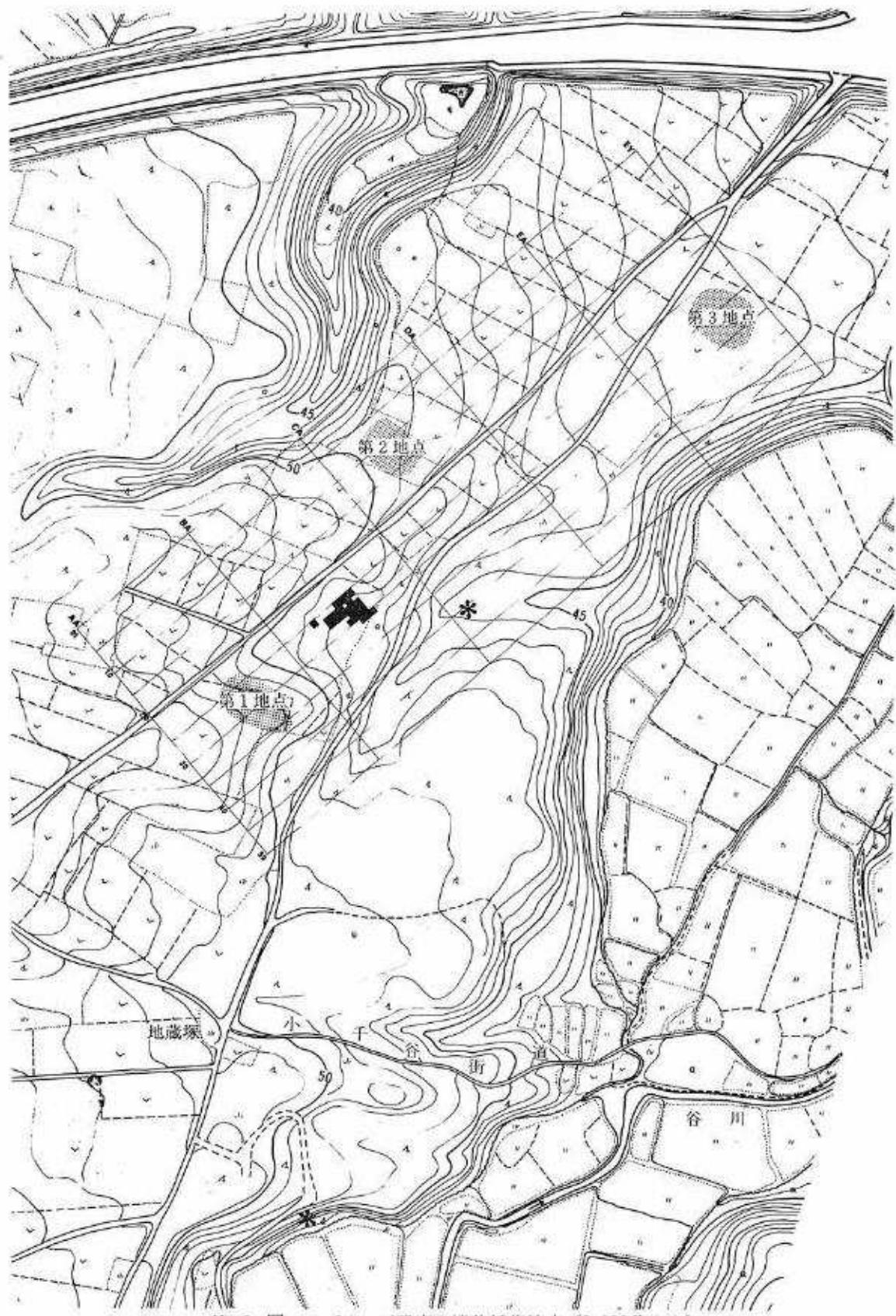
蛇山遺跡のある第2地域は、中世において白鳥庄と呼称され、正平8年京都建仁寺で寂した五山の文僧友梅禪師の故郷とされている。この地がはたして白鳥庄か否かは、從来種々の見解をみてきたのであるが、応永31年10月26日白鳥庄の莊官太田刑部少重が領家隨心院に対しての年貢納入請文中に「除・稻川・吉水・釜屋」の地名がみられ（越佐史料）、大永3年の熊野那智大社の旦那壳券中に「くにハゑちこのくにさんとうこほり、さいしょはのそき・しろとり一圓にて候、かミしろとり・しもしろとり、かみのそき・しものそきあり、上ハたきのみやをかきり、下ハふかさわをかきりにて候」（米良文書845）とあり、また永禄3年の伊勢神社の旦那壳券には「（略）藤かけ・田沢・ひと・大城・白鳥・玉川・井之浦・五色田・大みて・中上・上荒井藏王堂・とひ島（略）」（米田文書）等の地名がみられるが、「除・のそき・かみのそき・しものそき」は現在の上除町であり、閔原町である。降って江戸時代に入ると「越後國三島郡白鳥庄下除村」と寛文3年には呼ばれており（閔原町額興寺梵鐘銘文、中村孝三郎1975A），年代不詳なるも「白鳥庄笛川郷東方村」（長福寺文書）があり、この地が白鳥庄であったことは確実である。白鳥庄の庄域は、閔原町上除・深沢・宮本その他を含み、西山（晉地背斜）を越えて出雲崎町にも伸びていたと思われる。なお、現在の白鳥町は江戸時代に成立した集落といわれている。

この白鳥庄は、久安2年近衛天皇の皇妹八条院暉子内親王が準三后に列せられて賜ったものと伝え（三島郡誌）、安元2年の「八条院領目録」には「越後國白鳥」の記載があり（平安遺文5060），さらに、文治2年2月2日諸家預りの年貢未済を源頼朝に催促した莊園中にもその名を留めている（吾妻鏡）。その後、建暦元年6月に八条院が薨じられると隨心院領となり、これ以降少なくとも明応6年以降まで隨心院領と継承されてゆく（越佐史料）。

しかし、白鳥庄は文治年間以降は在地武家による年貢横領が激しく、天授6年には太田左衛門權少尉資明が同庄上野郷の預所職となつたときに、隨心院に対して年貢の確約をおこない、応永3年には、先述の太田刑部少重が登場している。白鳥庄の莊官は代々太田氏であつたらしい（越佐史料）。しかし、その後も太田氏の年貢横領は激しいものであつたらしく、文明10年には隨心院殿宝を、長享元年には成身院順宣を白鳥庄に下降させて年貢の徵収をおこなっている（大乘院日記目録）。太田氏の白鳥庄の支配は領家隨心院の勢力を排しながら段々と強化されていったことは疑う余地はない。

天正頃になると、白鳥庄は上杉氏の支配するところとなり、太田氏はこの地ではみられなくなり、江戸時代では、まず慶應3年に堀秀治、慶長15年松平上総守、元和元年酒井左衛門尉、同5年には松平伊予守、同9年には松平光長、天和3年御蔵入地、貞享13年より天明6年までは稲葉丹後守、天明6年～文政元年の間は、天領として代官所脇野町陣屋の管轄となり、文政元年より明治元年までの間は、出羽上の山藩松平山城守領となって明治維新を迎えている。

（金子拓男）



第2図 グリッド設定と遺物採集地点 (2,000分の1)

V グリッドの設定と発掘調査

グリッドの設定 (図版第14図下、第2図)

本遺跡は昭和48年4月と昭和49年5月の2回にわたる遺跡分布調査で、土取予定地内の3地点（第1地点～第3地点）から土師器および縄文土器が採集され、ボーリング探査でも遺物包含層の存在が推定された新発見の遺跡である。第1・第3地点は表面採集で土師器片が、第2地点は縄文土器片が採集された。

発掘調査の対象地は、南西から北東にのびる舌状台地の第1地点から第3地点を覆うように土取予定地内の $100 \times 250\text{m}$ を範囲とした。グリッドは原点を第1地点から西へ約 70m の位置におき、原点から北東へのびる線をX軸、X軸と原点で直交する南東線をY軸として、 $2 \times 2\text{m}$ を1単位として設定した。X軸の方位はN 50°E である。

X軸の名称は原点から北東へ 50m ごとに区切ってA・B……Fのブロック名を設け、さらに各ブロック内を 2m ごとに25等分してA・B……Yのアルファベットを用いて、 2m ごとにA C・B K・E Yなどの記号を附した。Y軸には原点から南東へ 2m ごとに01・02・03……50という数字をつけた。そして、X軸とY軸が交叉する各区をそれぞれの名称を組みあわせて、A M05・C P15・E Y45などと表記した。

発掘 (図版第14図下)

土師器を採集した第1地点のAF22から発掘に取りかかった。AF～BOでは、畑地を中心と植林されていない発掘可能な地域をX・Y軸とともに1グリッドおきに発掘した。この結果、BK～BO、26～30で土師器・須恵器がまとまって出土したため、周辺グリッドをほぼ全面的に発掘することにした。

BK～BO、26～30の発掘と並行して、縄文土器片を採集した第2地点、土師器片を採集した第3地点にも着手していった。第2地点は西側の沢に寄ったところであり、発掘中に磨製石斧が1点採集された。第2地点ではBP～CY、1～30を各軸とも4グリッドおきに発掘し、遺物が1点でも出土したグリッドの周辺も発掘した。ここではBP06・BP11・CA06・CF06・CF11の第2層茶褐色土から縄文土器片が総数約15片を出土したにすぎなかった。第3地点はすでに土取り準備のため、表土が削平されていた。Dブロックの一部も土取りの準備が始まっていた。このD・Eの各ブロックは4～5グリッドを発掘した。この範囲ではE Y41で須恵器片が2点出土したのみであった。

このようにして発掘を進めていったところ、BK～BO、26～30が他よりも遺物を多く出土したので、遺跡の中心部と考え、さらに精密な調査を行った。この結果、BP28とBP29の南

側断面に柱穴を1基づつ発見し(図版第16図下、第3図), 遺構の存在が想定されるに至った。

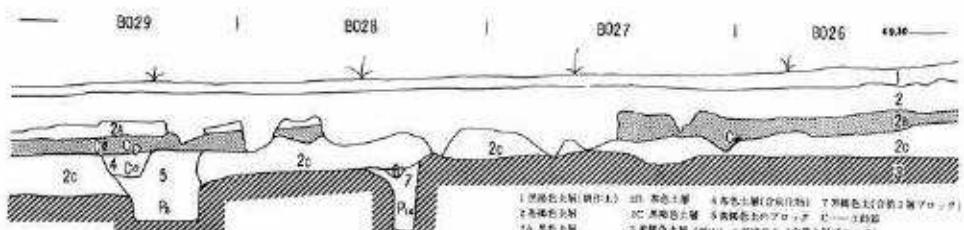
この柱穴は黒褐色あるいは茶褐色を呈する第2層の断面で発見されたため, 土砂の色調変化等で柱穴の上面プランを確認することは困難であり, 発掘中に張り床等の床面をさぐる手がかりはつかめなかった。これらのことから, 第2層内での遺構発見をあきらめ, 第3層地山面で柱穴等を追求することにした。

このため, 遺構追求に発掘作業の全力を集中し, B I ~ B P, 22~32の範囲にある残土を除去し, 第3層地山面を露呈させて精査した。この作業によって地山一黄褐色土上面に黑色土の充満した長方形や正方形の柱穴が規則性をもって8ヶ所に配列した状態で発見された。この柱穴群の周囲には竪穴式住居址にみられる周壁の立ちあがりはなく, 後述のような4間×2間の掘立柱式の建物1棟の柱穴群と推定した(図版第16図上, 図版第17図)。

これらのことから, 本遺跡の中心部は土師器・須恵器を伴って発見された建物跡周辺のB K ~ B O, 24~31の範囲と考えられるであろう(第2図 ■印部)。この地域は二回にわたる遺跡分布調査で遺物が採集されなかつたところであり, 第1地点から約50m北東に寄っている。第1地点では遺構・遺物は発見されず, 遺跡分布調査時の採集品のみである。また, 繩文土器を出土した第2地点は遺物の出土量が少なく, 遺構も発見されておらず, 繩文時代の居住性をもつた遺跡とみることは不可能であろう。第3地点はすでに表土が一部削平されており, 遺物包含層そのものが存在せず, 遺跡と判断することは困難であった。

土 層 (図版第15図3, 第3図)

本遺跡の基本層序は第1層黒褐色土(耕作土), 第2層茶褐色土, 第3層黄褐色土(地山)の3層で, 各層の平均堆積は第1層10cm, 第2層20cmである。この基本層序がみられるのは建物跡が検出された周辺を除く発掘調査対象地全域で, 第1地点の一部には第1層を欠くところがあった。建物跡周辺の土層は第3図に示したように耕作土から地山までの第2層が5層に細分され, 第3層上面が南東に傾斜しており, 小さな沢になっていたと推定される。遺物は第2B層茶色土に包含され, 地山面との間層の2C層には遺物がなかった。このことは沢が建物を構築する前か, それとも構築後に埋没したことである。(駒形敏朗)



第3図 BO26~BO29南側断面図(1/60)

VI 遺構

本遺跡で検出された掘立柱の東西棟建物1棟は、桁行軸N34°Eで東西7.76m、南北5.58mの規模をもつ(図版第16図～図版第19図)。桁行柱間数は4間、柱間寸法(cm)はP1-194-P2-192-P3-191-P4-210-P5、P11-179-P10-204-P9-178-P8-205-P7である。また梁行間数は2間でP1-273-P12-296-11、P5-285-P6-262-P7であり、建坪は43m²(13.3坪)である。

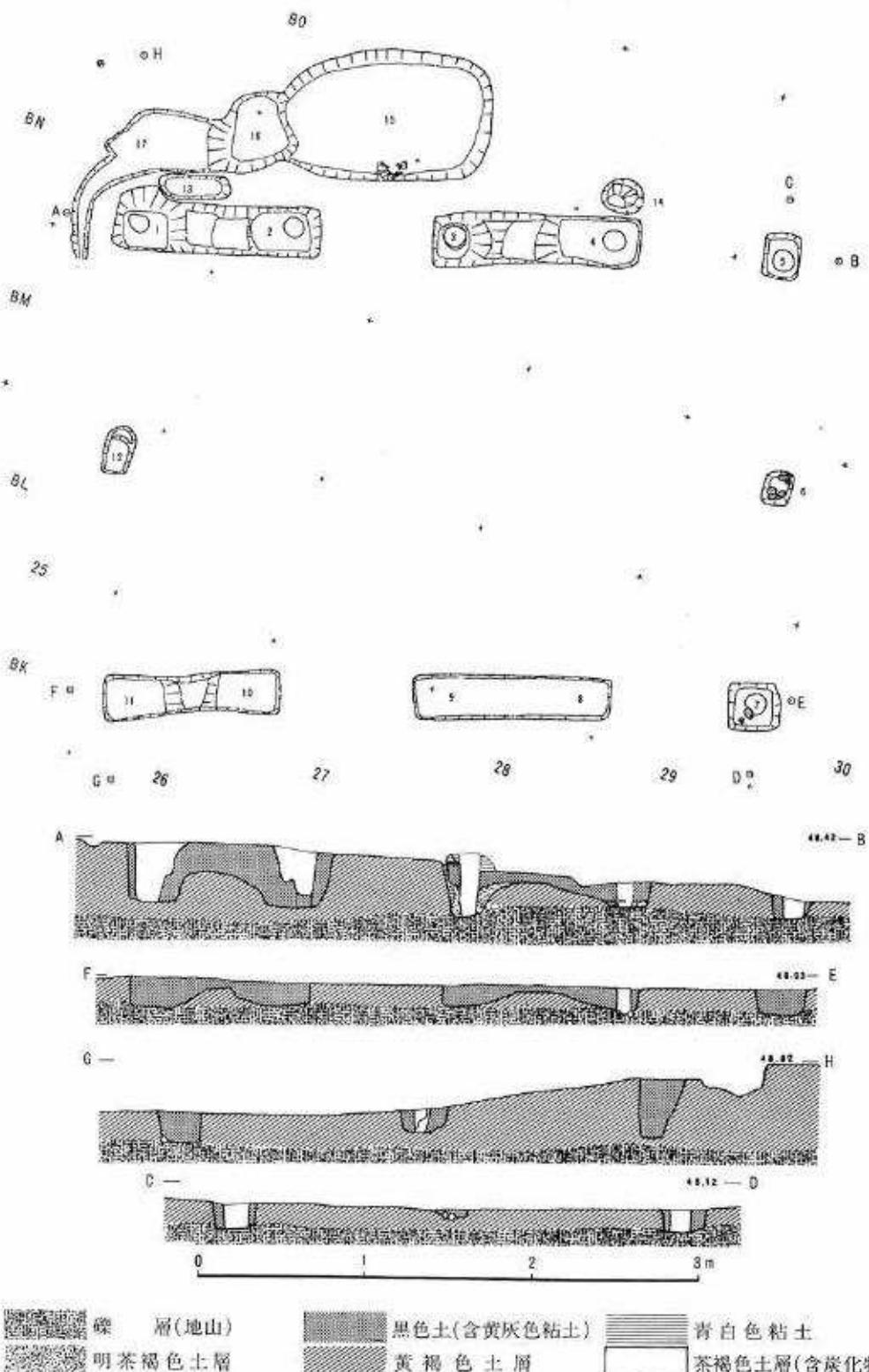
柱の据付掘方は、平面が長方形をなすものと、正方形をなすものとがある。長方形をなすものは、2本の柱の掘方を連続させたもので、巾約50cm、長さ250cm、底部は柱の据付部は平坦な方形をなすが、断面は「W」字状となり、比較的しっかりした造りである。正方形をなすものは、約50cm×50cmで、断面は「U」形を呈して4個みられる。柱穴1～11の他に柱穴4の北に直径20cm、深さ50cmの柱穴14があるが、この柱穴は2C層の下にみられるもので、本建物よりはるかに古い時代のものであり、本建物とは関連をもたない(第3図)。

掘方の中心には、柱根はみられなかったが、掘方内に詰められた黄灰色粘土と炭化物を混入する黒色土の中に、ほぼ直径30cmの柱根痕に茶褐色土が入っており識別が可能であった。また根固めとしては、黒色土が詰められる他に、柱穴1・3には青白粘土が加えられ、柱穴3・4では明茶褐色土がみられ、特に柱穴3では礫が詰められている(図版第18図3、第4図)。

本建物が立つ地形は、柱穴1・2の方向から、柱穴7・8方向に約5～7度前後の傾斜をしており、南側が開放的な条件を備えている。地表でみられるこの傾斜は、遺物包含層である2B層やまた地山表面も同様に認められるが、調査中には住居址の床面は検出されていないので、傾斜地を前提にすれば、床張りの建物であったと考えられる。この場合、床面を柱穴1・2で地面の直上においたとしても、南側や東側では約1m以上の床下長さをもち、地面との空間は非常に大きいものになると思われる。したがって入口は、東面や南面におくことは困難と判断され、北面の可能性が強く感じられる。

入口部に想定される建物の北西部軒下には、東西4.5m、南北最大巾1.08mの瓢箪形をした溜池状の凹み遺構がみられる(P15～P17)。これは橢円形状を呈し底の浅いP15と摺鉢状に深いP16、さらに巾25cm、深さ10cmの溝へと続くP17からなる。P17の底レベルはP15とほぼ同じく、また平面形態は異なるがその造りは柱穴15にきわめて似ているので、P15～17は本来同時につくられ、その後16がさらに深く掘られたのではなかろうかと考えられる。この溜池状の遺構とそれに接続する溝は、建物の北西隅を取り囲むように造作されており、このことから本遺構が建物に伴なうものであろうことは推定ができる。またP15の南側端に第6図7でみる完形の甕が出土した(図版第15図1)はそれを裏付けるものと云えよう。建物の床が最も地面に接する部分すなわち、入口部に流れ来る雨水などを遮断するために設けられた排水のための設備であろうか。

(金子拓男)



第4図 建築物遺構図

VII 出土遺物

縄文土器 (図版第20図1~6, 第5図1~6)

縄文土器は前述のように、西側の沢寄りのグリッドを中心に約15片出土した。1は深鉢形土器の口縁部破片で、胎土に石英質の砂粒を含み、色調は黄褐色で、焼成の良好な土器である。文様は口唇部内面にヘラ状工具で綴の刻目文を施し、口縁部には幅4mmの半蔵竹管で「Y」字形のモチーフをえがき、その「V」の中に横の平行沈線文を施して構成している。この「Y」字形のモチーフをもつ土器は柏崎市剣野E遺跡出土のものに類似しており、中期初頭の剣野E式土器(金子拓男1967)の範疇でとらえられよう。2は波状口縁をもつ深鉢形土器で、胎土に小さな砂粒を含み、黄褐色を呈し、焼成は良好である。これはいわゆる縁帶文系の土器で、波状頂点下に棒状工具で押された1個の凹文をもち、そこから口縁に沿って1条の沈線文がめぐっている。この縁帶文系土器は関東の堀之内1式の影響を受けたもので、刺突文の三十稻場式に對し南三十稻場式と称され、ともに後期初頭に位置づけられている。^(註1)3は中期後半から後期前葉にかけて出土する沈線文の土器で、深鉢形を呈するものと思われる。4~6は縄文が施文された深鉢形土器で、いわゆる粗製土器の一群である。4はLRの縄文原体を口縁と平行に、5と6はRLを左下に回転させ、縄文文様をつくり出している。3~6はいずれも胎土に小砂粒を含み、黄褐色を呈している。焼成は3が良好でかたく、他は軟質である。

石 器 (図版第20図7・8, 第5図7・8)

本遺跡から出土あるいは採集された石器は磨製石斧と石鎌の各1点で、いずれも縄文時代のものである。7は石斧製作時に頭部と刃部の両方向から研磨された面取り相互の競合による稜線がみられ、断面から両刃を呈すると思われる短冊型の磨製石斧である。刃部は斜めに欠損している。石材は硬質砂岩を利用している。8はチャート質の石材を用い、着柄部にえぐり込みのある無柄石鎌で、刃部は押圧剝離によって作出されている。

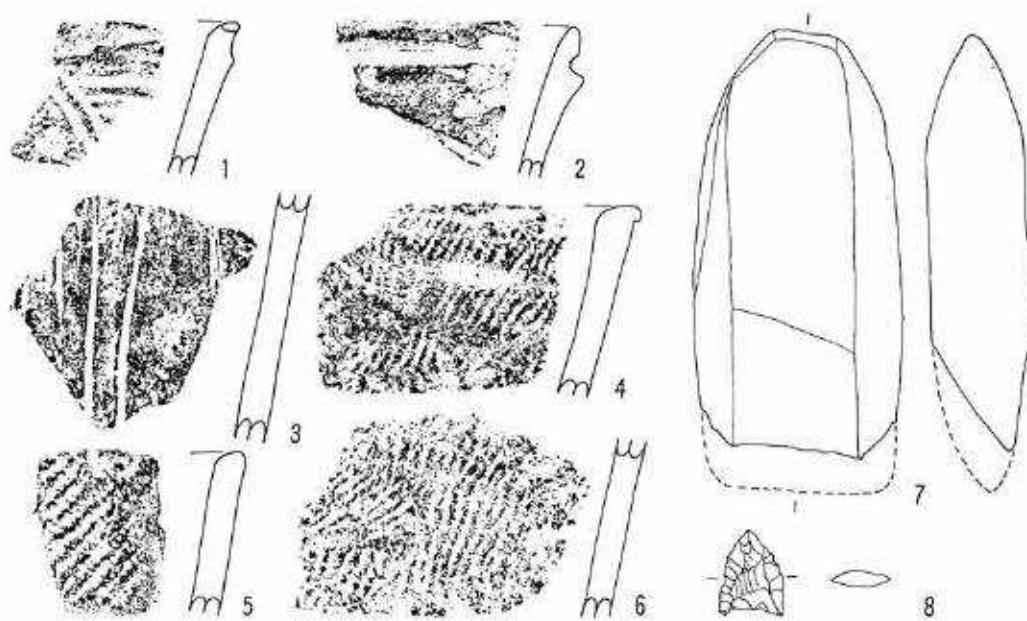
土師器 (図版第20図9~15, 第6図)

土師器はすべて建物跡が発見されたグリッドに限定して出土した。土師器の出土量は約50片で、器形別にみると壺が7片4個体、壗3片3個体、甕が約40片16個体である。

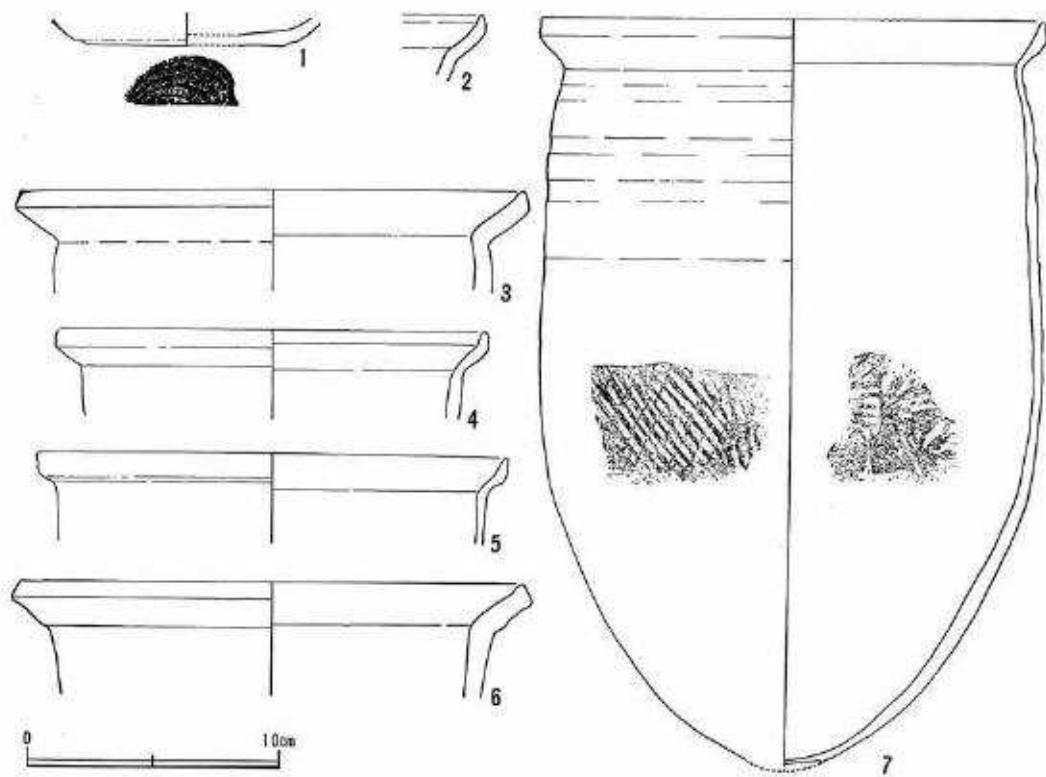
壺 (図版第20図10, 第6図1)

1は回転糸切りによって切り離された底部破片で、胎土に小さな砂粒を含み、色調は黄褐色

註1 この縁帶文系土器は三十稻場式との時間的関係をめぐり、論議を生じている。稻岡嘉彰は三十稻場式より遅く出現するとし(稻岡他1970)、関雅之は時間差を考えるには論題がうすいと考え(関1971)、筆者も同一時間のものだろうと考え(駒形他1972)。最近では中島栄一が橋状把手の変遷について出現するのではないかと述べている(中島他1975)。



第5図 出土遺物（縄文土器・石器）(1/2)



第6図 出土土器（土器）

を呈し、焼成が良好な土器である。环形土器はこの他に糸切りの底部が1個体、口縁部破片が2個体出土している。

堀 (第6図2)

堀はヨコナデが施された小破片で、全体の器形を知りえない。2は口縁部の小破片で口径を計測することの困難な土器である。頸部はゆるく「く」の字に屈曲し、立ちあがる口縁に続いている。胎土は小砂粒を含み、色調が黄褐色を呈している。堀はこの他に胴部が1点、口縁部が1点出土している。

堀の県内の出土例は柴村半の木遺跡(木間信昭他1973)、六日町長表遺跡(中村孝三郎他1975B)等の集落址などがあり、木遺跡と同じ形態のものも出土している。長表遺跡のものは須恵器として扱っており、また須恵器窯の笹神村狼沢第2号窯址からも同形態の堀が出土している(土井義夫他1973)。

甕 (図版第20図9・11~15、第6図3~7)

7は本遺跡出土の甕のうち、全体の器形を知ることのできる唯一の資料で、器高30cm、口径20cmを計る。形態は頸部で強く「く」の字に外反して直立する口縁に続き、丸底の底部へつながる長胴のものである。体部の最大径は19.8cmで、口縁から15cm下のほぼ中央部にある。整形は内外面に叩き調整を施したのち、口縁から胴上半にかけて右から左への回転でヨコナデ調整をしている。外面の叩目は幅約2.3mmの叩き板を使用した平行叩目で、幅2mmの条が6本あり、条の中に左傾する節状のものがある。内面のおさえには幅約1.5mmのものを使っている。7の胴部器厚は約3mmで、口縁の器厚は胴部に比してややふくらみ約5mmである。4・5の口径は7より小さく17~18.5cmであるが、形態は外反する頸部から直立する口縁につづく口部をもち、胴部は長胴を呈しており、器厚も約3mmで7と同様である。3・6は口縁が内傾し、頸部が「く」字に外反する長胴形のものである。口縁が内傾する点で4・5・7とは異なり、器厚も8~10mmと厚くなっている。口径は20cmで7と同じである。3~6は内外面ともにヨコナデされている。土器はすべて、胎土に小砂粒を含み、焼成は良好で、黄褐色を呈している。

頸部が外反して直立する口縁をもつ長胴形の4・5・7は長岡市下屋敷遺跡出土品(中村孝三郎1966)や半の木遺跡第2類に類似する。半の木遺跡は叩き成形されており、7と極めて近似するが、底部は不明である。叩き調整がみられ、直立する口縁をもつ長胴形のものは堀と同じく狼沢第2号窯址からも出土している。また、長岡市間野窯址(中川成夫他1958)からも同じものが出土している。3・6のように内傾する口縁をもつ長胴形のものは半の木遺跡第1類に類似

注2 ヨコナデや叩目が施された堀や甕は須恵器窯址からも出土しており、また戸根与八郎は見附市大平城跡出土の堀について、「従来の土師器とは器面整形・胎土・焼成が異なり、須恵器の生焼といった方がより妥当であろう」と述べている(戸根他1974)ことなどから、本遺跡のものも須恵器として扱った方が適正かもしれない。しかし、色調が青灰色の須恵器とは異なり黄褐色をしていることから土師器の範疇に含めた。

している。

須 恵 器 (図版第21図、第7図)

本遺跡出土の須恵器は精製した粘土を用い、色調は黒味がかった青灰色で、焼成は良好でかたいものが多い。器形は蓋、壺、塊、高台付碗、長頸壺の4種類で、それぞれの個体数は蓋が5、壺が15、塊が3、高台付碗が2、長頸壺が1である。須恵器は蓋形土器の2点を除き、すべて建物跡のグリッドから出土した。

蓋 (図版第21図1~4、第7図1~4)

1は中央部がくぼんでいるつまみをもつ天井部の破片で、つまみの径は3cm、高さは6mmである。2・3は建物跡から約170mはなれたE Y41の出土で、口径15.6cmを計る口縁部の破片である。口縁端部は内面に巻き込み、体部と口唇部の接点に、両方からヨコナデされた稜線がみられる。4はヘラ切りによって切離された天井部破片である。巻き込み口縁の土器は長表遺跡出土品や半の木遺跡第2類のものに類似している。

壺 (図版第21図5~12、第7図5~15)

壺は器高2.5~3.5cm、底径7cm前後で、体部の最大径が15cmの15を除き、口径12~13cmを計る土器である。底部はヘラ切りによる平底で、体部にヨコナデがなされている。6の底部は体部との接合面と思われる痕跡が断面にみられる。口径12~13cm、器高2.5~3.5cm、底径7cm前後でヘラ切りによる平底の土器は長表遺跡IA、半の木遺跡第1類それに下屋敷遺跡の浅づくり平底体のものに類似している。

塊 (図版第21図13、第7図16・17)

ヨコナデが施された口縁部破片のみで、口径14~14.5cm、器高3.5cm以上のものである。口縁端部の内面にソギがみられる。

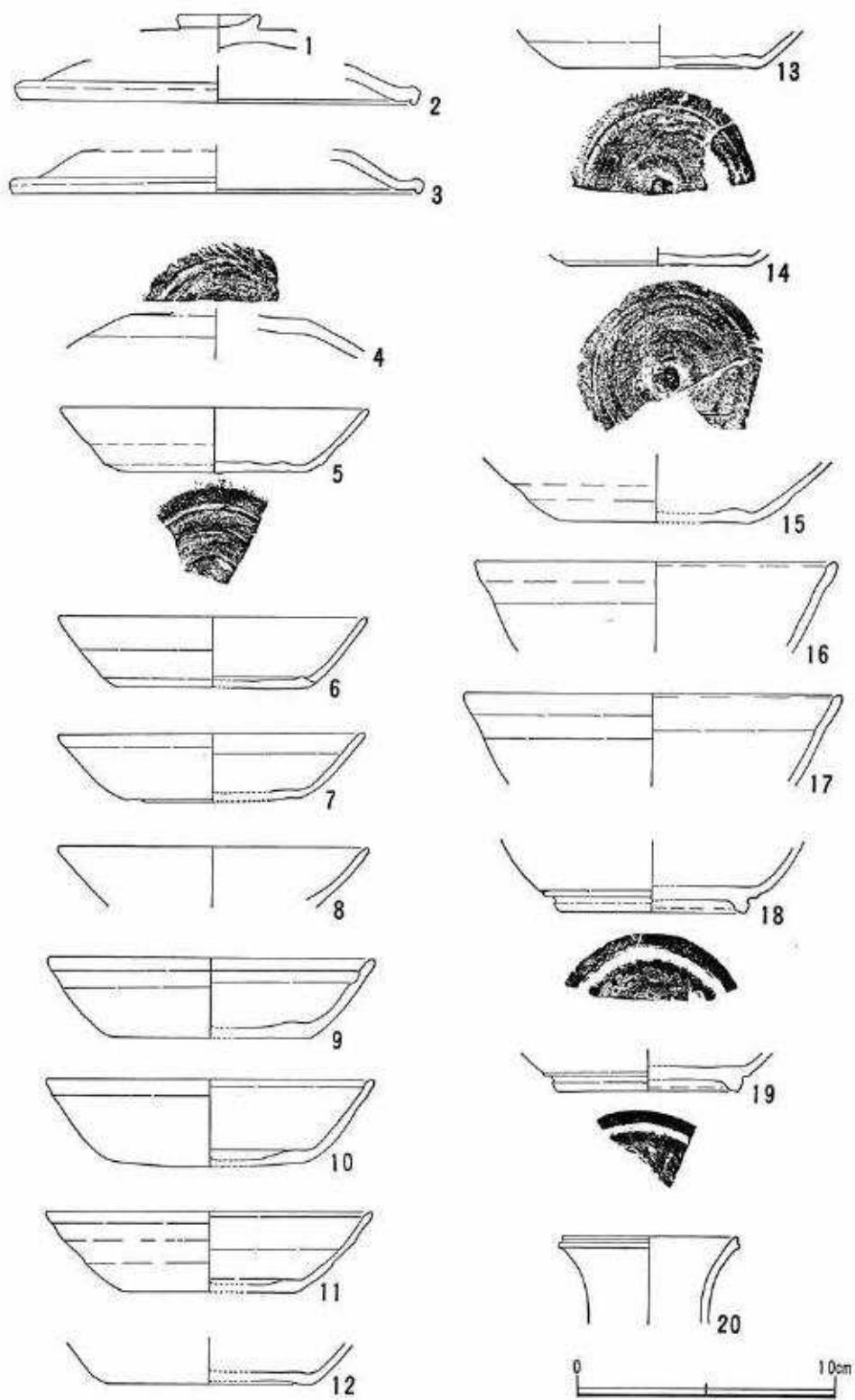
高台付塊 (図版第21図14・15、第7図18・19)

塊形土器の底部に高台をつけたと思われるもので、塊との接合部を外面から棒状工具を押しめて、それによってはみ出た粘土をヨコナデして、かくばった底部をつくり出している。

長 頸 壺 (図版第21図16、第7図20)

口径6.6cmの口頸部破片が1点出土したのみで、全体の器形は知りえない。形態は頸部が外反して立ちあがり、口縁部は外面に押圧を加えられ断面三角形を呈している。

(駒形城跡)



第7図 出土土器（須恵器）

VII 蛇山遺跡について

蛇山遺跡は、掘方を有する掘立柱の建物（4間×2間、東西棟）1棟とそこで使用された食器類、須恵器の壺（18口+α）、台付壺（2口）、碗（2口+α）、蓋（5口）、長頸壺（1口）、土師質の鍋（2口）、甕（16口+α）と土師器壺（4口+α）で構成される遺跡である。

この建物は、伴出した須恵器・土師器等によって年代決定がなされるが、須恵器の壺にあっては長表IAタイプ（中村孝三郎他1975B）のもののみがみられ、台付壺、塊、長頸壺・蓋等は、半ノ木・長表・下屋敷等の遺跡や狼沢・清見寺・岡屋敷・羽黒・間野・蒲原等の窯地から出土したものと基本的には共通する点が多くみられる。また土師質の鍋や甕についても同様である。したがって、県内のこの期の各遺跡出土のものとは基本的な共通性を認めることが出来、絶対年代を知り得る県外の資料と比較するならば、10世紀に降ることではなく、8世紀末から9世紀前半期に位置付けられるものと判断される。もしこの判断が許されるものとすれば、本建物もその時代のものとの推定がなりたち、久安2年に始源する白鳥庄の篠田外となることは明らかとなる。したがって本遺跡は莊園体制内ではなく、律令体制下で思考すべきものと思われる。そして建物遺構や出土遺物から本遺跡は律令体制下の1時期の造営であり、比較的短期間の活用をしたものとの把握が可能となる。

本建物は4間×2間（7.76×5.58m）であることは先述したが、本遺跡の時期に比較的近い年代の遺跡の4×2間の建物の例をみると、集落址とみられる加賀市西島遺跡では、8.6×5.0m、7.2×4.6m、8.8×5.0m、7.2×4.8m（平田天秋他1973）、庄園庁所と推定される富山県高瀬遺跡では7.0×4.5m、8.0×3.8m（阿部義平他1967）、郡衙址と考えられる群馬県十三宝塚遺跡では11.6×4.1m、8.4×3.6m（井上唯雄他）であって、桁行寸法・梁行寸法が本例と一致するものは少くない。この相異は時代差・地域差あるいはその建物が有する機能からくる差であろうか、原則的には全国一律の度量衡で行われる律令体制下にあって、この意味するものは大きく、今後解消せねばならない問題のひとつである。

蛇山遺跡においては本建物以外の建物は表面採集でみられる遺物の分布状況、発掘による遺物の出土状況および包含層や遺構の有無から存在しないと判断され、本建物が野中の1軒屋的なものであることは明らかとなった。したがって、本建物1棟が生活機能のすべてであったと言える。本遺跡とはほぼ同時代の遺跡・集落址は直線距離にして北東へ約1000mにある下屋敷遺跡であるが、仮に下屋敷遺跡と有機的結合を有する遺跡としてみるのも一考である。また黒川向斜で三島郡と結ばれ、段丘上を北上すれば古志郡の中心的地域の寺泊・和島に、南東に向かえば魚沼郡、東向すれば蒲原郡にと交通の要衝にある本遺跡は、あるいは古代の交通に關係するものであるかも知れない。いずれにせよ本遺跡が「野中の1軒屋」的な特殊性をもっており、また集落址でみられる須恵器等の生活セットを一応ととのえ、加えて蓋甕をもっていることが遺跡の性格を考える資料として注目される。

（金子拓男）

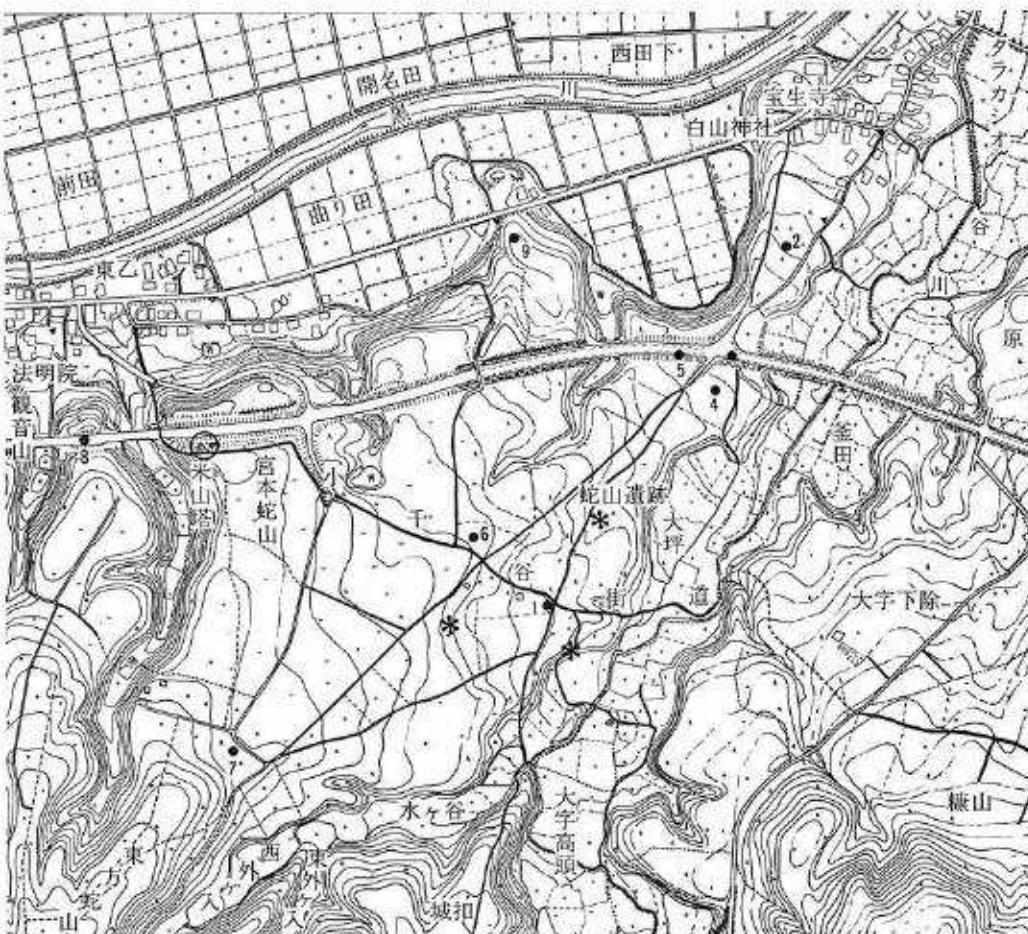
地 藏 塚 発 挖 調 査 報 告

I 地藏塚の概観

地蔵塚の発掘調査は、蛇山遺跡の発掘調査と同一事業として実施されたものであり、2遺跡はきわめて近接しているため、発掘に至る経過、地理的歴史的環境等については蛇山遺跡のもとの共通させた。

地蔵塚は、長岡市白鳥町字蛇山1584番地の1に所在し、同町の佐々木多一郎が所有する土地にある（図版第13図、第1図）。塚は白鳥町の集落の南西に舌状台地を形成する関原段丘面上に立地し、同集落から南にのびる農道と旧小千谷街道（浜道）が交叉する所に築かれている。塚は方形土壇状を呈し、塚上には小仏堂に「ジローサマ」と呼ばれる石造地蔵尊像が安置され、その背後には姿のよい松が生えて木陰をつくっている。

塚の周囲には広大な平坦地がひろがり、その多くは畠地となっているが、東側には松林が、



第1図 塚の周辺図 (1/10,000)

北側には杉林がみられる。台地上の平坦地における杉林をみると、本台地に覆流水が相当あることが知られる。そしてこの覆流水は各所で湧き出して泉となり（第1図*印部）、この地で農耕作業を営む農民ののどをうるおしている。

塚のわきを通る旧小千谷街道（浜道）は、椎谷一薬師峠一岩野一宮本一蛇山一穂山一高寺一深沢一来迎寺一片貝一小千谷のルートで、日本海沿岸の海岸部と魚沼地方の山間部を結ぶ重要道路で、江戸時代から昭和の初期には大いにその役割をはたしていた。「浜道」の呼称は、そのような経済活動を語るものであろう。そしてまた、この道路沿いには石仏・石塔も多く存在していることからしても、当時の本道路の重要性と利用度を知ることができよう。たとえば、薬師峠には薬師像3体があり、宮本から蛇山へ登る登り口には如意輪観音像1体が（第1図△）坂を登り上げたところには、米山塔と地蔵尊像1体がみられる（第1図△▼），地蔵塚は、小千谷方面から宮本に向って歩いて来ると、穂山の平坦から谷川におり、谷川を渡って沢を横ぎり、沢から台地に昇り上げたところに位置している（第1図—1）。

（和田 寿久）

II 地蔵塚の発掘日誌

6月29日 発掘器材を現地に運搬しテントを設営する。また、長岡市教育委員会および白鳥町区長堀善吉にあいさつに回り、発掘調査への協力を依頼する。

7月1日 現地調査に入る。地蔵塚の下草刈、周辺の整理をして、塚全景の写真撮影をする。その後、墳丘上の松を伐採し、塚の墳頂中心を基点としてABCDの4区画を定め、造り方を組む。

7月2日 測量のレベル原点を塚の東北方向約5mにある杉の切株上に設定（標高50.32m）し、塚の測量を開始する。同時に塚上の石組の平面実測を平行して行う。

7月3日 午前中、昨日以来の塚の測量を継続し、これを完了する。午後発掘に先立ち、白鳥町宝生寺富沢亮光住職（真言宗豊山派）にお願いして塚を供養し、また作業の安全を祈る。地主佐々木多一郎と親戚3名、白鳥町区長堀善吉、道路公団梅山用地課長、作業員代表として松本清重、武藤幸吉、県教育委員会金子文化財主事、駒形学芸員、和田嘱託が献香し、作業員全員が列席した。

7月4日～7月15日 塚関係の作業を中断して全員で蛇山遺跡の発掘にかかる。

7月16日 塚の発掘を開始。A・Bブロックの表層から多くのガラス製品・陶磁器片が出土する。周辺部にもグリッドを拡張して周溝の発見に努める。Bブロックの塚中心部の基底部近くで灰釉のかかる陶器1片出土。また、北面の表層部で寛永通宝2枚発見する。

7月17日 C・Dブロックの発掘を進める。A・Bブロックでは発掘作業がほぼ終り、OD、OAセクション壁の写真撮影および図面作製を実施する。A・Dブロックでは基盤層上に砂礫

の分布を確認する。また、Cブロックにおいて塚基底部に土壌を検出し掘り始めたが、作業は途中で終る。OAセクション壁内で慶應竿柱片、寛永通宝1枚、近・現代陶磁器片及びガラス片を発見する。

7月18日 OA・OB・OC・ODの各セクションの写真撮影および実測図を完成し、各セクション壁を取り除く。また、土壌を完掘し、全体を清掃して作業を終る。

7月19日 午前中、発掘後の塚の基底部の松と土壌の写真を撮影する。さらに土壌の実測を行って塚に関する発掘作業を完了する。
(金子拓男)

III 地蔵塚に関する伝承

この地蔵塚については、地主である佐々木家代々が、当家のものとして供養をおこない護持してきたのであるが、塚の構築目的や地蔵尊像の安置が、元来佐々木家に由来するものであるか否かは明確ではない。それらを明らかにする手段は何もないが、地蔵塚には、蛇山地内に存在する他の塚と異なり、下記のような伝承・伝説が残されており、その由来や経緯について語られている。

〔その1〕 その昔、この蛇山の地に大蛇が住んでおって、主と呼ばれていたと言う。あるとき、何かの理由で主は千本の赤池(長岡市大槻千本町)に移り住んでしまった。このため住民は、この主を神明社なる小祠を建立して祭り拝したという(松本政治言)。なお、神明社は塚から30m程西に寄ったところにあったと伝えられる。発掘調査時には、そこには小祠はすぐになく、小礫石のみが散在しており、その存在が確認された(第1図□印地点)。

〔その2〕 昔、宮本の明法院(真言宗智山派)なる寺の床下に悪人が住んでいた。この悪人は村人に隨分いたずらをして悩ませたという。このため、悪人をとらえて生き埋めにしようと、地蔵塚のこの地に穴を掘ってその用意をした。ところが村人の魂胆を知った悪人は、黒川を渡って先に逃げてしまい、村人が寺の床下に悪人をとらえに行ったときには、すでに悪人はいなかつたという(堀京太郎言)。

〔その3〕 塚の附近は古くは椎谷藩(?)の処刑場であって、多くの罪人が処刑されたと伝えられ、明治時代に入ってから塚をつくり、地蔵尊を建立して処刑された罪人の靈を供養したという(柴木辰太郎言)。

〔その4〕 地主佐々木多一郎の4代前の佐々木家当主である佐々木京太郎は、生前「自分が死んだらここに穴を掘って埋めてほしい」と言いのこして死んだという。しかし、宮本町の青木なる僧侶が、この地蔵塚の地への埋葬を止めたので、墓を別所に営み埋葬し、この地には塚を造り、地蔵尊を安置したものという(佐々木多一郎言)。

〔その5〕 境村(長岡市境町)の某が、江戸時代末期に3ヶ年間を費やしてこの地を開墾し

たという。その開墾記念に安政3年地蔵尊を建立したものと伝える。このため、この地を通称新田山と呼び、郷村の名主が最近まで佐々木家に毎年年始に来たといわれる。これは蛇山の地を開墾して以来おこなわってきたものという（白鳥藤五郎言）。

以上の五話の塚構築や地蔵尊建立に起因する伝承は、どの程度の信憑性をもって、蛇山や地蔵塚の具体的な事実を語っているものであるかは疑問である。しかし、これらの伝承は本塚が後述する他の8基の塚とは異なり、地元住民にとって何らかの形で意識されていた塚であったことは事実であり、また、身近な存在であったと言えよう。（金子拓男）

IV 白鳥町の塚

信濃川左岸地域の河岸段丘上には多くの塚が存在しているが、その中で越路町の朝日百塚、雲出の石田の百塚、三島町の千石原の百塚などの塚群が特に有名である。発掘調査に際しての白鳥町を中心に聞き込み調査や踏査した結果、東西を沢に狭まれたこの蛇山地域内には、本例を含めて塚が9基確認されたが、そのうち3基が現存する他はすでに破壊されていた。

第1号塚（地蔵塚）（第1図-1）調査対象とした塚である。

第2号塚（稻場の塚）（第1図-2）関原町1丁目高橋廣治の所有地にあり、現存しているものの破壊が著しい。現状は 7×4 m、高さ約1.5mを計り、方形塚で黄褐色土をもって構成する。70~80年代前に地主高橋廣治の父が土臼を作る際の土をこの塚より取ったために崩されて、原形は失なわれている。土取りに際して古銭が出土したと伝えられ、寛永通宝39枚の他、政和通宝、宣徳通宝、開元通宝、淳化元宝、大觀通宝、天□通宝、天聖通宝、嘉□元宝、紹□元宝、皇宋通宝、大福2枚等の古銭67枚が高橋家に伝えられる。

第3号塚（蛇山の塚）（第1図-3）高木忠太郎所有地内に方9尺、高さ4尺の方形塚で、黒色土と黄褐色のまじった塚があったが、昭和の初期に破壊したという。塚上には松の木があり、刀（約2尺5寸の長さ）が出土したと伝えている（柴木辰太郎言）。

第4号塚（第1図-4）白島英雄所有地内に12尺×9尺、高さ4尺の長方形をなす塚があり、黒色土と赤色土による堆積がみられたが戦後の開墾で破壊した（柴木辰太郎言）。なお、本塚については方3間で高さ10尺の規模であったとの言もある（山田ヨミ言）。

第5号塚（第1図-5）柴木莊治所有地内にあったが、国道8号線関原バイパス工事で破壊されてしまった。径6m、高さ3m程度の規模の円形塚であったという（白鳥藤五郎言）。

第6号塚（狐塚）（第1図-6）径5尺、高さ3尺で黒色土のみで構築したもので円形塚といわれ、大正年間に崩されてしまったと伝えている。関原3丁目の山田菓子屋の所有地で、狐が塚に巣を作っていたので狐塚の名が出たらしい。

第7号塚（玉池の塚）（第1図-7）宮本町東方の堀善吉所有地内に方9尺、高さ3尺の方形塚

が現存している。伝説その他はない。(堀善吉言)

第8号塚(観音山の塚)(第1図-8)宮本・明法院の観音山に径9尺、高さ5尺の円形塚が存在したが、バイパスの工事で破壊されたと伝え、土色や遺物については不明である(加藤常作言)。

第9号塚(中之坊の塚)(第1図-9)宮本町宇蛇山の舌状台地の先端部に位置する。方20m、高さ5.3mの方形塚で黒色土と黄褐色土が版築状に構築されている。方形をなし、塚上平坦部から小礫が葺石状にみられ、珠洲焼の甕と青石角材が出土しており、明らかに14世紀を前後する時期のものである(中村孝三郎1970)。

(金子拓男)

V 塚の外形と現状

塚は第2図でその外観を図示したが、規模は基底部で東西軸4.6m、南北軸4.3mを測り、塚上部で東西軸1.9m、南北軸1.7mの平坦面をもち、高さは塚裾に東接する路面より70cmを測る。断面が台形状をなす方形土壇の現形態を呈している。塚の長軸はN60°Wで旧小千谷街道に平行し、白鳥部落よりのびる農道とはほぼ直交する。塚法面の傾斜は東側で約42°の急勾配を示し、他の三面は25°~30°程度でやや緩やかな傾斜をもつ法面であった。

塚上平坦面のほぼ中央には、切石の土台石が半ば土中に埋めて置かれ、その上には蓮台がおかれており、その上には後述の石造地蔵尊が農道側の東を向けて安置されていた(図版第23図1)。地蔵尊を安置する小仏堂は、昭和48年3月に地主の佐々木多一郎の再建になるもので、切妻屋根の平入りで、正面を吹放とし、三方を板壁をもってかこんでいるもので、正面55cm、奥行48cm、高さ67cmを測る。小仏堂の前には切石の供物台があり、堂の四隅には方14~18cmの基礎石が置かれていた。そしてこれらをとりかこむように拳大の礫石が「L」字形に近い状態で、長軸を水平にして、塚上部に一段を形成していた(第2図)。

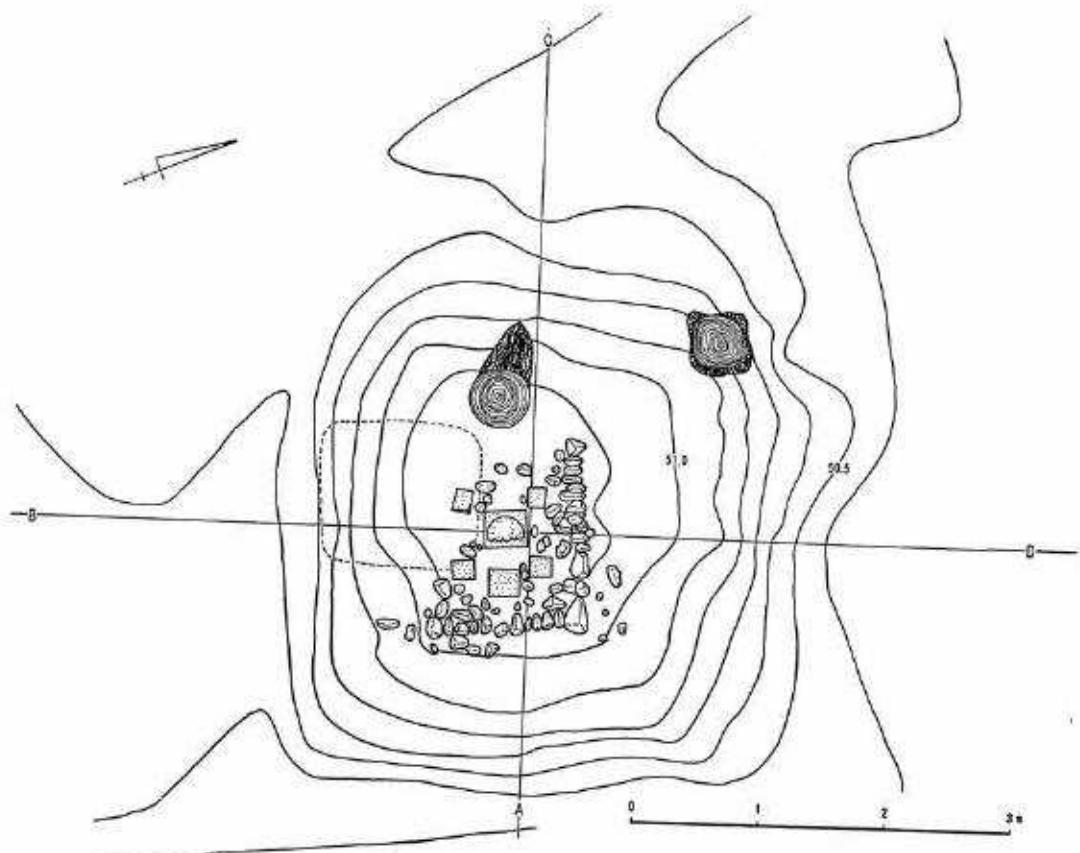
小仏堂の背後の塚上には目通り1.4m、高さ約6m、樹齢133年を数える赤松(図版第22図1・2)とその北寄りの塚の北西コーナーには目通り回り1.25m、高さ約7mで54年の年輪をもつ杉が生えていた。

(和田寿久)

VI 内部構造

本塚の構築状態は第4図のごとくである。表土を除いて土壇を掘り黄褐色の基盤層の上に4層の封土を盛ったものである。その厚さは基盤層上面より墳頂部まで約90cmある。第5層以下は自然堆積による地山層であった。なお、層序は塚のほぼ全城にわたる土層を第1~第4層にわけて基本層序とし、部分的な土層、又は間層にはA、B……Hを付した。

第1層は褐色土層で墳頂部より帶状に塚裾に達するが、ACセクションではコケ等が混入し



第2図 地蔵塚実測図(1/60)

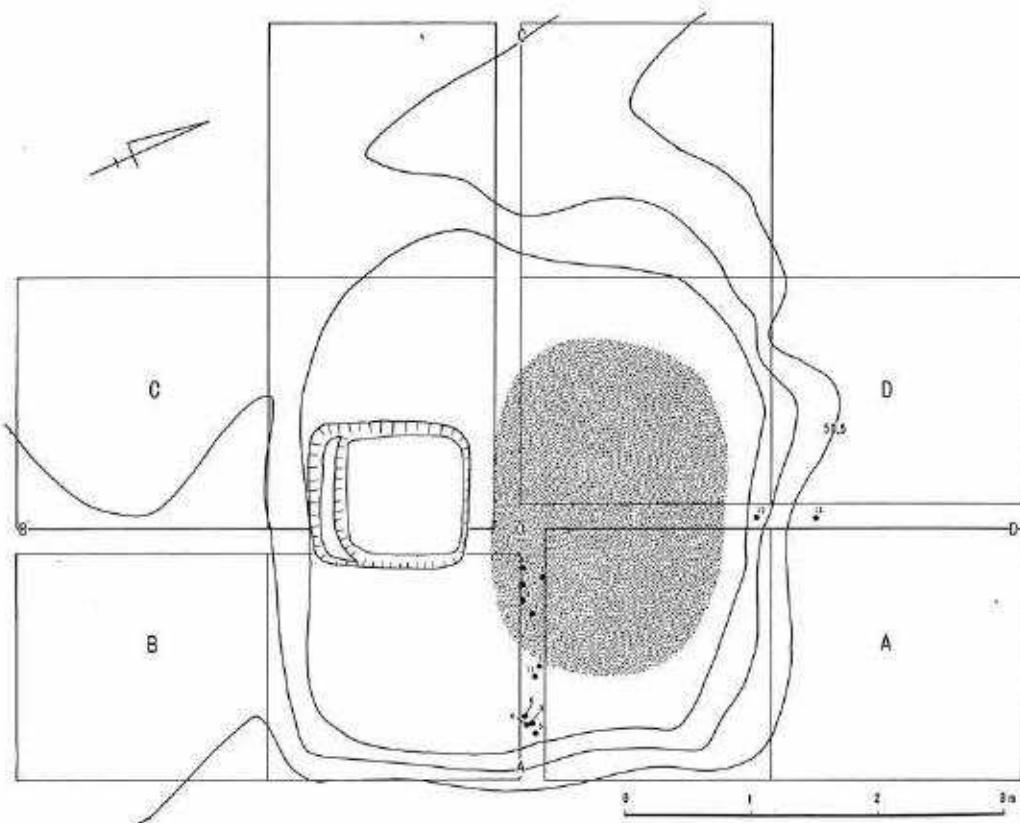
ている上層と区別して2層に分けられる。また、農道に面した東法面の同層には拳大の礫石が数個斜面をかためるようにして検出された。裾部では盛土と往時の表土と思われる第1A層との区別は困難で、その境界は明らかではない。本層は主として塚の東側部分に盛られている。遺物は寛永通宝が1枚、北東の基礎石直下より出土した(第3図・第4図1)。他にビール瓶の破片や磁器片が東法面の第1層下部周辺より多量に検出された(第3図・第4図2~5)。

第1A層は暗褐色土層で、塚裾部から周辺の表土に継続する旧地表面と考えられる。

第2層は茶褐色土層で塚中心部から北と東裾部で確認され、第1層と共に第3層を覆う。B Dセクションではその下に第1A層が堆積しているにもかかわらず、第3層との境界ははっきりしていない。B Dセクションでは、第2層及び第1A層から寛永通宝が2枚(第3図・第4図12・13)、他に磁器片、ビール瓶の破片がA区からB区にかけての東法面を中心に出土した。

第3層は有機物を含む黒色土層で封土の大部分を占め、塚の盛土の主体をなし、西及び南法面では塚の表面に露出する。塚裾部では第1A層と接するがAC、BDセクションでは境界が不明確で、識別が不可能であった。なお、塚の西側にそびえる松の根の主体部は第3層中があり、その側根は第3層を中心に第5層上部まで張り出していた。

第3層中にはブロック層がみられる。BDセクションでは第3A層・第3B層が、ACセク



第3図 地蔵塚グリッド設定および基底部遺構図(1/60)

ショーンでは第3C層～第3H層があり、あわせて8層が堆積している。第3A層～第3G層の7層はそれぞれ褐色と茶褐色を呈する土層の2つのグループに分けられる。茶褐色土層には第3A層・第3C層・第3D層・第3F層が、褐色土層には第3B層・第3E層・第3G層が見られ、共に粘性が強い。遺物は第3層より磁器片(第3図・第4図6)が、第3F層下部より「慶廣」と刻まれた切石の破片(第3図・第4図9)が、第3G層よりビール瓶片(第3図・第4図7)が検出された。第3H層は黒色を呈し、灰釉陶器の高台部分(第3図・第4図8)が出土している。

第4層は粘性のある茶褐色土層で基盤層上に10～20cmの厚さで塚のほぼ中心部にうすくひろがり、BDセクションでは第6A層と接している。OAセクションの第4層よりビール瓶片(第3図・第4図10)、磁器片(第3図・第4図11)が検出されている。

第5層は黄褐色粘土層で40cm～50cmの厚さをもち、段丘を構成する土層の中で最上層にみられる自然堆積の地山層である。塚を盛る第1層から第4層はこの層の上に盛られている。

第6層は段丘を構成する灰色粘土層に砂礫を大量に含み、他で観察すると厚さ7～8m、薄くても3mを測り、地質では魚沼疊層と呼ぶ自然堆積層である。

塚の中心部よりやや南に寄った所に第5層を切って第6層に達する土壤が掘り込まれている(第3図、第4図)。その規模と形態は、上面では東西1.2m、南北1.3mで隅丸方形を呈し、その

南側には第5層上面より-30cmのところに巾20cmのステップ状の段がみられる。底部は第5層上面より約80cmの深さがあり、一辺90cmの正方形をなしており、上部より若干狭くなり、その断面は逆台形状を呈している。また、土壌の長軸はN30°Eで塚の長軸にはほぼ直交する。なお、土壌の底部には拳大の河原石が敷かれた状態で多数見られたが遺物は何も検出されなかった。土壌内の土層は2層に分けられ、黄褐色砂礫層の第6A層がレンズ状に、その下に灰褐色砂礫層の第6B層が充満していた。第6A、第6B層は色調に差があるが本来同一層と思われる。色彩及び粒子の大きさの相違は、第6A層は乾燥しており、第6B層は溜水を含み、十分な水分を保有していることからくる鉄分の還元作用によるものと思われる。第5層は台地上を覆っているため地表面には礫はまったく認められず、したがって第6A層、第6B層の礫は他から持ち込むか、土壌を掘り上げた際の堆土をもちいるかいずれかである。ここでは後者と判断しておく。

なお、第5層上面の土壌北側には東西約3m、南北約2mの楕円形状に大豆大の細礫が散布していた（第3図アミ部分）。（和田寿久）

以上のように、第5層の黄褐色粘土層の地山層を基盤として、第1層～第4層の土壌を盛り上げることによって本塚を構築しているが、下記事項が注意される。

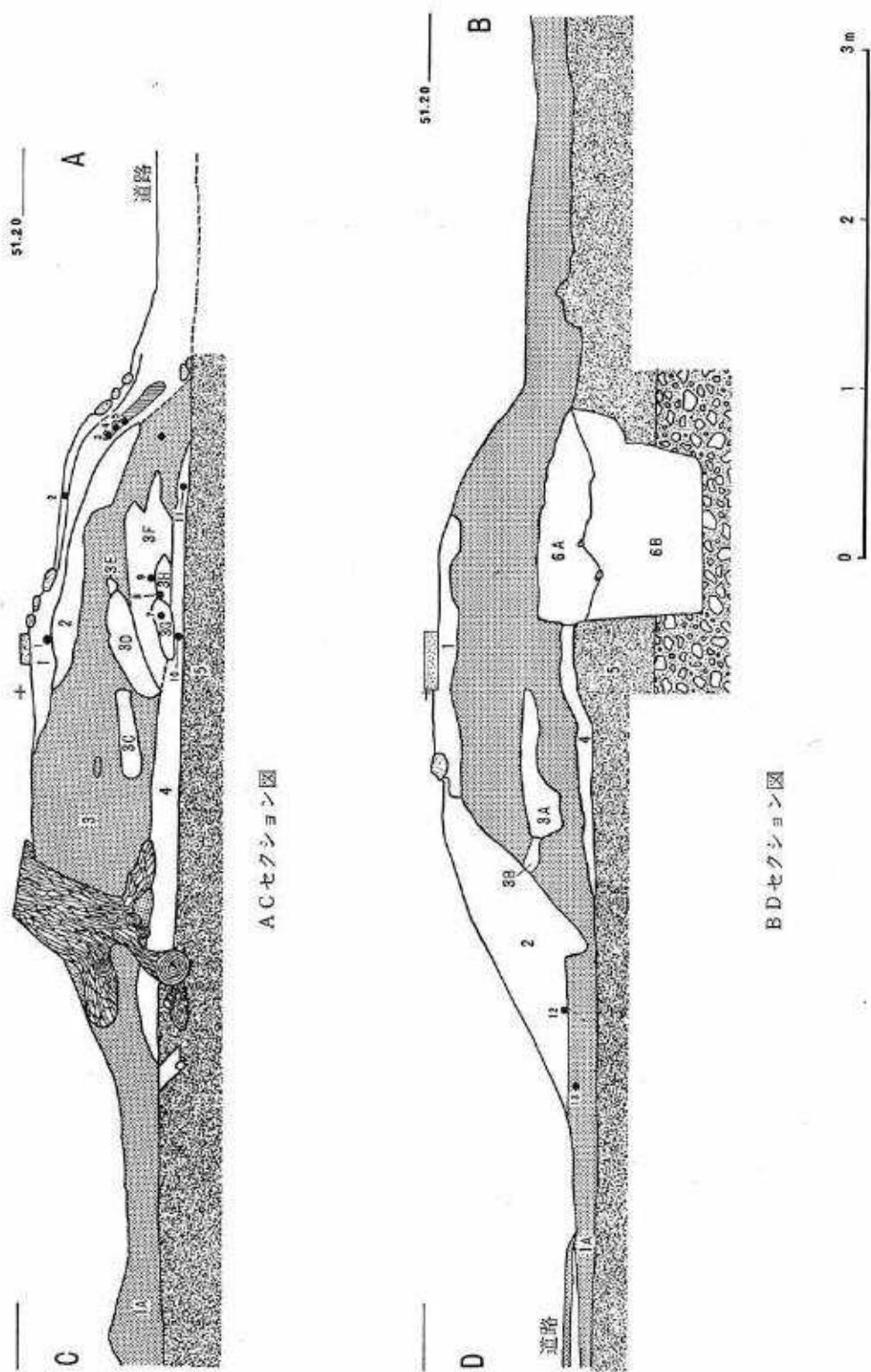
第4層の茶褐色土層が10～20cmの厚さで薄く広がるが、本層は元来の塚の基底部中央のみにその分布がみられ、意図的に敷かれたとの判断が許されるようである。とすれば、本塚の構築目的にきわめて重要な意味を内蔵している。

また、黒色をなす第3層は、塚の主体を構成する土層であるが、第3層中に133年の年輪を有する松が育生していることもきわめて重要な点であろう。松の根のうち、側根は第3層内に伸びていることから、第3層の盛土は133年以前に盛ったものか、降っても松の移植を考慮して20年を経ることは考えられず、その年代は江戸時代の末期をその最下限にとってよいと思われる。

第3層中や第3層と第4層の間のブロック層は、量的には多くはなく、塚全体に平均してならされた様子ではなく、版築工法を物語るような有り方をしていない。したがって本塚は第3層が塚の構成の主体を示すことから、褐色土層のブロックが存在するも、原則的には黒色土層による構成と見るべきと考えられる。

第1層と第2層は、古い塚の上に2次的に積み上げられた盛土で、第1層は塚の東側部分に厚く、第2層は北側部分に厚い。そして北側部分で第2層の上に第1層がのることから、北側に第2層を盛った後、東側部分に第1層を盛ったと考えられる。また、第2層中には54年の年輪をもつ杉が根を張っている。

（金子拓男）



第4図 地蔵塚断面図 (1/60)

VII 遺物

本塚の遺物としては、塚上に安置されていた地蔵尊像、蓮台、供物台などの石造物と封土中より出土した寛永通宝、近・現代陶磁器、ガラス製品である。

(1) 塚上の石造物 (図版第23図2、図版第24図8、第5図-5)

地蔵尊像 (図版第23図2) 像高42cm、胴回り55cm、胸幅16cmの比丘形を呈する坐像で、全体に比して頭部は大きく、手は合掌させている。通肩の衣で身を被い、衣の裾は結跏趺坐を組む足の前まで垂れ、右肩には袈裟をかけている。彫りは全体に浅く、襞と襞の間隔は大きく、形式的に簡略になっている。彫刻は正面と側面に施され背面を研磨する。石材は以下で記す石造物と同質の安山岩製で、当長岡地方では「釜沢石」と呼称されているものである。

蓮 台 長径30cm、短径18cm、厚さ8cmの変形橈円状の台石で、正面及び側面に7葉の蓮弁が交互に重ねられて陽刻されている。

土 台 石 縦28cm、横34cm、厚さ8cmの直方体を呈する4個の切石である。

供 物 台 (図版第24図8、第5図-5) 縦22cm、横24cm、厚さ17cmの直方体の切石で、約7cm程地中に埋められていた。この石の長軸を上下と見た場合に正面と左右側面が研磨されて仕上げが施されているが、裏面および上下面にはノミ痕が残り、荒削りされたままである。本品は2つに割れ、また一部欠失していたが、本塚第3F層より出土した破片が、この部分に補填した。これらを接合し、復元してみると左側面に篆研形で一字3.5mmマスの楷書体で「慶應二寅八月」との刻銘がみられた(第5図5)。このことによって本品は供物台として使用されていたが、宮本堀之内町にある安政10年在銘の庚申地蔵尊像が基礎石と蓮台の間に直方体の切石を立てて竿柱としていることなどからして、この供物台は本地蔵尊像の竿柱であったと判断される。

(2) 寛 永 通 宝 (第5図1~3)

第1層より1枚、第1A層、第2層より各1枚ずつの計3枚出土し、すべて銅錢である。1の径は22mm、穿の1辺は7mmで茶褐色を呈し、字体、大きさなどより元禄期の亀戸銭に近い。2は径が23mm、穿の1辺は6mmでやや大きく、元文3年の秋田銭に類似する。3は最も大きく、径が24mm、穿の1辺は7.5mmで紫褐色をしており、享保11年の七条銭に近い。(青山礼志1974)

(3) 陶 磁 器 (図版第26図-1、第5図-4)

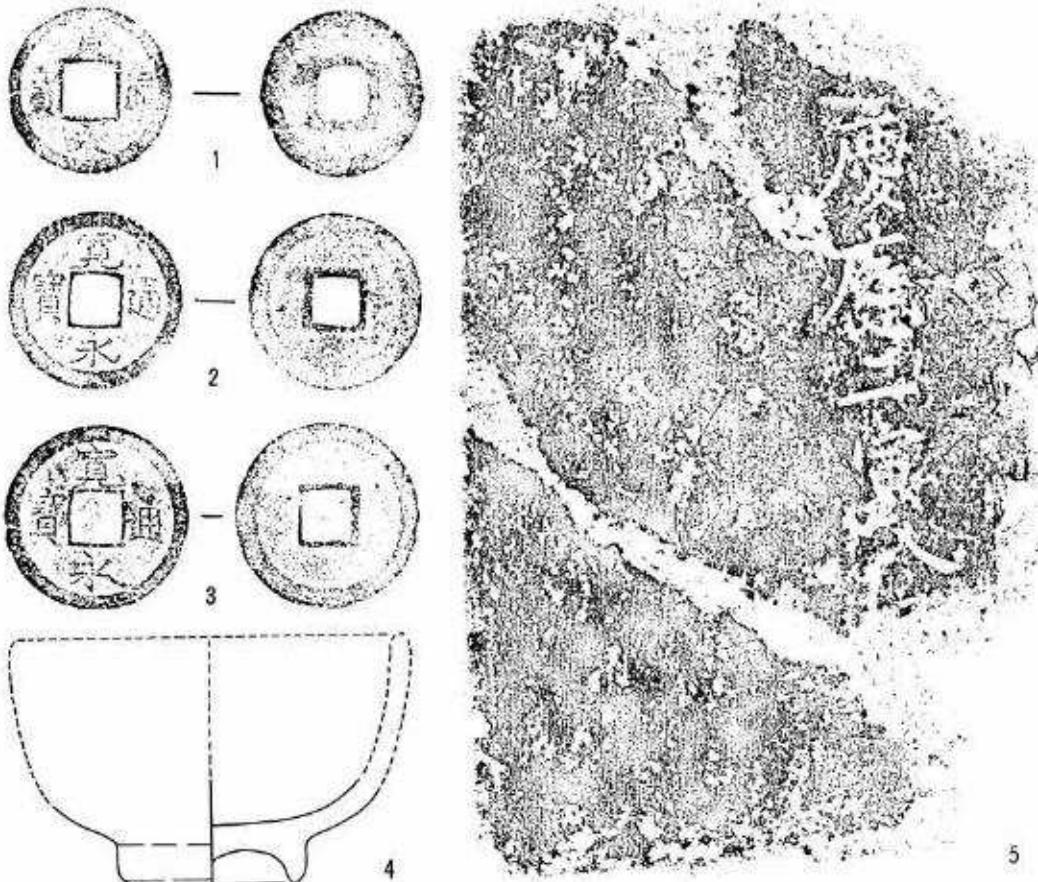
本塚より出土した磁器は徳久利5点、盃3点、急須1点、花瓶2点、陶器は碗1片で、すべて近世以降のものと推定される。これらの中でも、特に製造年代を確するとと思われる徳久利、盃、碗の各々1点ずつ取りあげた。

徳 久 利 (図版第26図9) この徳久利は底径5cm、頸部より上が欠け、現存の高さが約7.7cmを測る。底部は揚底を呈し、胴部円錐で、肩部より頸部にかけて狭くなっている。素

地は白色で高台疊付部を除き全体に透明釉が施されている。正面には薄い藍色で「越乃魁」、その裏には「新潟県関原醸造元口本家」、底部に「千峯園製」と描かれていた。本品は戦前まで関原町の蔵元であった川口家が大正初期に多治見に注文し、配布したものである（川口太郎言）。

盃（図版第26図2） 盃は上部を欠き、現存の高さは2.5cm、その径は6.2cm、高台の高さ6mm、疊付部の厚さ1mm、器壁の厚さは底部で3mm、胴部で2mmを測る。素地は白色で透明釉が高台疊付部を除き全体にかかる。盃の内側には金箔で32の花弁をもつ菊花と3枚の桐の葉が描かれ、近衛兵の除隊記念に下賜されたものである。白鳥町では故武藤金吾が大正6年に近衛兵を退役している。本品は武藤が除隊の際に下賜されたものであろうという（松本政治言）。

碗（図版第26図1、第5図4） 碗は腰部より上部を欠き、現存の高さは3cm、その径は8cmで、高台の高さは1.1cm、器壁の厚さは底部で7mm、腰部で6mmを測る。高台際及び高台は籠様工具で整形され、高台内には兜巾が見られる。素地は黄褐色を呈し、釉は内側に黄褐色、高台内を含む外側に灰褐色の灰釉が高台疊付部を除き全体にかかり、江戸中期の黄瀬戸系のものと思われる。



第5図 出土遺物

1～3 寛永通宝(引) 4 陶器(茶碗)(引) 5 地蔵尊の供物台(竿柱)拓本(引)

(4) ガラス製品 (図版第26図13~16)

ガラス製品も多数出土し、ビール瓶、薬瓶が大部分を占める。ビール瓶の中には16の如く「DAINIP[PON]」、13、14のように「TRADMARK」の文字や「D・B」と読める破片が確認されている。これらは明治39年より昭和24年まで続いた大日本ビール製のものである(佐藤繁1967)。

(和田寿久)

VII 地蔵塚について

(1) 地蔵塚の構築手順とその年代

地蔵塚を調査した結果、層序と出土遺物との関係で矛盾する点がある。それは133年の年輪を数える松が根を張る第3層は、層序的攪乱が全く認められない状態で堆積しているにもかかわらず、第3層以下の土層からガラス少片、竿柱破片等が出土している事実である。このことは、第4層とそれに接する第3F層、第3G層、第3H層の各ブロック土層が第3層より新しいものとなり、松の育生と層序との関係は説明が不可能となる。前記の各層は、松の存在から知り得る第3層の年代と同年か、あるいはそれ以前の年代構築であり、また、第3A~第3H、および第4層は層序関係から第3層よりも古く、少くともビール瓶片が出土する年代ではないことは確実である。したがって、第3層内に根を張っている松の存在は否定出来ない事実であり、下の土層にビール瓶片等が発見されたことは理解に苦しむ現象である。この現象が可能になる要因としては、第3層が有機質分を含んだ黒色土層で、比較的やわらかい土層である点を考慮すると、発掘調査によるその証拠となる事象が検出されなかつたが、モグラや野ネズミ、またはミミズ等の穴を通して混入したものと判断する以外に理解できない。先述したように、第3層は調査時、特にセクション壁においては厳密な層序別の排土をしながら遺物の検出に努めたが、土層の攪乱は認められず、松の側根が第3層内にあることから、何んらかの事由により落ち込んだものと判断している。

以上のような前提にたって、塚の調査結果について集約すると下記のごとくになる。

- ① 塚の外形は方約4.5m程の方形プランをなす方形塚であること。そしてこれは本来の形態ではなく、第1層、第2層を盛った第2次的型態であること。
- ② 本来の第1次塚は第3層以下の土層により構築されたものであり、方3.5mの方形塚の可能性が思考されること。
- ③ 第1次塚には土壌が伴なう。
- ④ 土壌北側部の第5層上面には、きわめて薄く砂利の分布が確認された。
- ⑤ ④の砂利の存在によって、塚および土壌を掘る前に表土が除かれ、第5層の上面が露出

されている。

- ⑥ 挖り上げた土砂で、土壤を再び埋めもどしている。
- ⑦ 第1次塚基底部に第4層の茶褐色土が敷かれている。
- ⑧ 第3層内に133の年輪を数える松が育生し、その側根は第3層内にあり、その中の1本は、第3層と第4層の間をはって、先端の1本が土壤内を通じて第6層に伸びていた。
- ⑨ 塚と松との関係は、松が第3層内にあることから、塚造営後、直ちに植えられたか、または第1次塚よりの時間的に遅れる年代に移植されたか、いずれかと考えられる。
- ⑩ 第2次盛土である第1層および第2層は、その出土遺物からして明治中期以降に盛られたものである。
- ⑪ 第2層により盛土の塚の北西コーナー部に生える杉は54の年輪を数える。
- ⑫ ⑨と⑩により、第2次盛土がなされたのは、明治中期以降から大正頃の間におこなわれたものと考えられる。
- ⑬ 塚上の地蔵尊は、慶應2年(1866)の作であること。また竿柱の破片が封土中より検出されたことによって、当初から本塚に建立されたものと考えられる。

以上のような事実関係から塚の構築過程についてみると、次のような手順を経て本地蔵塚が作られていると考えられるのである。

- 第1作業 表土のある範囲で取り除く。
- 第2作業 土壤を掘り、その土砂礫を北側におく。
- 第3作業 土壤底部に比較的大きめの石を敷く。この石は土壤を掘るため第6層を掘り、その際に出土した礫中から選択されたと推定される。
- 第4作業 土壤に何かを納めて、掘り上げた土砂礫をもって埋める。
- 第5作業 土壤と塚を築く場所の中心部に東西3.5m、南北約3.0mの範囲で茶褐色土を厚さ10~20cmで敷きつめる。
- 第6作業 黒色土をもって土を盛り、方形と推定される第1次の塚を造る。
- 第7作業 塚上に松が植えられたか、又は自生した。この時期は、天保12(1841)年に近いその年以降の年代が考えられる。
- 第8作業 慶應2(1866)年に塚上に地蔵尊が安置された。
- 第9作業 塚の修築、第2次的な土盛がおこなわれて、第2次の塚が造られる。この際地蔵尊像は新らたに盛られた塚上に置きかえられたが、その時点では竿柱はすでに破壊しており、竿柱はその機能を喪失していたため、供物台として利用された。この作業は明治時代の中頃より新らしく、大正9年より古い期間内で行なわれた。
- 第10作業 その後、幾度かにわたって地蔵尊像を納める小仏堂が建立されたが、昭和48年

3月に最後のものが建立された。

したがって、地蔵塚は上記の10段階の作業過程をへて調査時にみられた姿となったものであるが、この10段階の作業は一気に行なわれたわけではなく、まず第1～第6作業を、そして第7作業、しばらくして第8作業が、その後約50年ほどへて第9作業がおこなわれてから第10の作業となる。このように本塚は、土壌と第1次盛土、植松、地蔵尊の建立、第2次盛土の作業をへて完成していると言える。

(金子拓男・和田寿久)

(2) 地蔵塚の性格

地蔵塚の周辺地域には、8基の塚が存在したことは先述したが、本塚が単基で本来の意味をもつものか、あるいはそれらの塚と組合されて塚群内のひとつであるのかは、その性格付けに重要な意味をもつものと思われる。地蔵塚を塚群中の1基とした場合、塚間隔が大きすぎる感があり、また配列・配置に規則性が認められず、伝承・伝説が本塚のみに語られていることや他の塚とその形態や規模等に差がみられる事からその可能性は薄い。特に中之坊絆塚とは、その規模・盛土方法・出土遺物・時代と明らかに相異があり(中村孝三郎1975A)、また蛇山第4号塚の旧跡には土壌はみられないことからも他の塚とは関係をもたない本塚単基で独立したものと考えられる。そして地蔵尊像の存在も単基独立の性格を示唆するものであろう。

また、本塚が海岸部と山間部を結ぶ旧小千谷街道(浜道)の道際に位置しているが、塚の構築時には街道の存在が知られることから、街道を意識して構築されたと判断されたので、旧小千谷街道との関連において把握すべきものと考えられる。

塚構造についてみると、地蔵塚は土壌と敷土と盛土をもって構成される。土壌は掘り上げの土砂利をもって埋めていることから、何か(×)をそこに納めたと判断される。またそれ以後の作業が本塚には伴なうが、塚構築の作業過程とその目的のパターンは下記のように表記されるものと考えられる。

〔盛土+土壌(+×)〕 = A

〔盛土+土壌(+×)〕 + 松 = B

〔盛土+土壌(+×)〕 + 松 + 地蔵尊 = C

〔盛土+土壌(+×)〕 + 松 + 地蔵尊 + 盛土 = D

すなわち、本来の塚構築の目的(A)に加えて、その後の加工による目的(B・C・D)が存在する。そしてその後の行為の目的(B・C・D)と本来の目的(A)が合致するものが否かは、塚の性格の変遷を知る上で重要な要素である。第1次の塚に加えられたものから思考する場合、松は塚の所在、景観上の意味をもつと同時に、松が古来操や長寿を表わすものからして、その意味を内蔵している可能性を示す。地蔵尊の建立は、本塚構築約25年後と推定されるが、この時点では本来の目的が明らかであったと推定される時代であり、地蔵尊が六道の衆生

を救済する仏といわれ、また近世に歌われた「西院川原地蔵和讃」の内容から追善供養の意味をもっていると思われる。また、地主佐々木多一郎の曾祖父京太郎は、塚上の地蔵尊に厚い信仰を持っていたといわれ、第2次盛土は京太郎がおこなったものらしい。仮に京太郎が第二次盛土をした場合、彼が本来の意味（A）を熟知しておこした行為であったのか、あるいは啓拂する行為の結果として地蔵尊の再安置に伴なう基壇整備としておこなったものかは定かではないが、塚上の石組や小祠をみると後者の感が強い。したがって、A・B・C・Dが、土壇におさめられた（x）に対しておこなったものであれば、四つの目的は原則的に一致するが、上記の仮定からみるとA・B・C・Dの目的は、段階的に変質しているとみなくてはなるまい。

地蔵塚は江戸時代末期のものであることは先述したが、この期の塚については発掘調査例が乏しく比較すべきものがあまりみられない。筆者はかって方形プランで断面が台形状をなす塚をA型～E型の5タイプに分類した（金子拓男 1974）。本塚はその中のC型タイプの塚すなわち修验者の墓に相当すると思われる。

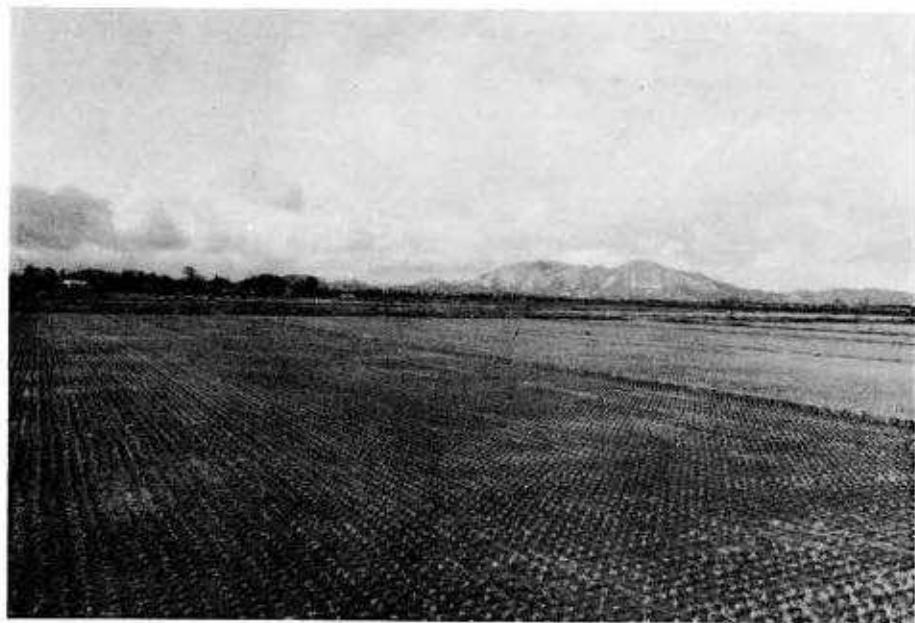
修验者の墓の例は、松江市桧山古墓以外調査例としてはあまり知見しない。桧山古墓は、円型又は橢円形のマウンドに、円形・橢円形・方形の墓壇をもち、その中に桶形棺や箱形棺が確認され、銅鉢・錫杖・法螺貝・袈裟・数珠・錢・かわらけ等の副葬品が出土している。これらの副葬品から、桧山古墓は江戸時代の修验者墓との性格がなされた（近藤 正 1971）。

土壇をもつ地蔵塚は、桧山古墓にその造構から比定することが可能であると思われる。土壇は「墓壇」であって、江戸時代末期のこの期にあっては死者を埋葬したとの見方が妥当と思われる。すなわち、（x）=死者である。しかしながら、調査に際して土壇からは何ら遺物は発見されず、埋葬されたであろう人物については、推測する材料は何もない。桧山古墓の例からして修验者あるいは行者といった身分であったのかも知れない。いずれにせよ、墓石が定着しつつあった天保年中頃に塚を造り、丁重に埋葬された墓として本塚をみると、常人ではないと推測が許されはしないだろうか。

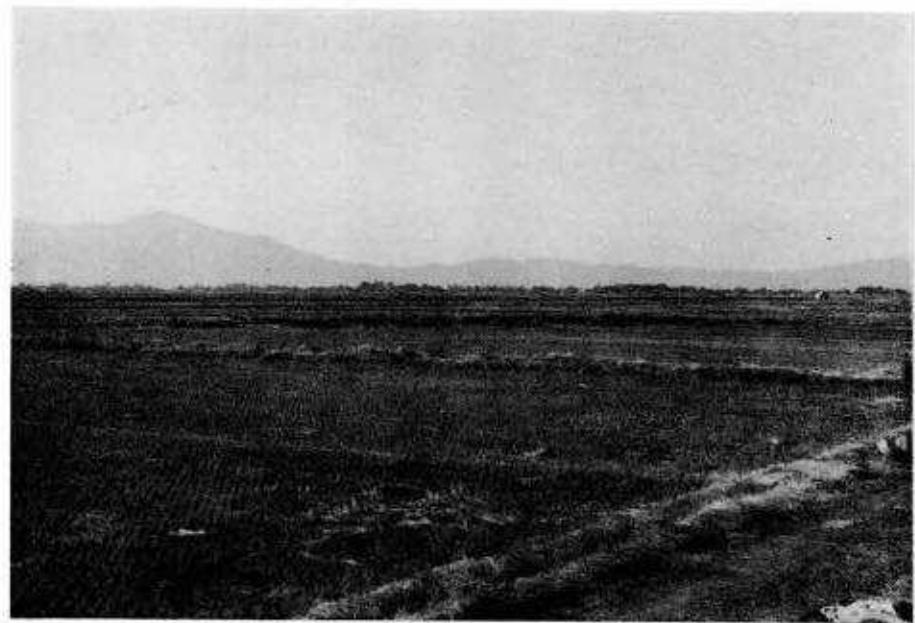
（金子拓男）

【引用参考文献】

- ア 青山礼志 (1974) 「貨幣手帳」株式会社ボナゾ
- 阿部義平・舟崎久雄 (1967) 「富山県井波町高瀬遺跡発掘調査概報」富山県教育委員会
- イ 稲岡嘉彰・中村孝三郎・金子拓男 (1970) 「朝日百塚・並松遺跡」越路町教育委員会
- 井上慶隆 (1969) 「療養院記」長岡郷土史第8号、長岡郷土史研究会
- 井上唯雄・小林敏夫 (1975) 「十三塚遺跡発掘調査概報Ⅰ」推定上野国佐位郡衙遺跡、群馬県文化財保護協会
- カ 金子拓男 (1967) 「新潟県柏崎市剣野E地点遺跡出土遺物について」信濃第19巻第2号
- 金子拓男・戸根与八郎 (1974) 「川治百塚第6号塚」北陸北線埋蔵文化財調査報告書、新潟県教育委員会
- コ 駒形敏朗・関雅之・荒木繁雄・家田順一郎 (1972) 「ツベタ遺跡発掘調査報告」安田町教育委員会
- 近藤正 (1971) 「松江・檜山古墓群」島根県埋蔵文化財調査報告書第Ⅲ集、島根県教育委員会
- サ 佐藤繁 (1967) 「ビール(日本のビール工業)」世界大百科事典第19巻、平凡社
- セ 関雅之 (1971) 「耳取遺跡」見附市教育委員会
- ト 戸根与八郎・伊藤正一・関雅之 (1974) 「大平城跡・牛ヶ沢双ツ塚調査報告」北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書、新潟県教育委員会
- ド 土井義夫・中川成夫・川上貞雄 (1973) 「新潟県北蒲原郡笛神村狼沢窯址群の調査」笛神村文化財調査報告4、笛神村教育委員会
- ナ 中川成夫・小出義治・甘禮健 (1958) 「古志郡山木村間野窯址発掘調査報告」越佐研究第13号
- 中島栄一・中村孝三郎 (1975) 「芹沢・八幡平遺跡緊急調査報告書」下田村文化財調査報告第2輯、下田村教育委員会
- 中村孝三郎 (1966) 「先史時代と長岡の遺跡」長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎 (1975A) 「越後國文風土記の丘・馬高丘陵」長岡市立科学博物館研究調査報告第13冊
- 中村孝三郎・中島栄一・池田享・金子拓男・小日向正・金子正典 (1975B) 「長表遺跡」六日町文化財報告書第2輯、六日町教育委員会
- ニ 新潟県教育委員会 (1975) 新潟県遺跡地図
- ヒ 平田天秋・橋本澄夫 (1973) 「加賀市西島遺跡」県営加賀中部第2地区(西島地区)圃場整備事業関係埋蔵文化財発掘調査概報、石川県教育委員会
- ホ 本間信昭・関雅之・玉木哲 (1973) 「南蒲原郡栄村半ノ木遺跡調査報告」北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書、新潟県教育委員会



長所遺跡の遠景（東側より）



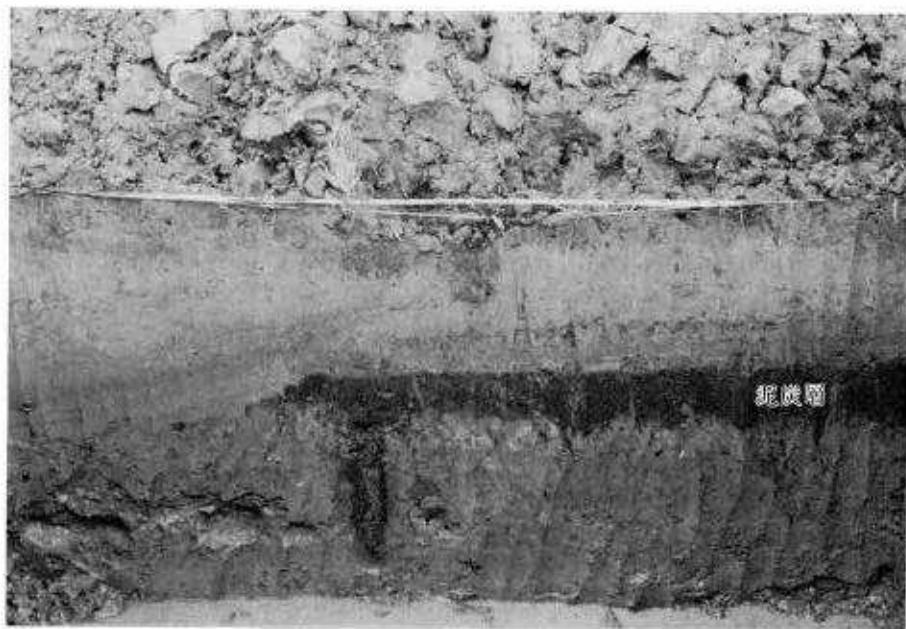
長所遺跡の近景（東側より）



長所遺跡の近景（南側より）



発掘風景



19 A 北側断面



19 A 木杭出土状態



11 I 北側断面



15 E 西側断面



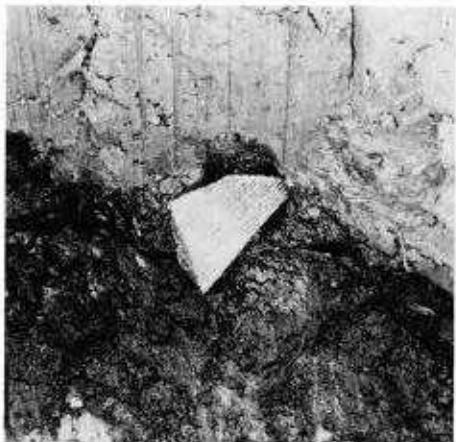
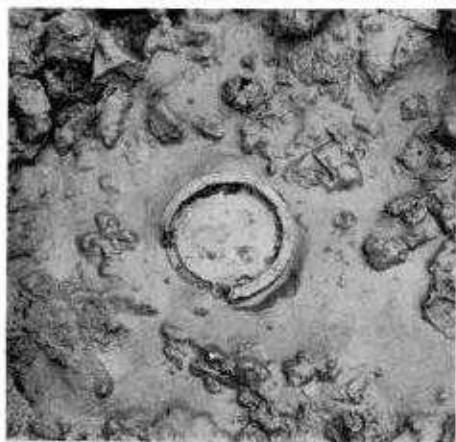
17 C 北側断面



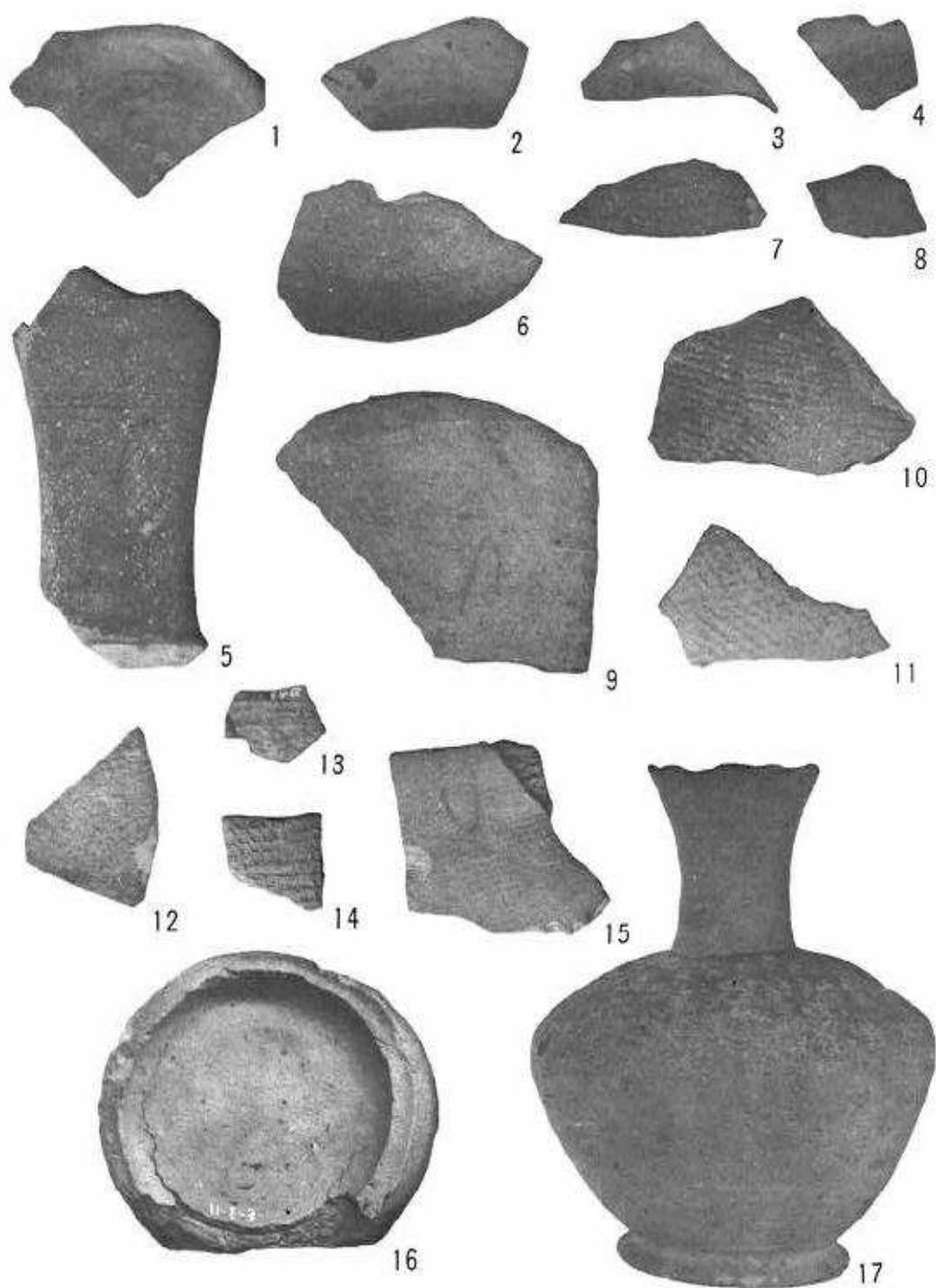
遺物出土状態（須恵器長頸壺）



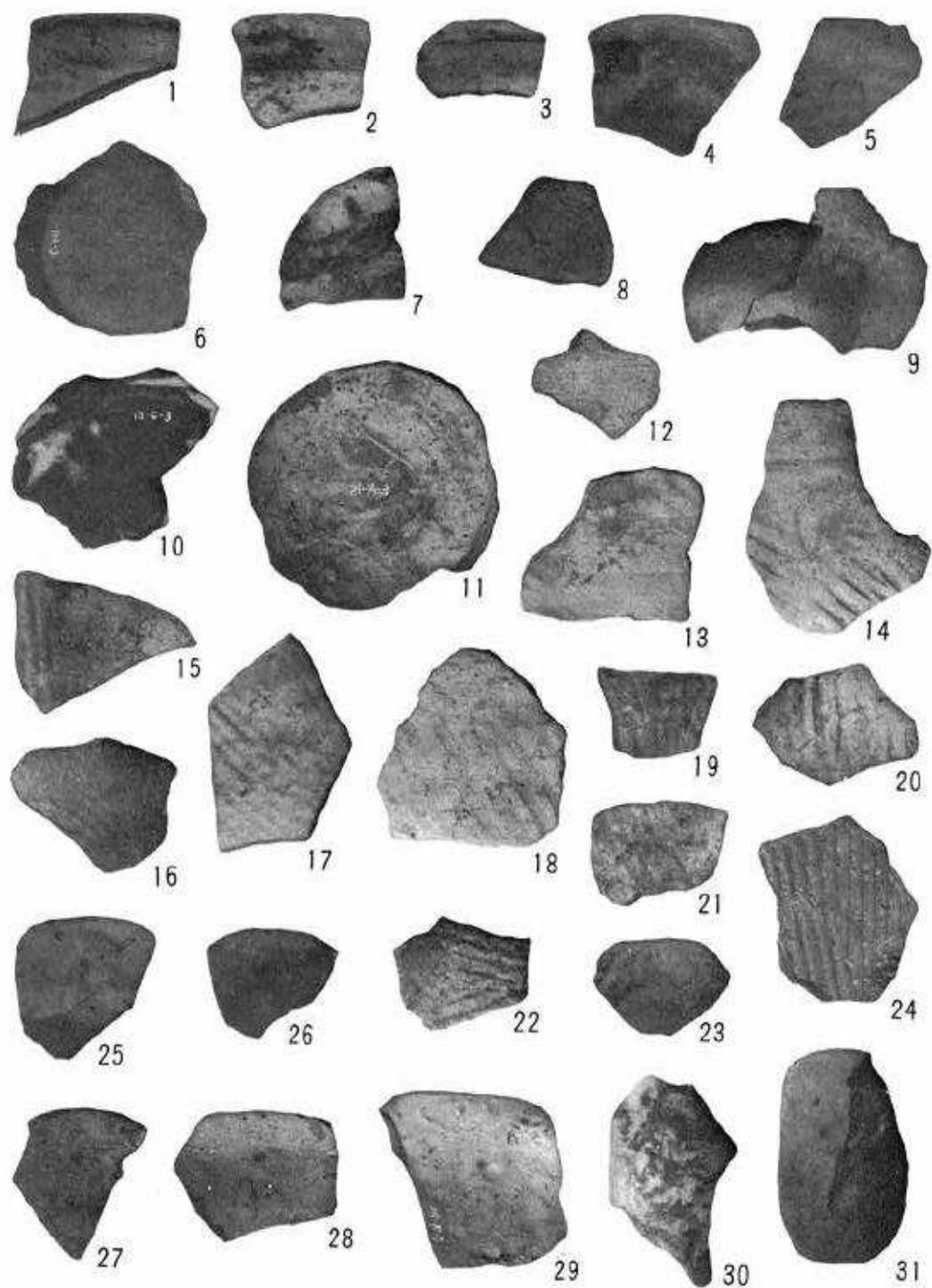
遺物出土状態（中世陶質土器）



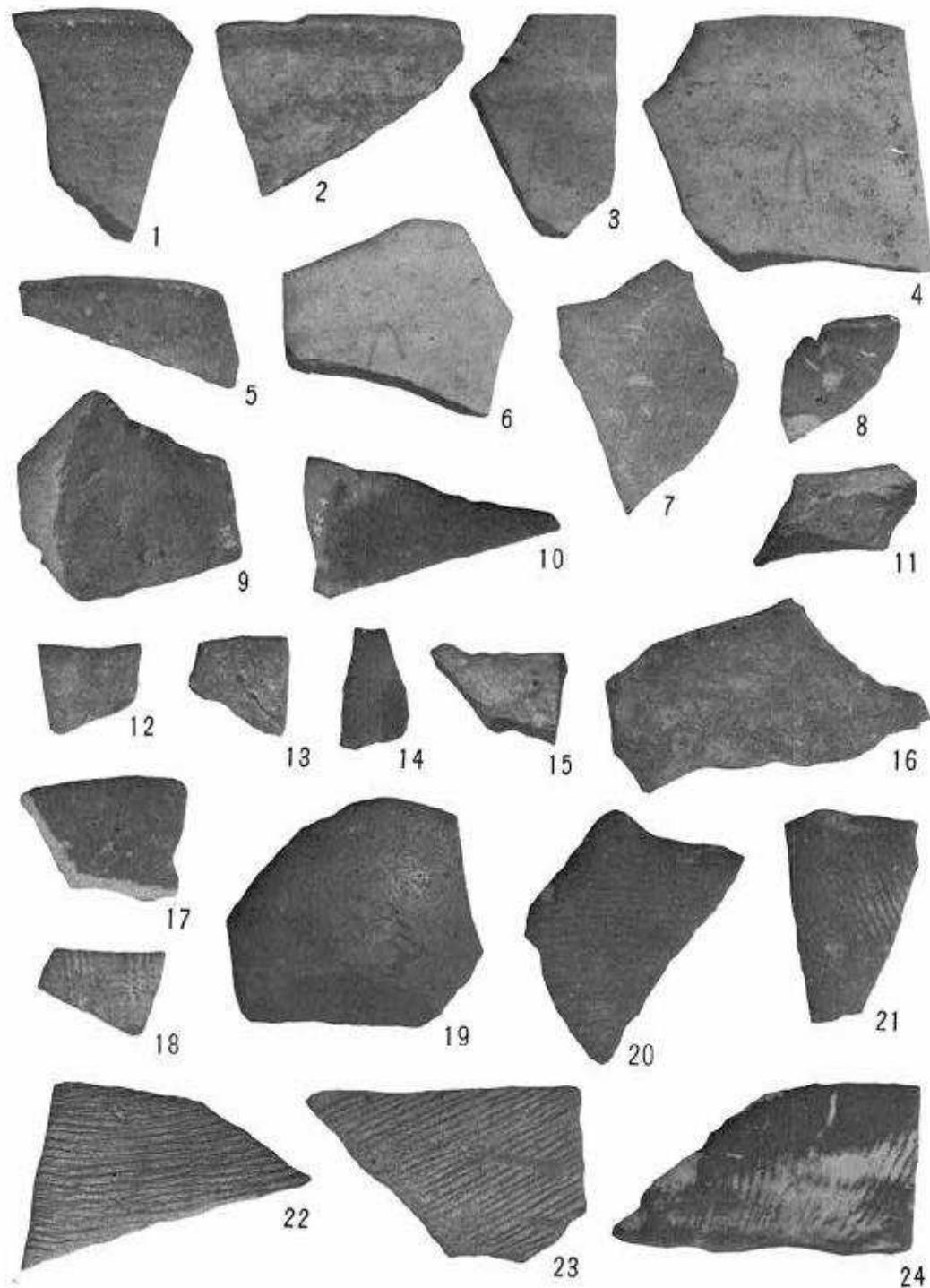
遺物出土状態（須恵器・中世陶質土器・棒状木器）



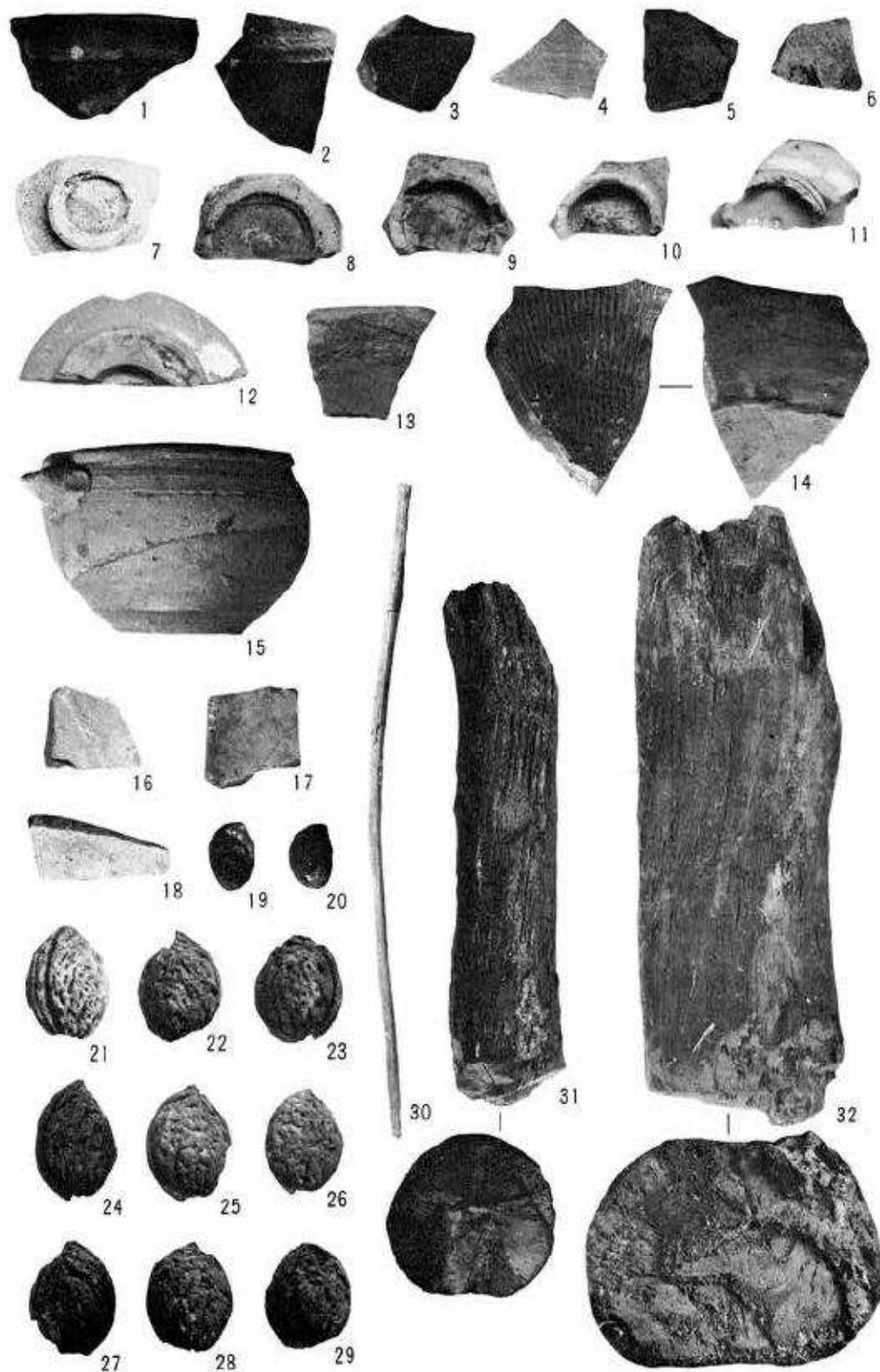
須恵器 (17は燕市教育委員会蔵)



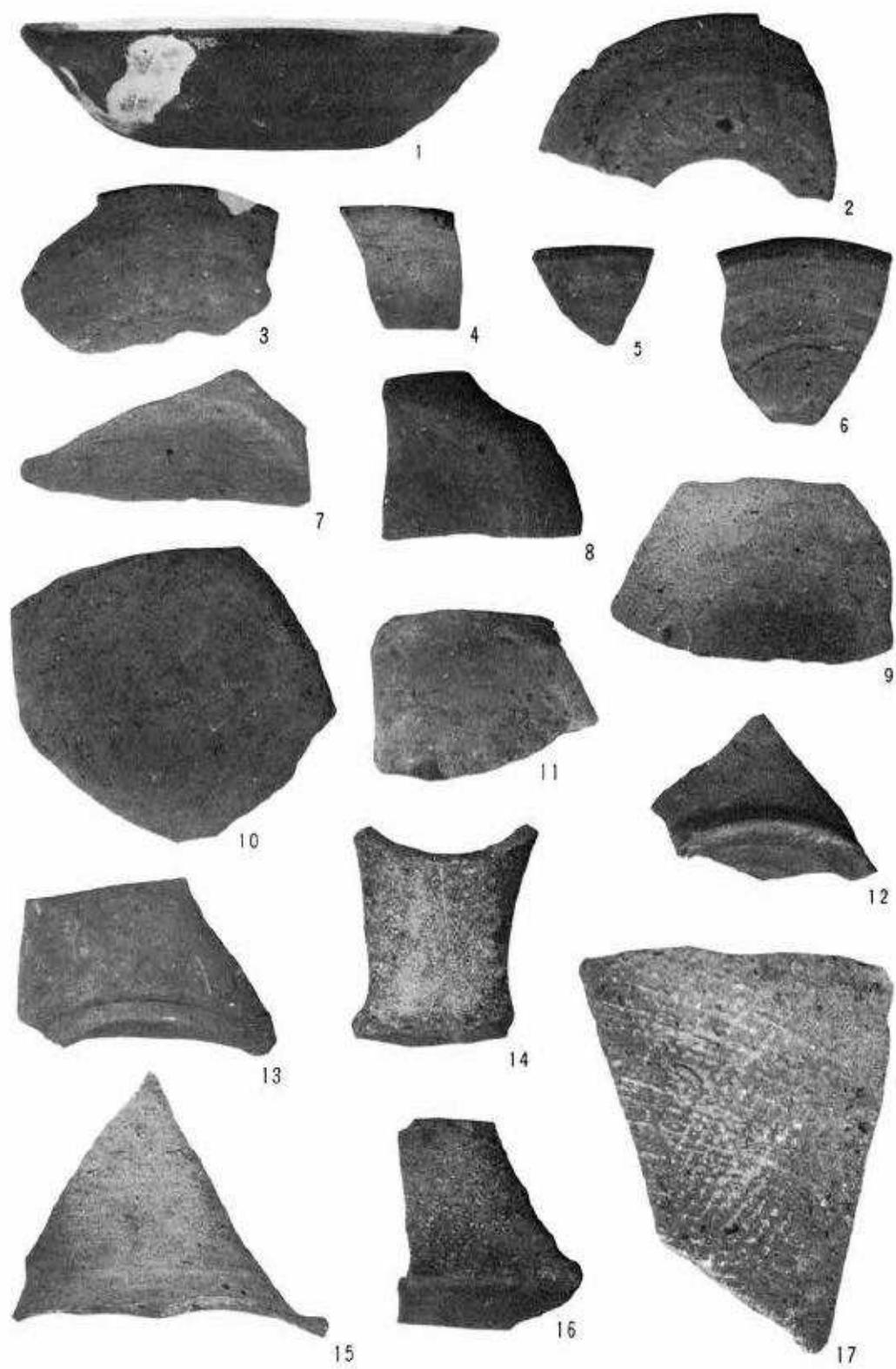
土師器、土師質土器、土鍤



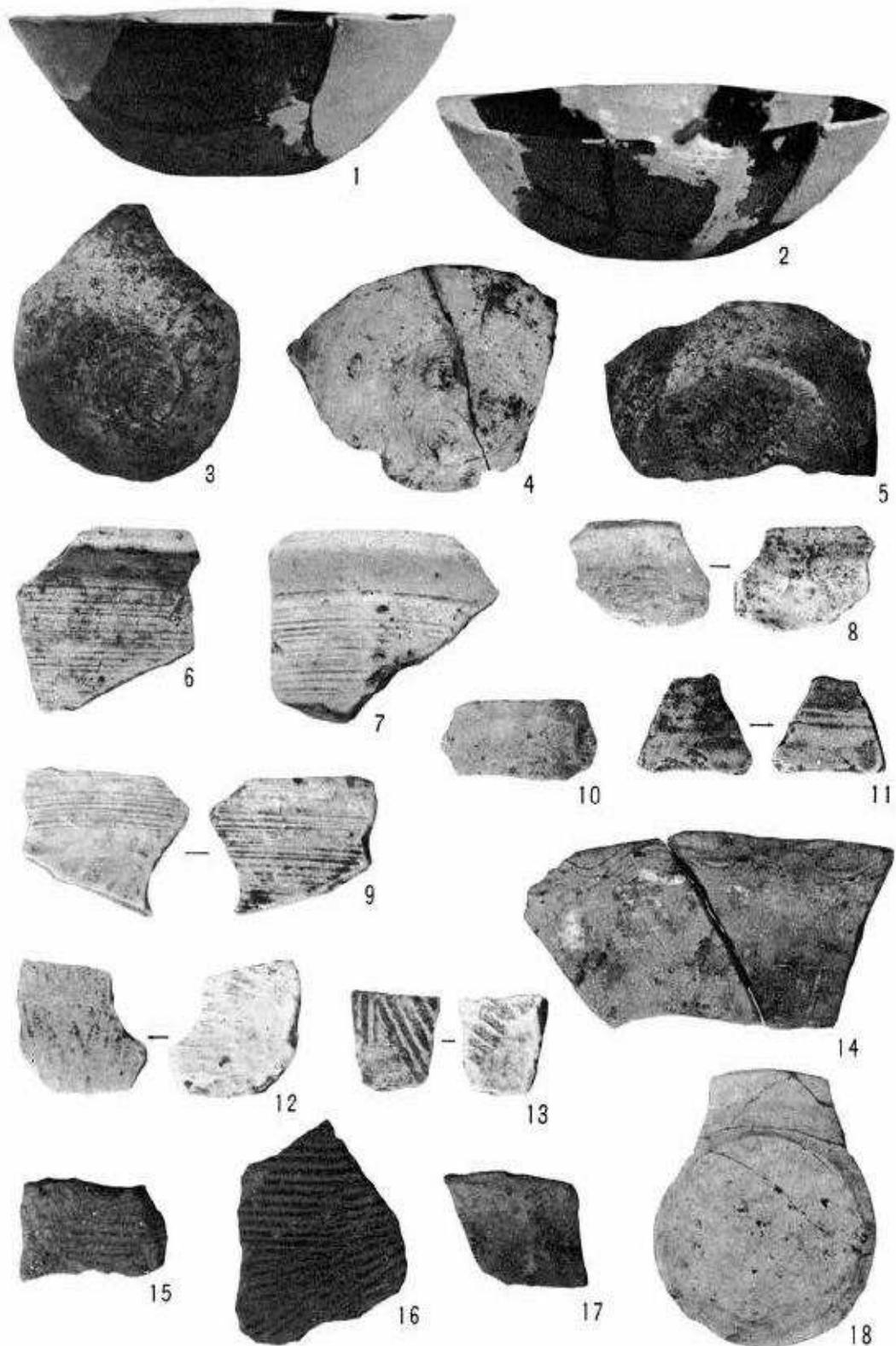
中世陶質土器



近・現代陶磁器、砥石、植物種子、棒状木器、木杭



浦田川東遺跡出土遺物



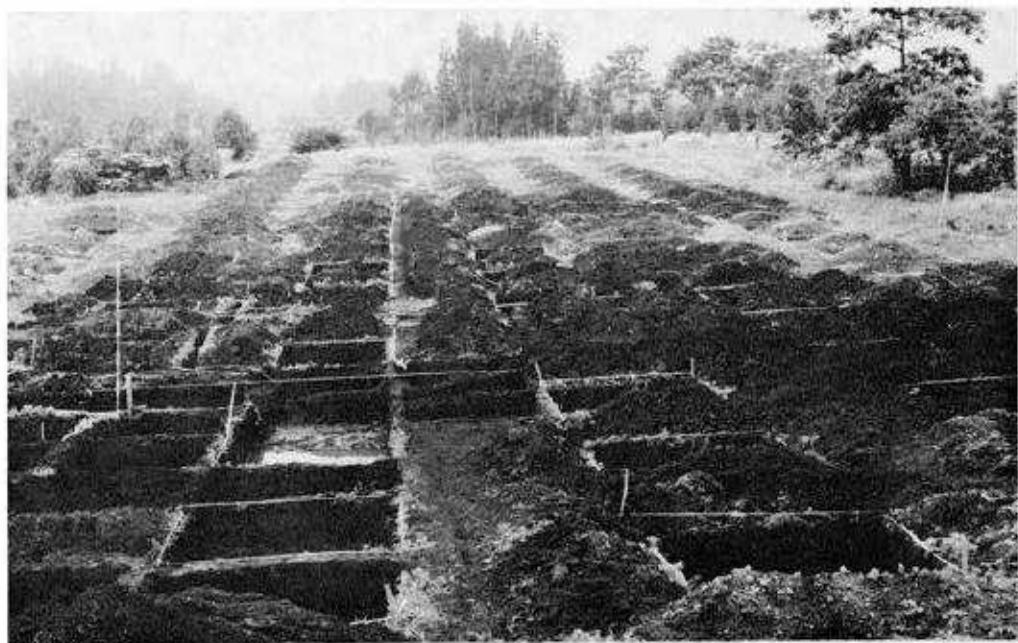
浦田川東遺跡出土遺物（1～13）、長所館跡出土遺物（14～18）



蛇山遺跡周辺の航空写真



蛇山遺跡近景（南から北にのぞむ）



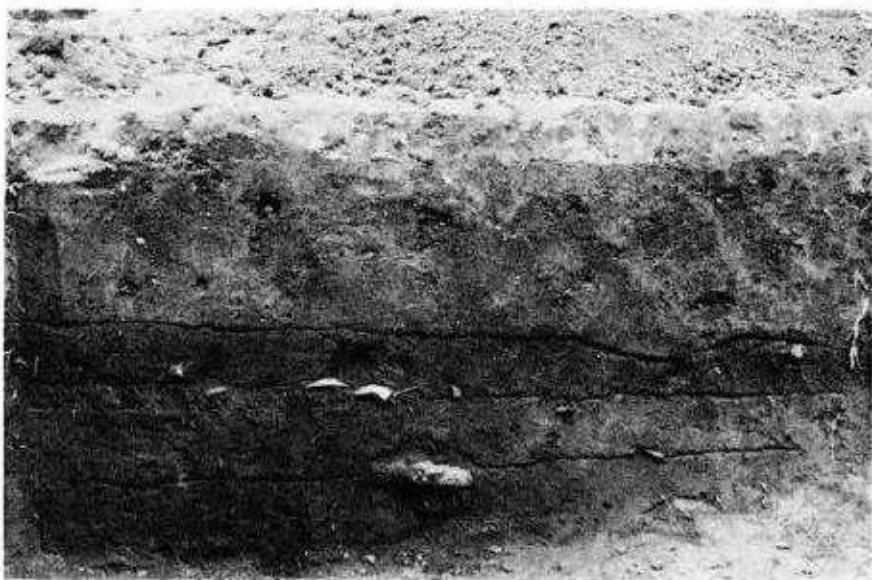
発掘グリッド（北から南にのぞむ）



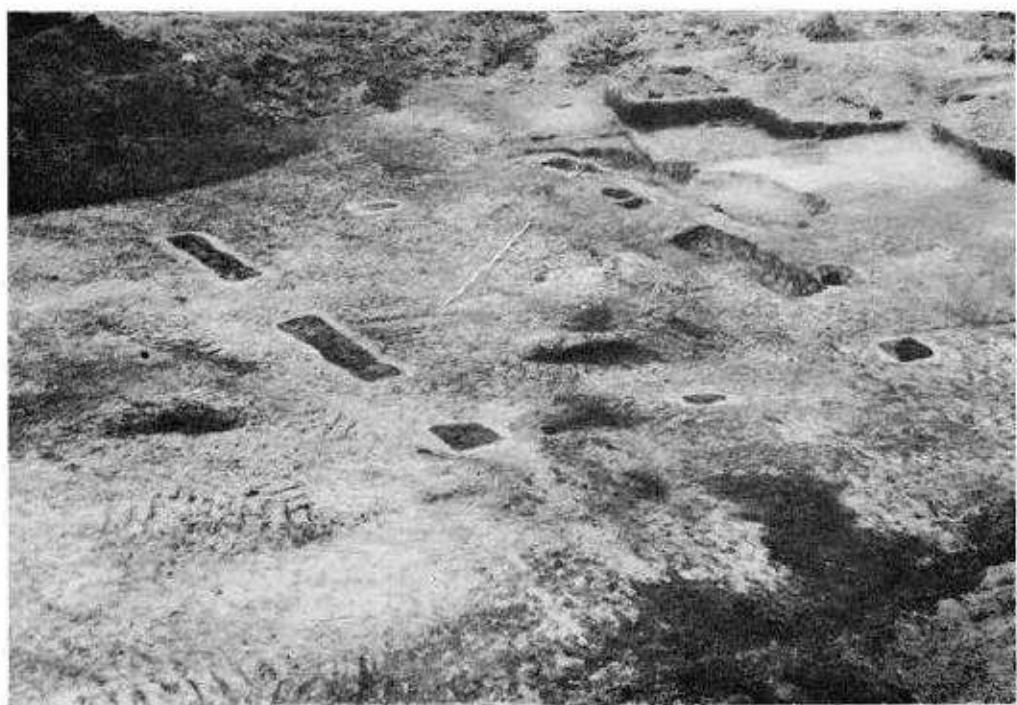
1 BN 26 壺出土状況



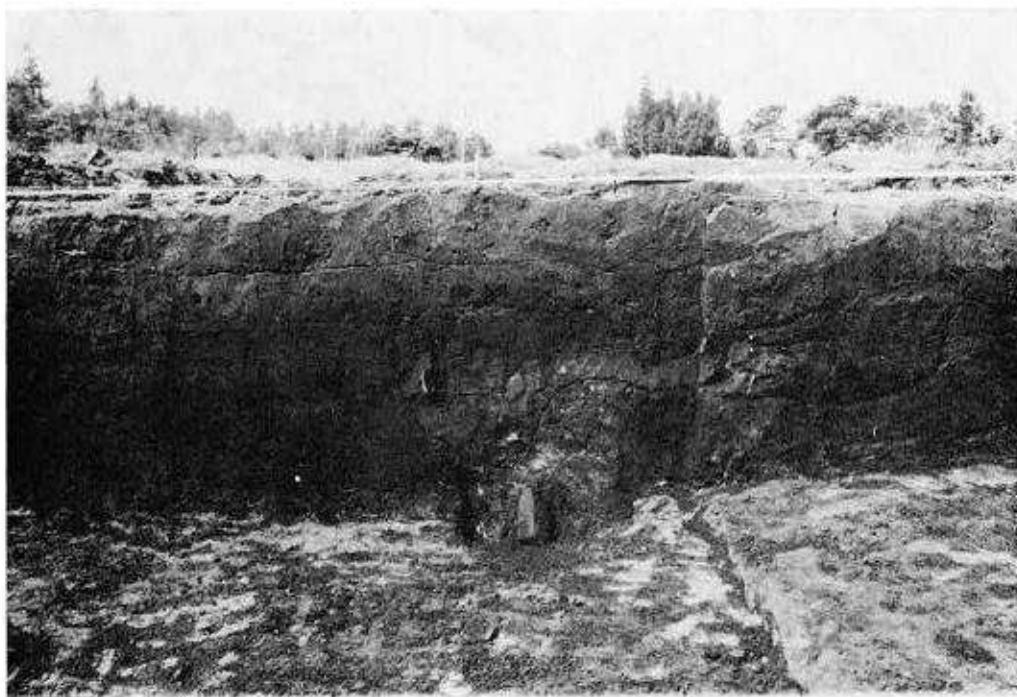
2 BN 28 壺出土状況



3 BP 31 東壁断面



建物跡（南東より）



BO 29 南側断面にみられる柱穴 (P₅)



建物跡（西側より）



建物跡（北より）



1. 潛状遺構と北側柱穴列（東側より）



2. 潜状遺構と北側柱穴列（西側より）



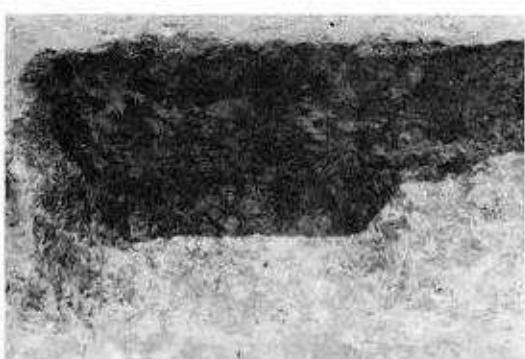
3. 柱穴 2 の根固め状況



4. ピット 13



5. 柱穴 1



6. 柱穴 2



7. 柱穴 4



8. 柱穴 4 とピット 14



1. 柱穴 5



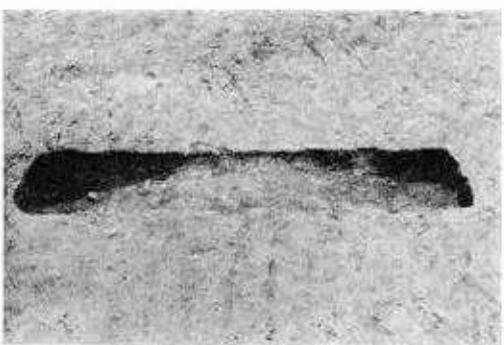
2. 柱穴 5



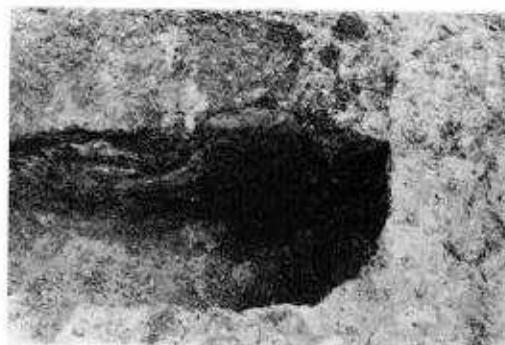
3. 柱穴 6



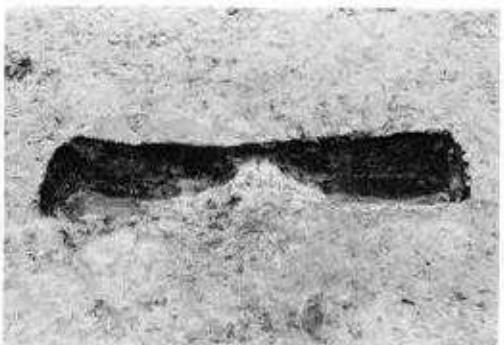
4. 柱穴 7



5. 柱穴 9 と 柱穴 8



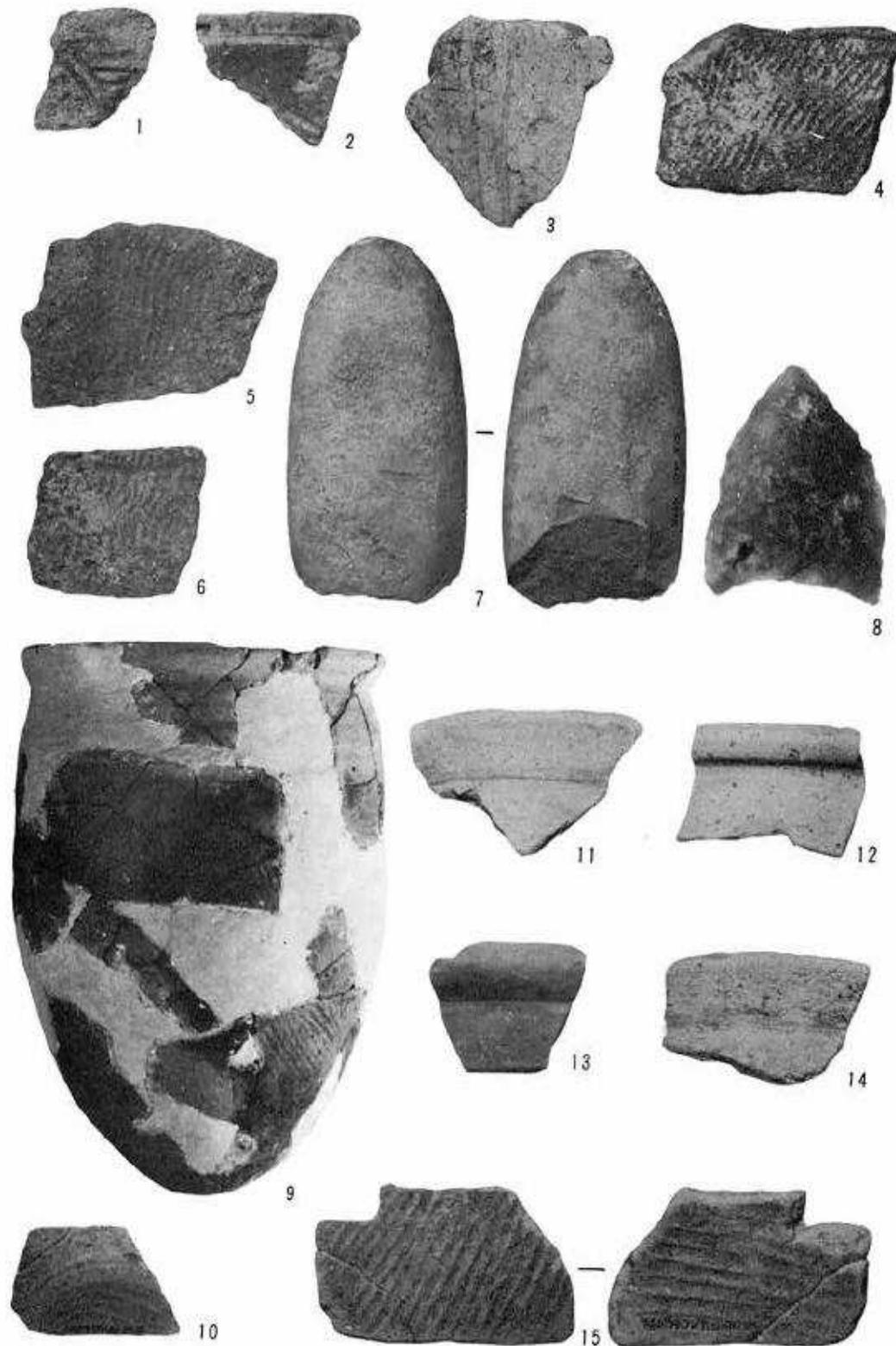
6. 柱穴 8 の拡大



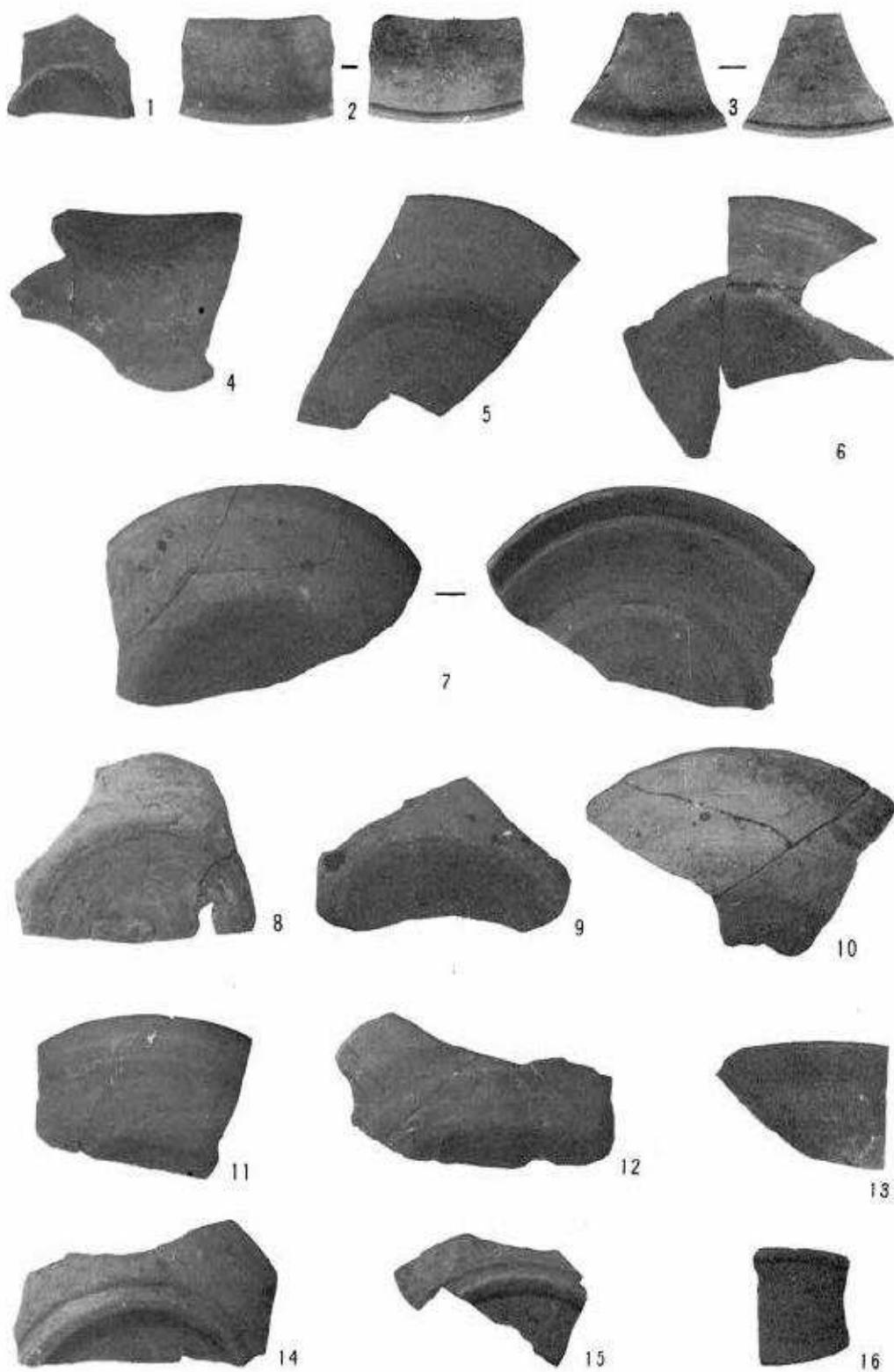
7. 柱穴 11 と 柱穴 10



8. 柱穴 12



蛇山遺跡出土遺物 8(8/5) 9(4/9) 他は1/2



蛇山遺跡出土の須恵器 (1/2)



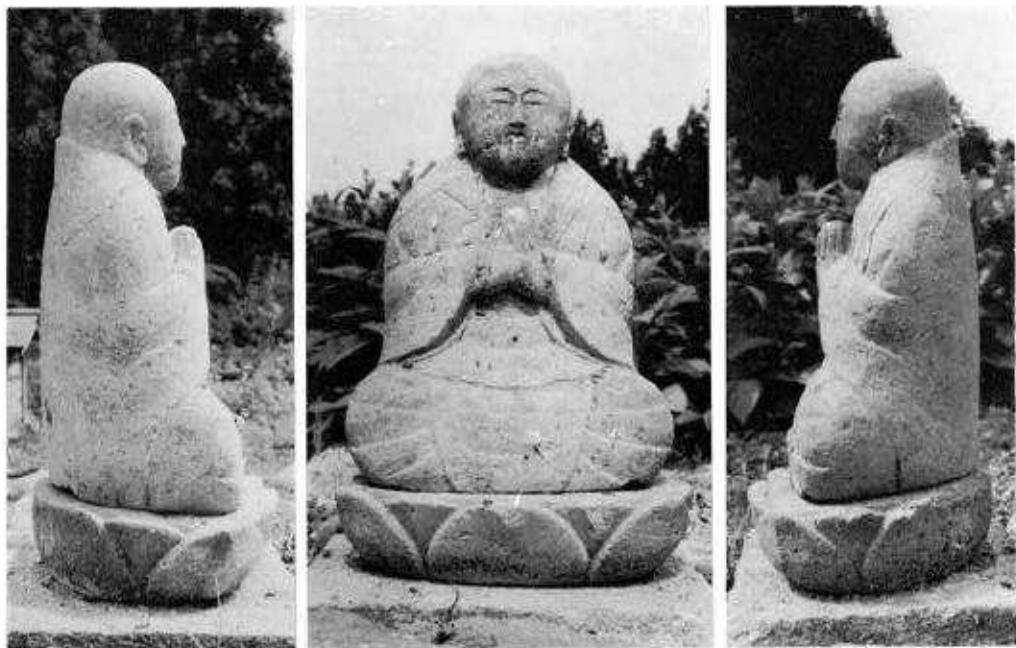
地蔵塚の全景（東より）



地蔵塚の全景（北東より）



1 地蔵塚の近景（東より）



2 地蔵尊像（三方向より）



1. OCセクション



2. OAセクション



3. ODセクション



4. OBセクション



5. 宽永通宝出土状態



6. 灰釉陶器出土状態



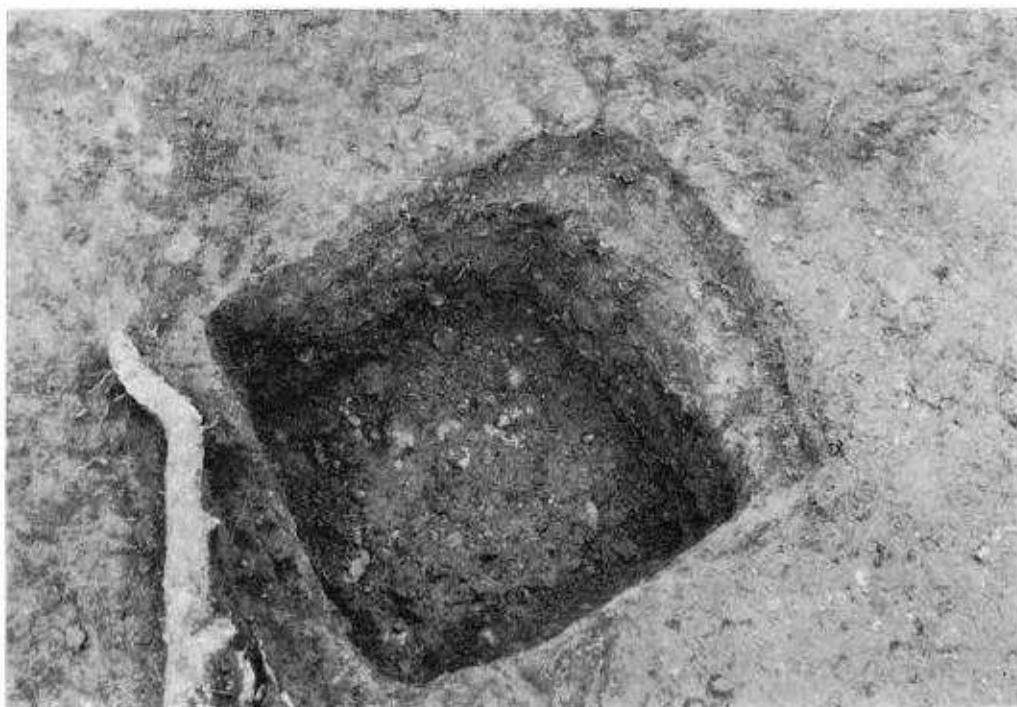
7. 松の年輪



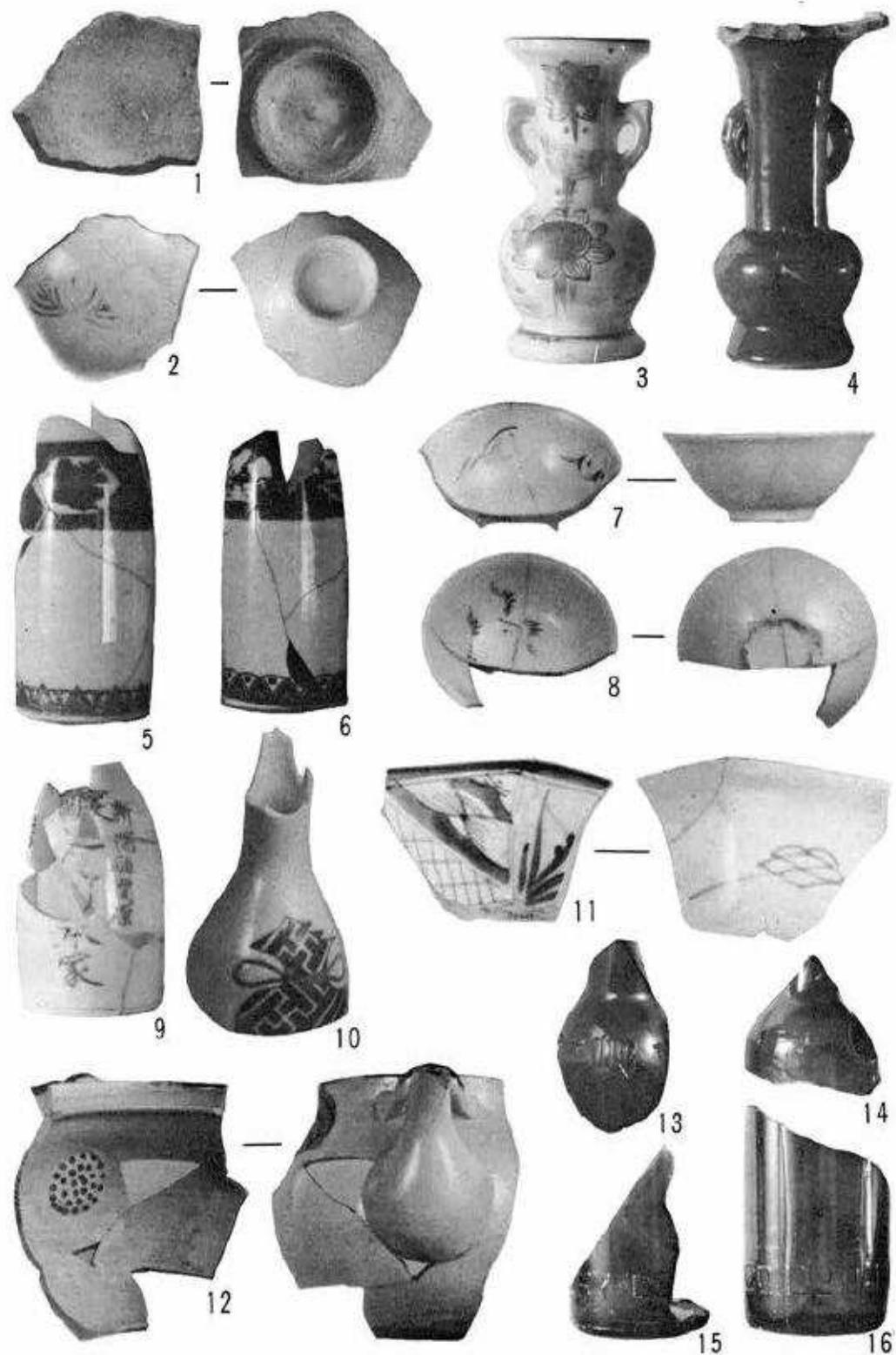
8. 杉柱



1. 土 塹 (東より)



2. 土 塹 (北西より)



地蔵塚出土遺物

新潟県埋蔵文化財調査報告書第6

北陸高速自動車道
埋蔵文化財発掘調査報告書

長所遺跡

姫山遺跡

地蔵塚

—1976—

昭和51年3月10日 印刷

昭和51年3月20日 発行

発行 新潟県教育委員会

印刷 ④長谷川印刷

新潟市学校町通1番町6

TEL 025 3309番

新潟県埋蔵文化財調査報告書第6 正誤表

ページ	行	誤	正
例言	3	が委嘱を受けて	が委託を受けて
例言	9	たり、発掘担当者と	たり、発掘担当者と
1	下14	青木宏調査員	青木宏両調査員
10	下1	1・2は長胴の	12・13は長胴の
12	4	7図7~19	8図7~19
12	10	もある。14~16は	もある。第7図14~16は
21	下1	は巻町幕島	は分水町幕島
23	9	範疇には入るもの	範疇に入るもの
23	下13	図版第7図20	第7図20
24	15	城館・集落・官衙	城館・集落
27	2	昭和47年には	昭和46年には
28	10	案内を送る。	案内状を送る。
31	下3	A蛇山遺跡	A蛇山遺跡
36	1	柱穴を1基づつ	柱穴を1個づつ
36	下8	図版15図3、第3図	図版第15図3、図版第16図下、第3図
37	5	P12-296-11.	P12-296-P11
39	7	壺3片3個体	壺3片2個体
42	5	壺が15、壺が3、高台付壺が2、	壺が18、壺が2、高台付壺が2、
42	5	蓋形土器	蓋
42	下6	高台付壺	高台付壺
42	下5	壺形土器	壺
48	下11	土と黄褐色の	土と黄褐色土の
58	下8	土壤(+x) + 柏	土壤(+x) + 松
59	10	乏しく比較すべき	乏しく、比較すべき
59	8	性格がなされた	性格付がなされた